
悪魔が来たりて恋を知る
AKUMA
Illustration:
石川沙絵
Meiya Onogami
小野上明夜
一迅社文庫アイリス

悪魔が来たりて恋を知る

小野上明夜
MEIYA ONOGAMI

一迅社文庫アイリス


悪魔が来たりて恋を知る
AKUMA

悪魔が来たりて恋を知る

小野上明夜
MEIYA ONOGAMI

一迅社文庫アイリス

CONTENTS

序章　ささやかな野望　8
第一章　媚薬と魅了　12
第二章　甘い誘惑　56
第三章　試して、確かめて　116
第四章　理想の騎士　184
第五章　原罪の悪魔　218
終章　ささやかな幸せ　276
あとがき　285

アドルニ

低級夢魔の青年。ミアリを子分のように扱い、ユーシウスの魂を堕落させるよう命じる。

カルガ・ナズル

ユーシウスの従騎士。騎士を憎んでおり、弱みを握って告発することが生き甲斐。

悪魔

魔界の住人。人間の魂を堕落させ、精気を吸い取ることで力を高める。人間とは敵対している。

聖騎士

悪魔狩りに特化した騎士。騎士であり聖職者であるため、基本的に住まいは女人禁制。

ルマリア帝国

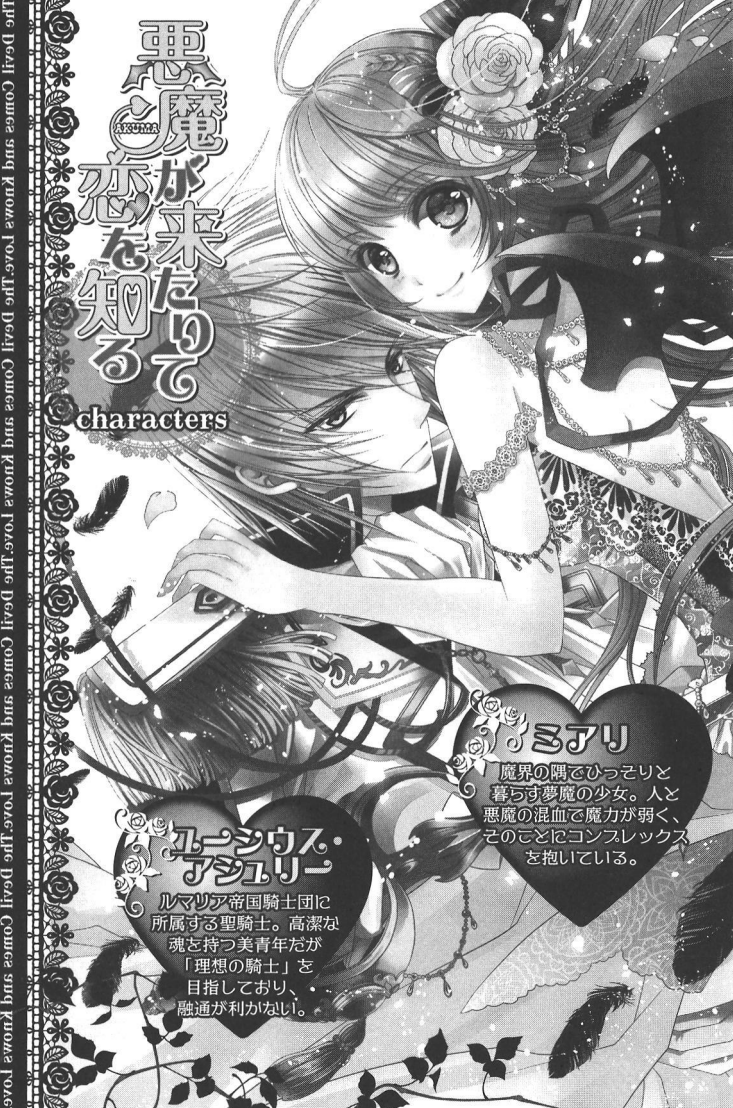
ユーシウス達が暮らす人間界で最も巨大な帝国。過去に六つの国を支配し、拡大した。

The Devil Comes and Knows Love.The Devil Comes and Knows Love.The Devil Comes and Knows Love.The Devil Comes and Knows Love.The Devil Comes and Knows Love.

悪魔が来たりて恋を知る

AKUMA

characters



ミアリ

魔界の隅でひっそりと暮らす夢魔の少女。人と悪魔の混血で魔力が弱く、そのことにコンプレックスを抱いている。

ルーシウス・アシュリー

ルマリア帝国騎士団に所属する聖騎士。高潔な魂を持つ美青年だが「理想の騎士」を目指しており、融通が利かない。

The Devil Comes and Knows Love. The Devil Comes and Knows Love. The Devil Comes and Knows Love. The Devil Comes and Knows Love.

イラストレーション◆石川沙絵

悪魔が来たりて恋を知る

The Devil Comes and Knows Love.

序章　ささやかな野望

濃い紫の闇に覆われた永遠の夜空を、死人のように青ざめた凍る月が照らし出している。全能の神に弓引いた罪により、天の国を追われ悪魔と呼ばれるようになった者たちが暮らす魔界の端の荒野で、ひとりの少女が必死に首を振り続けていた。

「私には無理です、アドルニ様……」

魔界第二層を永遠に吹き続ける暴風に、その声はかすれて今にも消えてしまいそうだ。

「無理でもやるんだ。俺の言うことが聞けないのか？　ミアリ」

足首までを覆う濃い灰色の外套と一体化した頭巾を目深に被り、首を振る少女を見下ろすのは、腕組みをした若い男だ。魔界七大公のうち、淫欲公に連なる下級夢魔のアドルニである。青みを帯びて見えるほど艶やかな黒髪を額の中央で分け、切れ長の紺碧の瞳でミアリを見下ろすその姿は、絶世の美青年と言っていいだろう。ゆったりとした布でできた服のあちこちから露出した肢体を見れば、いかに貞淑な貴婦人であってもその誘惑をはね除けるのは難しい。

ただし、夢魔の容姿が美しいのは当たり前のこと。高位の夢魔であればひと目見ただけで相手を虜にするほどの能力を有しており、アドルニ程度の美形は魔界には掃いて捨てるほどいる。

「も、申し訳ないですが、やっぱりできません。私にできるのは、ええと、ここでずっとその辺に転がっている石の数を数えることぐらい……」

「お前がしょぼい魔力しか持たない底辺悪魔であることは俺だって分かっているが、さすがにそれ以外にできることはあるだろう!?」

ぼそぼそと伝えられた言葉のあまりのやる気のなさに、アドルニの声も高くなる。

「ない訳じゃ、ないですけど……だってあんまりたくさん魔力を使うと、すぐにまた精気が必要になりますし……アドルニ様の手を、わずらわせるのも申し訳ないですし……」

ぼそぼそぼそぼそ、聞き取りにくい声で鬱々と続く言い訳をアドルニは強引にさえぎった。

「とにかく、できなくてもやるんだ!!　俺に逆らえば、どうなるか分かっているんだろうな!?」

その背に生えた蝙蝠の羽が、威嚇するように大気を空打ちする。悪魔と戦う力を持たない人間相手ならとにかく、アドルニ風情がそんな真似をしても、他の高位の悪魔やちょっと気の利いた聖職者などになら鼻で笑われてしまうだろう。

しかし人と悪魔の混血であり、彼より弱いミアリは、へこへこと頭を下げるしかない。

「そ、それは分かっていますけど……！　でも、やっぱり無理です。できません。他の方にも堕とせないような方なんて、私になんかとても無理です……!!」

繰り返される「できない」にいら立ったか、アドルニがミアリの頭巾を引き上げようとした。

「ひッ」

短く息を飲んだミアリは、必死になってその手にすがり、声もなく首を振る。
怯えた人の少女のようなしぐさに優越感を感じたのか、アドルニは冷静さを取り戻した。
「……ふん、まあいい。俺の言うことを聞くにしろ聞かないにしろ、お前はどのみちひとりで人間界に行かなければならないんだからな」
わざとらしく吐き捨て、踵を返そうとする彼の捨て台詞に、ミアリははっとした。
「……あ、いえ、その……」
「俺の命令を聞かないということは、俺から精気を分けてほしくない、ということだろう？」
「そ、そういう訳じゃ……！」
取りすがろうと伸ばした指先が、不意に二重に見えた。
自分の指だけではない。勝ち誇るように振り向いたアドルニの顔も、冴え冴えと自分たちを照らす月も、何千何万回とひとり数えてきた荒野に散らばる小石たちも、全てが。
「そろそろ腹が減ったころだろう、と思って来てやったのに、残念だな」
その場に座り込んでしまったミアリを見下ろし、アドルニは大きく蝙蝠の羽を広げた。
「まあ、お前だって夢魔の端くれ。死にかけのじじい程度が相手なら、精気を奪えるかもしれないな。最もその調子では、人間界に行く前に消滅することになりそうだが」
大きく羽を広げて飛び立とうとしたアドルニに、ミアリは必死に手を伸ばした。
「待ってください……！」

強い飢餓感に苛まれながら呼び止めたアドルニは、爪先を空中に浮かせてにやにやしている。
「なんだ？　聞こえないな」
「待ってください、無理だとは思いますけど、やれるだけやってみますから、だから……!!」
お願いします、と涙眼で懇願するミアリの細い指先に、アドルニの指が絡んだ。
「……仕方がない奴だ。俺がいないと生きていけない、どうしようもない、だめな奴」
さも馬鹿にしたような言葉とともに流れ込んでくる、熱くて甘い力の奔流。乾ききった砂地が潤っていくような快感に、ミアリは我知らず小さく唇を舐めた。
夢魔としての力に劣り、ひとりで人間の男を襲って精気を得ることができないミアリにとって、気まぐれに訪れるアドルニだけが頼り。
会うたび小馬鹿にされるし、恩着せがましい言動につき合うのも大変ではあるが、他に手のない身である。他の悪魔にはいじめられるだけなのだから、それに比べればましだ。
「もう一度だけ言うぞ、ミアリ。標的はルマリア帝国騎士団のベルール騎士館長補佐を務める聖騎士、ユーシウス・アシュリー」
いつもよりもたっぷりと精気を分け与えられ、頭巾の下で頬を上気させたミアリの耳に、アドルニは命令を繰り返す。
「この男をお前の力で堕落させ、次の淫欲公に献上するんだ、ミアリ。そうすれば俺もお前も、今よりはましな扱いを受けられるようになるんだからな」

第一章　媚薬と魅了（チャーム）

六つの国を併呑（へいどん）して広がったルマリア帝国。人間世界で最も巨大な帝国の中心部、帝都レティシアの王宮に併設されたベルール騎士館の陰に、ミアリはひっそりと立っていた。

眼（め）くらましの結界の中にいる以上、別に物陰に隠れなくてもいいことは頭では分かっている。日頃他（ひごろほか）の悪魔にいじめられないよう、しょっちゅう使っていた術だから、それなりに熟練はしているはずだ。

だが敵地の最中（さなか）で通用するかどうかの自信がないのと、そもそもの作戦に自信がないため、自然と及び腰になるのだ。

「……どうしよう……」

時刻は真夜中を過ぎ、あたりを照らすのは夜間警備のため灯（とも）された火明かりと、わずかな月明かりのみ。赤煉瓦（あかれんが）を積んで造られた壮麗な建物は眼の前だが、そもそも本当に、ここで合っているのだろうか。

「ううん、ベルールの旗があるもの……ここで合っているはず……」

くすんだ黄色地に、両足を振り上げて咆吼（ほうこう）する翼ある四肢の紋章が黒く染め抜かれた旗。ル

マリアに最初に併合されたベルールの国旗は、見上げた建物の四隅に誇らしげに飾られている。

あまりにも迅速に、あまりにも巨大にふくれ上がった大帝国ルマリア。早すぎる膨張に足並みが揃いきれず、その内部には統合される前のかつての国々の文化が溶け合うことなく残っている。国教であるルマリア唯正教への信仰以外、まるで接点がないような国さえある。

異文化同士が刺激し合うことが、ルマリアの発展に繋がる場合もあった。だが同時に多くの差別と偏見、そして争いをも生み出した。

それらは全て、悪魔たちが好むもの。

人の欲望を嗅ぎつけた悪魔たちはこぞってルマリアを訪れ、人間たちを襲ってその魂を堕落させ、精気を吸い取り力を高めていくのだ。

ミアリだって、一人前の夢魔であればそうしていたはずなのだが……

「……きゃっ!!」

見回りらしき兵士が二人、連れ立ってやってきたことに気づき、ミアリは小さな声を上げた。

「どうした？」

悲鳴が漏れてしまったようだ。ひとりの兵士が立ち止まった。

ミアリの心臓も止まりかけた。思わずひときわ深く頭巾を被り、「殺さないで殺さないで殺さないで」とつぶやきながらしゃがみ込んでしまったが、幸いに眠くらましの術はしっかり働いているらしい。兵士たちは、ミアリとは全く違う方向を向いている。

「いや、何か聞こえたような」

「ないない、大丈夫だって。それよりさっさと見回りをすませて、飲みに行こうぜ。大丈夫大丈夫、いざとなれば我らが補佐官閣下がどうにかしてくださるって……」

片方がもう片方の肩を叩き、半ば強引に歩き出してしまう。ほっと息を吐いたミアリだが、兵士たちが腰から下げた剣が月光を弾いてきらめく様に全身総毛立った。

悪魔たちの襲撃を、当然ながら人間たちも黙って見過ごしている訳ではない。司祭や祓魔師といった聖職者たちが人々を守るために修行に励んでいるが、中でも悪魔狩りに特化したのが、聖騎士たちである。

聖別された銀をあしらった剣で武装した聖騎士たちは、出身国別に分かれ、この一帯にそれぞれ館を構えているのだ。こんなところに身を隠していれば、当然彼らに出食わしてしまう可能性は高い。

もっと高位の夢魔であれば、騎士としても下級と思しき見回り兵士など、食前酒程度に片付けてしまえるだろう。だがアドルニがくれる精気を頼りに、細々と小石の数を数えて生きてきたミアリに戦うという選択肢はなかった。

人間界に出てくる選択肢だって、そもそもなかったのだ。けれど、今さらそれを言っても仕方がない。

「……私ひとりじゃ、魔界には戻れないし……」

夢魔たちが住まう淫欲公の領地の外れから、ミアリをレティシアの側まで連れて来てくれたのはアドルニだ。人間界と魔界を行き来するためには大量の魔力が必要であり、自分で精気を集められないミアリには自殺行為である。

でも、だけど、といまだ決心できず、視線をさまよわせていたミアリは異変に気づいた。

ベルール騎士館の隣にある、一回り小さな建物。そこから、誰かがやって来る。

また見回りの兵士かと思ったが、ぴんと背筋を伸ばして姿勢よく歩くその姿には、特有の風格があり……何より問題なのは、どうもまっすぐ、ミアリを目指して歩いて来ているような。

慌てて逃げようとした時には遅かった。右手を摑まれ、問答無用で引き寄せられる。

「きゃっ……!?」

反射的に振り向いた瞬間、聖なる銀の輝きが瞳を射た。だが、それ以上にまばゆい金の輝きに、恐怖を忘れて見入った。

「君は？」

ミアリの右手首を拘束したまま、静かに問いかけて来るのは、こざっぱりとした白い上着を身に着けた金髪の青年だった。

腰に佩いた剣は、柄から鞘にかけて精緻な銀細工でびっしりと埋められている。先ほどの兵士などとは比較にならないほど高位の騎士であることは一目瞭然だが、その美しさもまた、比べものにならない。

癖のない金色の髪、冷たく見えるほど澄んだ若草色の瞳。高い鼻梁に薄い唇が絶妙な位置に配置されたその顔は、月明かりにきらきらと光り夢のように美しい。

「ユーシウス・アシュリー、さ、ま……？」

気がつけばその名を口に出していた。途端に青年の表情が、かすかな警戒を帯びる。

「……そうだが」

ルマリア帝国騎士団のベルール騎士館長補佐を務める聖騎士、ユーシウス・アシュリー。アドルニに命じられたミアリの標的は、伝え聞いていた以上の美貌を持っていた。

だが、見た目の美しさだけでは魂の価値は測れない。単純にきれいな男ならアドルニで見慣れている。

しかし、ユーシウスから漂う清冽な気配。聖騎士の名に相応しい、近寄りがたささえ感じさせる気高さが、普段はあまり意識しないミアリの夢魔の部分を強烈に刺激した。

――どうしよう。

――この人、ものすごく、おいしそう。

この魂が堕ちる時、どのように甘美な腐臭を放つのだろう。

うっとりとそう思っていると、眼の前にユーシウスの左手が迫っていた。

「……、あっ、だめっ……!!」

頭巾をめくられようとしていることが分かり、ミアリは必死に抵抗を試みた。しかしばたば

たといくら暴れても、ユーシウスは小揺るぎもせず冷たくこちらを見下ろしている。
「顔を見せたまえ。それとも、見せられない理由があるのか」
広大すぎるルマリア帝国の国土には様々な気候帯が入り交じっているが、首都部は現在春の初め。夜も比較的暖かいのだが、ミアリの背筋を真冬の冷気が這い降りた。
ユーシウスは、確か二十歳ほどのはず。身長や体格にもそれほど恵まれている訳ではない。けれど姿勢がいいのと、漂う風格が強い威圧感を生み出しており、容易に逆らえない。実際彼は若くして騎士館長補佐を務める実力者であり、これまで多くの悪魔たちを狩ってきた実績を持つ。
――ああ、でもやっぱり、ものすごくおいしそう……
恐怖も忘れるほどの甘美な予感に、またうっとりとしているミアリの瞳を月の光が射た。ぼんやり見とれている間に、頭巾をめくられてしまったのだ。
「ひっ……!?」
息を呑んだ瞬間、魔界のものとは違う、人間界のほの白い月明かりがミアリの顔を照らし出す。ユーシウスも、はっとしたように動きを止めた。
長いまつげに縁取られた青い瞳は怯えを含み、濡れたような輝きを発している。人にはありえぬ薄紫色の長い髪は、まるでアメジストでできた滝だ。
人間であれば絶世の美少女だろう。しかし夢魔としてはあまりにも平凡であり、見る者をそ

の美しさでねじ伏せるような迫力は全くない。中途半端な美貌では、狩る側でなく狩られる側になってしまうのが世の常だ。

「きゃ、きゃあああっ!!」

己の不出来をよく自覚しているミアリは、慌てて頭巾を引き下げた。ユーシウスもいろいろな意味で驚いたらしく、右手の拘束が解かれた。

慌てて彼から数歩離れたミアリだったが、同時に当初の計画を思い出した。

「……あのっ」

勇気を振り絞り、それでも性格上と演技上の問題でうつむいたまま、か細い声を出す。

「じ、実は、その、ぼ、暴漢に、襲われて、しまって……逃げるうちに、その、こ、こんなところまで、迷い込んでしまって……」

あからさまに怪しい頭巾姿であることの言い訳も兼ねてつぶやくと、思いきって顔を上げる。眉根を寄せた憂い顔の美少女と間近く視線を合わせたユーシウスが、小さく息を呑んだのが分かった。

標的以外に下手に顔を見せるな、見られたらお前が狩られる側になるぞ……と散々アドルニに脅されてきたが、もうユーシウスに出会ってしまったのだ。高い魔力を持つ夢魔たちを次々と撃退してきた彼であるが、最底辺の力しか持たないミアリだからこそ、油断するかもしれないと言われて送り出されてきたのである。



やるしかない。

本当なら今ごろは、鼻歌交じりに膝を抱え、小石か雑草を数えていられたのに……とは思いつつ、そっとユーシウスの上着の裾を握った。見上げた瞳の奥、魂の底にまで届くように魔力を込めて、甘い誘惑の言葉を口にする。

「申し訳ありません、騎士様。大変申し訳ないのですけど、少しだけ、こちらで休ませていただけないですか……？」

これでいいのだろうか、と思いつつ、たどたどしく誘うと、不意にユーシウスがうっすらと微笑んだ。

「――面白いことを言う」

本当にかすかな笑みだったが、完璧に整った美貌がわずかに動くだけで、ぞっとするような艶を増した。同時に上着の裾を握った手首が、再びしっかりと拘束される。

「眠くらましの結界に隠れた君を、誰が襲うんだ？」

夢魔さえも惑わせるような、冷たい艶を漂わせたその顔を見上げる、ミアリの血の気が引いていく。……そうだった、結界をまだ解いていなかったのに!!

「……あ……、悪、魔、でしょうか……？」

懸命にしらを切ってみたが、無駄だった。薄い笑みを唇に刷いたまま、ユーシウスはにべもなく言い放つ。

「そんな色の髪の人間はいないし、第一まだ硫黄の臭いがするぞ。見え透いた嘘はやめたまえ」

片手でミアリを捕まえたまま、ユーシウスは静かに空いた手を腰の剣に滑らせた。

人間の世界に姿を現した時、悪魔は硫黄の臭いをさせているのだ。その臭いは悪魔の前身である堕天使たちが、神の手により地底の山から流れる炎の洪水に投げ込まれたことに由来しているという。

「――ご、ごご、ごごごごごめんなさいッ!!」

半分斬り殺されたような心持ちになり、ミアリは涙眼になりながら謝った。

「ごめんなさい、無理、やっぱり無理、私には無理でしたアドルニ様……!!」

標的に先に見つかった上に、その美味なる魂に我を忘れ、私は悪魔ですと言わんばかりの結界を張ったまま、姿も変えずに硫黄の臭いをぶんぶんさせながら間抜けな演技をしてしまったのだ。思い返しただけで死にたくなったが、死にたくないので必死に謝る。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい殺さないでごめんなさい」

怯えた小動物のような反応は、ユーシウスも想定外だったようだ。ミアリを捕まえた手はそのままだが、一度は剣に向かったもう片方の手は、中途半端な位置で止まっている。

「……君も、夢魔なのか？　……その、男の夢に現れ、精気を奪うという……」

恥ずかしさと恐怖から頭巾を極限まで引き下げて震えているミアリに、ユーシウスが途方に

暮れたような声で確認を取った。
「あっ、そ、そう、です……」
「……失礼だが、今私に差し向けられるにしては、君はあまりにも魔力が低い。隠している訳ではなさそうだが」
多少気は遣われたものの、要するにだめ悪魔だと言われているのだ。さらに落ち込んだミアリは、ぼそぼそと言い訳をする。
「半分だけ、なので、私……」
人間と悪魔の間に生まれる禁忌の子供。絶対数は少ないが、いない訳ではない存在だと明かされて、ユーシウスの表情が引き締まった。
「何か事情があるようだな」
剣の柄を摑むか摑まないか、という位置で半端に宙を泳いでいた手が下りる。
「……え？」
驚いて反射的に顔を上げると、ユーシウスが生真面目な名乗りを上げた。
「もう知っているだろうが、改めて名乗ろう。私はルマリア帝国騎士団にてベルール騎士館長補佐を務める聖騎士、ユーシウス・アシュリー。君は？」
「ミ……、ミアリ、です」
改めてその美味なる魂の匂いにくらくらしながら、ミアリも名乗り返す。彼女の名を聞いて、

ユーシウスは厳かに唱えた。
「聖なるかなラジエル、全てを識る神の知よ」
天地開闢以来の全てを書き記された書物を、最初の人間に与えた天使ラジエル。天使の名を讃えてその力を借りることにより、人間の聖職者は法術と呼ばれる術を行使する。
「……天界を追われた悪魔の中に名前がない。なるほど、確かに君は、少なくとも生粋の悪魔ではないようだ」
天使の力を借りて裏を取ったことで、ようやく信じてくれたようだ。ミアリを捕らえていた手が放された。
しかし状況がいまいち摑めず、どうしても騎士の証したる剣に怯えた視線を向けてしまうミアリに、ユーシウスはこう続けた。
「私の剣は全ての悪魔を狩るためのもの。君のような少女に向けるものではない、安心したまえ」
力づけるような優しい声、思いがけず暖かい笑顔。
冷たく張りつめた雰囲気を一転させたユーシウスは、ミアリにとっては初めて触れる、ぬくもりに満ちた異性だった。
「事情を聞こう。話によっては、力になれるかもしれない。さあ、人に見つからないうちに、こちらへ」

貴婦人にするように優美に差し伸べられた手に、ミアリは魅入られたように歩き出そうとした。

次の瞬間、かすかに眉をひそめたユーシウスの手が、ミアリの首筋に伸びる。ばちっ、と乾いた音がして、青白い火花が飛び散った。

「きゃあッ!?」

痛みはなかったものの、激しい閃光にミアリは驚いてすくみ上がる。一方のユーシウスは、なんでもないように説明してくれた。

「探査の術を祓っただけだ。誰かが君の居場所を特定するためにかけたものだな。心当たりは？」

たしかにそれは、アドルニが別れ際にかけてくれた術だった。術自体は難しくないが、効果を持続させるのが大変なんだと、ぶつぶつ言っていたような。

「……あ、ありますけど、それは、後で……」

手をかざしただけで、アドルニが苦労してかけた術を吹き飛ばすような相手にしらを切れようはずもない。だが多少は物分かりの良さそうなこの男以外に見つかったらと思うと、気が気ではなかった。

「誰か来るのではないか、と思っているのか？　……無用な心配だが、まあ、可能性がない訳ではない。では、早く来たまえ」

アドルニに聞いていたユーシウスの住まいは、ベルール騎士館一階の端の小部屋だった。
しかし実際に彼がミアリを連れて行ったのは、騎士館の隣にある一回り小さな建物のほうだった。ベルールの国旗は同じように掲げられているので、こちらは別棟なのだろう。
「あら、こちら……？」
「……そうだ」
石段を上がっていくユーシウスの声がわずかに下がったのを聞き取り、ミアリはびくりと肩を竦める。悪魔尋問用の部屋は別なのかもしれないし、正直場所などどこでもいい。
「そんなことより、ちゃんと私の後をついて来るのだぞ。ここには魔除けの術が常時かけられている。下手に転移の術を使って移動したり、ましてや逃げようとしたりすれば、大火傷を負うことになる」
「……大丈夫です。私にはその、転移のような大きな術は、とても使えないので……」
自嘲気味につぶやくミアリを連れて人気のない廊下を進んだユーシウスは、そのまま別棟の一階の端にある扉を開けた。二人が室内に入るなり、高い位置に掲げられたランプに白い炎が灯ったのは、これも法術の一種だろう。
「入りたまえ。ああ、足元に気を付けるように」

注意され、ミアリはあ然として白い光に照らされた室内を見回した。

やはりここは彼の部屋ではないのか、壁を覆うタペストリー以外に装飾のない室内は驚くほど質素な造りだ。奥にもうひとつ扉が見えるので、そっちが本当の部屋なのかもしれないが、それにしても狭いし物があふれすぎている。

「適当に座りたまえ」

座りたまえと言われても、座れそうなのは小さな寝台と、古びた木製の椅子が二つだけ。さすがに寝台に座るのはまずいだろうが、椅子の方にはうずたかく書類だの怪しげな木箱だのが積み上げられている。

床はといえば、厚手のタペストリーが敷き詰められてはいるものの、その上は様々な物で埋め尽くされているのだ。最奥にある頑丈そうな文机に辿り着くまでの細い道以外、腰を落ち着けられそうなところはない。

「あ、え、ええと、ここに、座ってもいいですか……？」

大きめの木箱を指してミアリが言うと、ユーシウスが無言でひとつの椅子から物を退けてくれた。ついでに雑多な品物に埋もれていた小さな卓を発掘し、ミアリに椅子にかけるよう勧めてくれる。

「……すまないな。ここにあまり人を入れることを想定していなかったので、片付けていなかった」

気恥ずかしそうにつぶやくと、ユーシウスは弁解するようにもうひと言つけ加えた。
「隣の部屋なら、人を迎えられるのだが……このような時刻ではあるが、今は君たちのおかげで何かとルマリアは騒がしい。誰か来る可能性があるからな」
「……申し訳ありません……」
椅子の上で小さくなるミアリの気を引き立てるように、ユーシウスが部屋の隅にある作りつけの台へと歩み寄った。無造作に並んだ調理器具を見やりながら、
「女性が好きそうなものは置いていないのだが、とりあえず、キア茶でいいだろうか」
「あ、ええと、私は……」
ルマリア中心部では一般的なさわやかな香りのする茶を挙げられたが、悪魔は食べ物も飲み物も特に必要としない。食事自体はたぶんできるのだが……、と遠慮しかけて、思い直す。
「……いただきます」
うなずいたユーシウスが小さな鍋を手に取り、「聖なるかなサンダルフォン、喜ばしき神の火よ」と聖句を唱えて法術の火を生み出す。他に燃え移る心配のない、真っ白い炎がまたたく間に水を沸騰させる様子を見ながら、彼は独り言のように尋ねてきた。
「さて、ではここまでの経緯を聞こう。まず、君はどうして私を狙う？」
ぎくりとミアリは身を竦めた。どこまで話していいものやら、そもそも話していいものか。
「さ、さっきのように天使ラジエルの力を借りれば、お分かりになるのでは……？」

「……悪魔のくせに天使に頼れとは、なかなかいい度胸だな。第一天使は、君たちと違って節度を心得ている。人間の力で可能なことは、人間の力でやるべきとお考えだ」

欲望の赴くまま望みを叶え続け、ついには魂を手放さざるを得ないまでに依存させるお前たちとは違う。ぴしゃりと言い返され、泣きそうになるミアリにユーシウスは冷静に続けた。

「大方の事情は、以前私を狙ってやって来た夢魔たちに聞いている。だが連中は、君ほど素直そうではなかった」

ある程度のことは摑んでいる。そう前置きしながら、あらかじめ計っていたらしき茶葉を鍋に入れて蓋をする。

「魔界七大公の代替わりに際し、私を狙う悪魔たちが最近しつこい。君もその一匹……失礼、ひとりと見たが、合っているだろうか」

「……私の前に、来た方から、そこまで……？」

用心深くミアリが聞くと、ユーシウスは素っ気なく答えた。

「諸々の情報を総合して、だ」

高位の騎士であるユーシウスなら、悪魔側の情報もある程度入っているのだろう。易々とミアリの結界を見抜いたその実力からすれば、他の夢魔たちに口を割らせることも可能と思われる。

「――そう、です」

観念して、ミアリはうなずいた。

「魔界を七分する勢力である七大公、そのうち君たち夢魔の王である淫欲公が、代替わりの時期を迎えている。高位の夢魔たちはこの時期に多数の人間を堕落させ、力を蓄えて、我こそが次代の淫欲公たるを目指す……合っているかな」

「は、はい、そうです」

蒸らしを終えた鍋から直接キア茶をカップに注いだものを受け取りながら、ミアリはもう一度こくこくとうなずいた。

傲慢公、嫉妬公、憤怒公、怠惰公、強欲公、暴食公、そして淫欲公。七つの大罪を象徴する強大な悪魔たちは、ユーシウスも知るとおり魔界を七分する勢力である。

人間よりはるかに長く生きる悪魔たちにも寿命のようなものはある。現在の淫欲公に力の衰えが見え始めた瞬間から、次代の座を賭けての争いはすでに始まっているのだ。

「標的として選ばれたのは、光栄と言うべきなのかもしれないな。しかし、何度も繰り返して申し訳ないが、なぜ君のような少女が？　その様子を見る限り、今の状況を分かっていない訳ではあるまい」

淫欲公を目指せるほどの強大な悪魔たちであれば、自分を狙うのは分かる。しかしなぜ、ミアリのように半端な能力しかない底辺夢魔がやって来たのかと、ユーシウスは言いたげだ。

実際そうなので仕方がないが、ミアリはしょんぼりと肩を落とした。そして、『計画』の決

行を決意した。

「きゃっ！」

落ち込んだ弾みのふりをして、キア茶の満ちたカップを倒す。狙いは半分当たって半分外れ、ユーシウスの服だけ濡らすつもりが、自分の外套にまで飛沫が飛んできた。

「ああ、ごめんなさい、すぐに拭かないと！」

演技過剰にならないよう意識しながら、ミアリはキア茶の薄緑で上着の一部を染めたユーシウスを立たせようとした。その時濡れた外套がまとわりついて邪魔になったので、後々のためにと前をはだけてしまう。

「うわっ!?」

茶を零された時もやや慌てていたユーシウスだが、ミアリのしぐさを見た途端にいきなり真っ赤になった。ミアリはそれに気づかず、どうにかして彼の注意を逸らそうと騒ぐ。

「申し訳ありません、拭くものはなさそうですね……！　私はここを片付けますので、ユーシウス様はひとまず上着を脱いで」

「私が脱ぐ前に、君はちゃんと服を着たまえ!!」

監視はしなければ、という意識があるのか、こちらを一瞬見ては顔を逸らし、見ては逸らしを繰り返しているユーシウスに、ミアリははっとした。

「ああ、ごめんなさい！」

夢魔の常として、ミアリは外套の下には何も身に着けていないのだ。少女らしいほっそりとした首筋や二の腕、そのくせ胸や尻はふくよかで蠱惑的な肉体が丸見えになっていることに気づき、申し訳なさで一杯になる。

「失礼いたしました、お見苦しいものを……夢魔のくせに、人間の女性と大して変わらない、しょうもない体で本当に」

「み、見苦しいどころか、いや、そのもう、頼むから早く服を直せッ!!」

顔同様、せいぜい劣情をそそる程度の魅力のなさを謝るミアリに、ユーシウスは荒い言葉遣いで命じた。

言われるままに慌ててミアリが服を直し始めると、ユーシウスもこちらに背を向けて服を脱ぎ始める。男が服を脱ぎ、女が服を着るというよく分からない状況のなか、ミアリは理由不明ながら訪れた好機に胸を高鳴らせる。

「シャツの替えはどこだったか……」

完全にこちらに背を向けた状態で、ユーシウスはもぞもぞと着替えをしている。紳士としての気遣いか、あまり肌を見せないように着替えているので、余計に時間がかかっているようだ。

この隙にと、ミアリは外套の隠しに入れていた小瓶を取り出した。

無色透明の液体が中で揺れている。アドルニから秘密兵器として渡されていたそれを、慎重にユーシウスのカップに注ぎ込んだ。

「……もう、ちゃんと服を直せたか、ミアリ」
「あっ、も、もう少しです!!」
ちょうど注ぎ終わったところで声をかけられたので、びくびくしてしまったがなんとか空になった瓶も服の中に隠せた。振り向いたユーシウスは、ミアリの服装を確認してため息をつく。
「その恥じらいのなさは、確かに夢魔だな……全く、普通の淑女であれば気絶でもしてしかるべきところだぞ。とにかく少し待ちたまえ、今茶を淹れ直す」
「え、いえ、そんな」
さっさとユーシウスに飲んでほしかったのでミアリは遠慮したが、ユーシウスは「淹れ直す」と譲らない。また先ほどと同様に茶を沸かし、ミアリの前に新たなカップを置いた彼の眼が、ミアリが空の瓶を隠しているあたりに注がれた。
「なっ、何か!?」
露骨に狼狽するミアリに、ユーシウスはしかめ面で咳払いをする。
「……裾が乱れている。直したまえ」
「えっ!? あっ、は、はいッ!!」
どうやらばれてはいないようだ。急いで裾を直して向き直ると、ユーシウスはすでに口元にカップを運んでいた。
熱かったらしく、すぐにカップを離れた唇が濡れて光る様が色っぽく、どきどきしてしまう。

これから起こることを知っているだけに、余計に。
「話の続きをしよう。君は、半分人間なのだと？」
「……あ、はい……そうなんです」
つられて自分もカップを傾けながら、ミアリはうなずいた。
「ええ、その、私程度の悪魔なら」
ユーシウスの唇を見つめつつ、無意識に己の唇を舐めつつ、しゃべり出そうとした時に変化は訪れた。
やけにぬるい茶に濡れた唇が熱い。
舌も、茶がしたたり落ちていく食道も胃も、体全体が熱い。
ついには身を起こしていられなくなり、卓の上に無様に突っ伏してしまった。
「どうした？　ミアリ」
転がったカップから零れたぬるいキア茶が、ミアリの外套を濡らして滴る。なのに顔色ひとつ変えないユーシウスを、ミアリは苦しい息の下で見上げた。
「……ユーシウス、様……、私、あ、の……」
視界がぶれる。極端に精気を失った時に近い状態だが、ひとつ違うところがある。
ユーシウスだけはぶれない。
むしろはっきりと、他の物が二重三重に瞳に映ることなんかどうでもいいぐらいにはっきり

と、見える。

限りなく鮮やかな視界の中で、ユーシウスが薄く笑った。悪魔よりも悪魔的な、冷たい蔑(さげす)みの笑みだった。

「自分で用意した毒の味はどうだ？」

微熱にほてった肌に、氷のような声が突き刺さる。そこに至りミアリは、ようやく状況を理解した。

「……カップ、取り替え……、た……？」

着替えにあれだけ手間取ったのに、ユーシウスが手にしていたカップの中身はまだ熱かった。それを見逃した自分の不注意を呪(のろ)っても、もう遅い。

「気づかないとでも思っていたのか。私も舐められたものだな」

瞳を細めてそう言うと、ユーシウスはゆっくりと立ち上がった。

「人の血が混じっているとはいえ、しょせんは悪魔か。多少は今までの奴(やつ)らとは違って見えたが、時間の無駄だったようだ」

ミアリを試すために、わざと隙を作っていたのだろう。その表情は聖堂に飾られた石像のごとく冷ややかで、垣間見せたぬくもりなど欠片(かけら)もない。

「聖騎士の端くれとして、悪魔は一匹たりとも存在を許さない。自らの毒で死ね」
かつて己に逆らった天使たちを地の底に堕とした神のように、ユーシウスは冷酷に言い放つ。
ここまでは彼の計算どおり。だがある誤算のため、ミアリは気怠い腕を伸ばし、茶にまみれた外套を大きくはだけた。
途端に露になる、魅惑的な肢体。魅了の効果を持つ甘い香りが、その全身からゆらゆらと立ち上る。
「……くそ、腐ってもやはり悪魔か」
若干の怯みを見せながらも、ユーシウスは腰の剣に手を伸ばした。ミアリをただの夢魔として扱うと決めたらしく、先ほどのように露骨に顔を赤らめたりはしない。
「抵抗するな。せめて、苦しまないように……」
「……熱い」
白い光にきらめく剣を構え、とどめを刺そうとしたユーシウスの長靴に、ミアリは指先を伸ばした。
「何をする!?」
反射的に足を引いたユーシウスを追い、ミアリはゆるゆると身を起こす。頭巾を引き下げ、外套をほとんど脱いで、卓の側を回ると覚束ない足取りでユーシウスに向かって歩き出した。
雑多な小物をいくつか踏みつけてしまったが、全く気にならない。悪魔祓いに使われる聖具

も含まれていたようで、指先や足の甲にぴりっとした痛みが走る時もあったが、そんなものはどうでもいい。

ユーシウスの側に行きたい。

「くっ……、やめろ、この期に及んで私を誘惑しようというのか……!?」

迷いが生じたのか、苦しげなユーシウスへと、ミアリは迷いなく歩を進めていく。

「誘惑しているのは、ユーシウス様のほうです……」

そうつぶやいたミアリは、夢見るようにうっとりと笑った。思わぬ反応に怪訝な顔をするユーシウスの腕の中に、躊躇なく飛び込む。

「好き……」

「……なっ」

まさか、剣を構えた騎士の胸にいきなり抱きついてくるとは思わなかったのだろう。虚を突かれたユーシウスの、触ると案外たくましい胸にすりすりと頬をすり寄せる。

「好きです。好き。好き。大好き」

言葉にするたびに、ミアリの中に突然生まれた感情は強くなる。

夢魔は恋などしない。恋され、愛されて、その末に人の精気を搾り取ることで命を繋ぐ存在だからだ。

しかし、存在に反していると分かっていても、胸の奥からこみ上げる気持ちに逆らえない。

ユーシウスが好きだ。
ユーシウスがほしい。
「大好き、ユーシウス様」
「こ、こら、やめろ、やめないか！」
うろたえるユーシウスの胸に自分の胸をぴたりとくっつけて、ミアリはその頬を両手で包んだ。
「好きです。愛しています……」
「――……よせッ!!」
唇が触れ合う寸前、怒号とともに放り出される。書類の束をまき散らしながら尻餅をついたミアリを見下ろし、ユーシウスは顔を引きつらせていた。
「見苦しい真似を……、汚らしい夢魔め、そこまでして私を籠絡したいのか!?」
「はい」
そのとおりだったので、ミアリは普段の彼女らしからぬ速さで即答した。
「あなたが望むなら……私、どんなことでも、します」
だから、と再び伸ばしかけた手に、剣先が突き出される。
「ふざけるな、悪魔。これ以上見苦しい真似をするな！」
「はい。あなたが望まないことなら、しません」

愛するユーシウスの命令だったので、ミアリは素直にうなずいた。

「……いいだろう」

とろりと蕩けたミアリの瞳を見返すユーシウスの眼から、迷いが消えた。

「そのままそこでじっとしていろ、悪魔。せめて苦しませないよう、一撃で仕留めてやる」

冷徹な聖騎士の顔になったユーシウスを、ミアリは恍惚と見上げた。ああ、この人の眼には今私だけが映っているのだと思うと、魂の底から喜びがこみ上げてくる。

言われたとおりじっとしているミアリの頭上に、銀で飾られた剣が振り上げられた。ユーシウスそのもののような清らかな輝きに頬を染めながら、ミアリはふと思いついて、豊かな胸の前で両手を組む。

「……なんの真似だ」

「人間は、こういう時、こうするんですよね……？」

乾いた声におずおずとそう答えると、ユーシウスは唇を引き結んだ。そして彼は、そのまま一気に剣を振り下ろした。

「ユーシウス様、大好きです……」

最後の一瞬まで彼を見ていたくて開いていた瞳を、そっと閉じる。

熱い陶酔に浸りながら、愛する人に与えられる死にミアリは身を委ねた。

だが聖なる剣はミアリではなく、さる地方都市の修道女に悪魔が憑いた報告書を貫き、床に縫い止めて終わった。

「……あら？」

甘美な痛みを期待していたミアリは、なんだか残念に思いながら不思議そうにユーシウスを見上げた。そしてその目論見に気づき、きらきらと瞳を輝かせる。

「ユーシウス様ったら、焦らしてもう一度、なんて……」

「違う!!」

見当違いの発言に素早く突っ込んだユーシウスだったが、床から引き抜いた剣を握ったまま、彼は苦渋の表情で動きを止めている。

生来のんびりした性格で、あまり自分から働きかけることを好まないミアリだ。ユーシウスが何かしてくれるなら待っていたかったが、今は募る想いが強すぎて、放置を我慢できない。

そっと手を伸ばし、剣を握ったユーシウスの手に触れる。びくっと跳ねたその手は、細くて繊細に見えていたがやはり騎士のそれであり、思ったよりも硬かった。

だが悪魔の肌とは違い、しっとりとした体温を持つその指先に触れただけで動悸が激しくなる。待ちきれない。

「ユーシウス様、まだ私を斬り殺してくださらないんですか……？」

いまだ人の男を襲った経験のないミアリだが、夢魔としての本能と、アドルニが持ってきた妖(あや)しい薬が教えてくれる。苦痛と快楽は紙一重のものであり、自分を消滅に至らしめるほどの苦痛は最大の快楽に繋がるはずだ。

うきうきと一撃を待つミアリを疲れた眼で見た後、ユーシウスはぼそりと言った。

「……騎士は」

「え？　あ、ユーシウス様……」

ミアリの手を振り払い、ユーシウスが剣を握り直す。けれど期待に反し、彼は鞘に剣身を戻してしまった。

「騎士は、武器を持たぬ者を殺さない。騎士は、女性と子供を、殺さない……」

うめくように何か、ミアリの知らない呪文(じゅもん)を唱えたユーシウスは、ひとつ息を吐いてこちらを見た。

吹っ切れたような清々(すがすが)しい表情は、清潔な美貌には一番よく似合う。冷たい笑みにもときめいた胸が、一層高鳴るのをミアリは感じた。

「……改めて、話を聞こう。幸い、夜明けまではまだ間がある」

「は、はい！」

理由はよく分からない。愛する人から死に至る一撃を得る機会は失われたようだが、なぜかユーシウスはミアリの話を聞きたがっているようだ。

「ユーシウス様のお望みなら、どんなことだってお話しします!!」
「それはありがたいが、その前に君は抱きつくのをやめて服を着たまえッ!!」
どさくさに紛れてしがみついてきたミアリを、ユーシウスは懸命に引き剝がした。

キア茶の香りが満ちた室内に、ユーシウスのうめきが響いた。
「媚薬だったとは……」
さっきと同じ椅子に座り直したユーシウスは、金色の頭を抱えてしまっている。
ミアリの企みをほぼ察知していた彼だったが、肝心な部分を見落としていた。アドルニがミアリに持たせたのは、毒薬ではなかったのだ。
「そうか、私をただ殺害したい訳ではなかったのだものな……堕落させたいのだったものな……私としたことが……」
「ユーシウス様の髪、きれいですね……」
「しかし、なぜ夢魔にこのように媚薬が効くのか……いや、私用に調合されたものである上に、半分人間であるなら、仕方がないのか……？」
「ユーシウス様、まつげもきらきらですね……でもやっぱり、お体はよく鍛えていらっしゃるんですね……」

「君はいいかげん離れたまえッ!!」

手持ちの情報は全て吐き出し終え、ユーシウスの右腕に絡みついていたミアリは、怒鳴りつけられて縮み上がった。

「あっ、ご、ごめんなさい、きゃっ!!」

ユーシウスに強制的に着せられたシャツの釦が弾けかけて、ミアリは慌てる。他のところはぶかぶかなのに、胸だけ苦しいシャツと尻だけ苦しいズボンはユーシウスの持ち物である。

「……着やせするほうだと思っていたんだが、私は……」

複雑な面持ちで嘆息したユーシウスは、懸命に胸元を押さえているミアリからさり気なく視線を外した。

「しかし……この有様で嘘がつけるとも思えん。君は本当に……」

「なんですか?」

美声をひと言でも聞き漏らすまいと、ぐっと身を寄せてくるミアリから慌てて距離を取りながら、

「だ、大体この有様では、私にべたべたするのも大変だろうと言ったんだ。とにかく、さっさと離れたまえ!」

「それはそうですけど、ユーシウス様に強制されたことだと思うと嬉しいですし……それに、ごめんなさい。離れたくないです……」

叱られて一瞬身を引きかけたミアリだが、抗いがたい引力に逆らえない。指の先だけユーシウスに触れた状態で未練がましく訴えると、彼はまたため息をついた。

「……君はよくても私が困る」

媚薬の効果と分かった以上、あまり邪険にもできないと思ったのだろう。幾分態度を軟化させたユーシウスだが、曰く「騎士は女性にみだりに触れてはならない」そうなので、自分から何かしてくれる気はなさそうだ。

「ユーシウス様は、若い人間の男性なのに、女性に触れたいとは思わないのですか？」

「……そういう欲を捨てているから、聖騎士になれるのだ。我々は騎士であると同時に聖職者なのだから、生涯女性に触れることは許されない」

きっぱりとそう言ったユーシウスに、ミアリは聞きかじりの知識を基に反論した。

「そうなのですか？　建前は、そうなっているようですが……アドルニ様に聞いたお話では、高位の聖職者や聖騎士の中には、私たちが手を出す気にもなれないぐらい堕落した人間が、大勢……」

ユーシウスは、服の裾を握り締めたミアリを無言で冷たく睨んだ。視線に含まれた怒りと拒絶を読み取り、ミアリは言葉を切ってしょんぼりと手を放す。

「……ごめんなさい。もう余計なことは言いませんし、離れますから……ユーシウス様が悪魔をお嫌いなのは分かっていますけれど、どうかこれ以上嫌いにならないでください……」

華奢な肩を落としてうなだれた様は、美しいと言うよりいじらしい。

「……別に、君個人には」

あまりにもしおれた様が気の毒になったのか、ユーシウスは一瞬慰めの言葉を口にしかけた。しかし気の迷いを振り切るように、すぐに首を振ってしまう。

「……いや、違う、君は半分とはいえ悪魔だ。我々の敵だ。そんなもの、嫌いに決まっている」

吐き出すようなひと言に、傷つかなかった訳ではなかった。

しかし媚薬が生み出した強固な恋心は、その唇にふわりと穏やかな笑みを浮かべさせる。

「ユーシウス様が、私のことを嫌いでも……好きです」

私のお母さんも、お父さんにこんなことを言ったのかな……、と、刹那、考えた。

黙ってミアリを見つめたユーシウスを、ミアリも陶然と見つめ返す。一向に視線を外さないミアリから、最後にはユーシウスが根負けして眼を伏せた。

「――とりあえず、本当に、離れたまえ。そして、そんな眼で私を見るのは、頼むからやめてくれたまえ……」

手こそ放したものの、ぴったり体を寄せているミアリに懇願めいた指示を出した後、ユーシウスは呆れたようにつぶやいた。

「大体君はただ、薬の効果でおかしな気持ちになっているだけだろう。標的に惚れるなど、夢

魔として恥ずかしくないのか？」
「そ、それはまあ、そうなんですけど……」
アドルニにこのことが知れれば、やれ母親の二の舞だ、馬鹿な奴だと罵られるだろう。その未来は遠くないのだろうが、なにせ彼がくれた媚薬は強力で、今のミアリにはユーシウス以外のことは心底どうでもいい。
「でも……ユーシウス様、とっても、とってもおいしそうで……すてきで……好きです」
「君はちょっと黙りたまえッ!!」
かっとなって叫んだユーシウスの手が、不意にミアリの口元をふさいだ。
やったわ、と内心喜んだミアリだったが、残念ながら彼女の望むような展開にはならなかった。ユーシウスは明らかに、隣の部屋へと神経を集中させている。
「カルガか……しまった、いつの間にか夜が明けたのか」
舌打ちしそうな表情でユーシウスが小さな窓の外を見る。ぱたぱたしていてミアリも気づかなかったが、確かに小鳥の鳴き声に交じり朝の光が射し込み始めていた。
悪魔の例に漏れず、ミアリも太陽の光、特に朝日には弱い。怯えて窓から距離を取ろうとする彼女を、ユーシウスは慎重に解放しながら命じた。
「いいか、ミアリ。私がいいと言うまで、絶対にここから出るな。声も出すな」
「え？」

「いいか、絶対だ。私以外の人間に見つかれば、私は君を殺さねばならない。……特に今から隣にやってくる人間は、日頃私の不始末を探そうと躍起になっているからな」

「まあ……、ユーシウス様の敵、ですか？」

私の好きな人に何かする気なのか、と警戒を露にしたミアリに、ユーシウスは曖昧な笑みを向ける。

「……味方のはずなのだがな、本来は。私の従者だ。詳しい話は後にして、とにかく、約束してくれ」

真摯に命令する、その生真面目な表情に恋心が燃え上がるのを感じながらも、ミアリも事の重大さを把握した。

「私が見つかると、ユーシウス様にもご迷惑がかかってしまいますよね？」

「……まあ、そうだな」

ちょっと意外そうな相槌を聞いて、ミアリは大きくうなずいた。

「はい、分かりました。大好きなユーシウス様のご迷惑になるようなことは、決して決していたしません。ここには数えるものもたくさんありますし」

「……がんばってくれ」

限りなく不安そうではあったが、だからといって来訪者を迎えない訳にもいかないと思ったのだろう。もう一度「出て来るんじゃないぞ」と言いおいて、ユーシウスは隣室に入っていっ

た。

その姿が見えなくなった途端、ミアリは言い知れない寂しさを感じてしまう。

「み、見つからなければ、大丈夫だもの……」

扉の前に座り込んだミアリが厚い木製の扉に耳をつけると、程なく二人の男の話し声が聞こえてきた。

ミアリを置いて隣室に入ったユーシウスは、ほぼ同時に廊下に通じる扉を勝手に開けて入ってきた男と対面する羽目になった。

「おはようございます。これはこれは、我らがベルール騎士館長補佐官閣下、朝からご機嫌麗しゅう」

息つく暇もなく起こる面倒に漏れかけるため息を押さえ、いつもと同じように応じる。

「……お前も朝から元気そうで何よりだ、カルガ」

倉庫同然の隣の部屋とは違い、質素ながらも整然と片付けられた執務室へとやって来たのは、痩せた肉体を白い騎士服で覆った黒髪の男。ユーシウスの従者であり、従騎士の位を持つカルガ・ナズルだ。

従者と言ってもユーシウスより五歳ほど年長で、騎士団入りしたのも彼より早い。ユーシウ

スの側仕えに自ら志願した、唯一の男でもある。

年齢不相応な出世だと陰口を叩かれ、己より若い上官を嫌う部下たちに厄介者扱いを受けている自覚はある。喜んでしかるべきところかもしれないが、生憎とユーシウスは、カルガが自分を好いて従者になった訳ではないことを知っていた。

「失礼ながら、補佐官閣下は少々寝不足でいらっしゃるようだ。その様子ですと、昨夜は久しぶりに、あなたを狙う夢魔が現れましたか？」

冬の初めから数ヶ月に亘り、夢魔たちからの襲撃を受けているユーシウスだ。元々騎士の勤めで徹夜は日常茶飯事ではあるが、今回はいつもと勝手が違うため、疲労が顔に出ているのだろう。

「――ああ、そうだ。無論すぐに切り捨てたので、気遣い無用」

襲撃自体なかったことにしたかったのに、嫌なところで鋭い奴だ。内心舌を巻きながら、ユーシウスは努めて事務的に切り返した。

「はは、そうでしょうね。なにせ我らが補佐官閣下は、大層お強くていらっしゃる」

わざとらしい讃辞を口にした後、カルガは歪んだ笑みを口元に刻んだ。元の顔立ちは悪くないのに、染みついた皮肉の影がその印象を暗いものにしている。

「しばらく夢魔どもの来襲も絶えていましたが、まだしばらくはここにいてくださる必要があるようですな。そして頼もしいお返事を聞く限り、やはりあなたがここに詰めていらっしゃる



間は、このあたりの見回りは不要でしょうね」

「……なんだと？」

眉をひそめて聞き返すと、カルガは白々しくこう答えた。

「なに、見回りの兵士たちが零していたのですよ。我らが補佐官閣下が勲功を独り占めしてしまうのなら、見回りなどかえって失礼に当たるのではないかと……」

「……私を狙う夢魔どもが、私の近辺に集まって来ていることについては責任を感じている。腕に決して自信がない訳ではないが、お前や館長閣下が買い被ってくださるほど、私は強くはない」

見え透いた罠を踏み抜いてしまわないよう、慎重に慎重に、言葉を選ぶ。こんなことに神経を使うぐらいなら、戦場で命のやり取りをしているほうがはるかに楽だと、うんざりしながら。

「犠牲が出てからでは遅いのだ。……決して、悪魔の誘惑に屈するつもりなどないが、連日の襲撃でいささか疲れていることも事実」

「そうですね。あなたはただでさえ、いろいろと噂のある方だ」

含むもののある言い方が、ひどく気に障る。しかしここで怒り出せばカルガと、その背後にいるベルール騎士館長ニークレーン・フォン・ファルバートの思う壺。

「ああ、そうだ。そしてお前や館長閣下もご存じのとおり、私はこのように効率の悪い待ち伏せは得意ではない」

少しでも有利な方向に話を進めようと、ユーシウスはそう切り出した。
「七大公の代替わりだったか？　数百年に一度の騒ぎに浮き足だって、攻勢をかけてきているのは夢魔どもばかりではないようではないか。奴らがその気なら、いっそこちらも打って出て、一網打尽にしてやればいいのだ。天使語が解明された、との話も聞くぞ。天界と協力して」
「そのようなことは、ご自身で館長閣下にお伝えください。従騎士などの口からは、とてもとても」
一気に大きくなった話に圧倒された様子もなく、カルガはさらりと受け流した。ユーシウスの腹立ちは一層増したが、大きく息をついて自分をごまかす。
「もちろんそうお話しするつもりだ。……行くぞ、カルガ」
どのみち毎朝ニークレーンのところには行かねばならない。ため息を堪えてそう口にしたユーシウスだが、はたと気づいて振り返った。
「その前に、いくらなんでもこの格好では閣下に失礼だな。着替えてくるので、申し訳ないが閣下には少し遅れる、とお伝えしておいてくれ」
「あなたほどの美貌なら、それぐらいの服装のほうが同性からの好感を得られるのでは？」
嫌みたらしくカルガが言ってきたが、ユーシウスは無視して隣室に続く扉の前に立った。ミアリが空気を読んでくれていることを、祈りながら。

扉が静かに内側に向かって開いてきた時、ユーシウスの声に聞き惚れていたミアリはもう少しで叫んでしまうところだった。

だがするりと室内に入ってきたユーシウスの表情の険しさと、「出てくるな、声を出すな」の命令を思い出し、壁にへばりつくようにしながら無言でこくこくとうなずく。

従順なしぐさにうなずき返しながら、ユーシウスはクローゼットを開いた。他の雑多な品物とは明らかに扱いが違う、金釦に金の肩章、胸元に縫い取られた翼ある獅子の姿がまぶしい服は、ルマリア帝国騎士の制服だ。

「女性の前で失礼する。話は後だ、向こうを向いていたまえ」

ひと言断りを入れてから、手早くそれを身にまとい始めたユーシウスの姿に、ミアリは動悸を抑えきれない。当然向こうなど向いていない。

「ああ、着ないで、でも着て……」

ちらちら見える引き締まった腰、しなやかな筋肉に鎧われた腕や胸。それらを余すところなく見たいという欲と、完璧に服装を整えたユーシウスを見たいという欲が、せめぎ合っている。

「……今抱きついてきたら、どうなるか分かっているな？　この服自体も聖別されているのだぞ」

ミアリの欲望に気づいたユーシウスが、小声で釘を刺してきた。叱られてしゅんとするミア

リだが、やがて着替えを終えたユーシウスを見た途端、あまりのときめきに衝動を抑えきれなくなった。

「ああ、ユーシウス様っ……！」

「……!?」

自分が大声を出す訳にもいかないと思ったのか、ミアリの突撃をユーシウスは唇を引き結んで受け止めた。と言っても抱きつくことは許さず、掲げた両手同士を握り合うようにして接触を阻止しながら、背後を気にしつつ命じる。

「こ、こういうことをするなと言っただろう！　死にたいのか!?」

なにせ隣にはカルガがいるのだ。状況を考えろ、と言わんばかりに睨まれても、ときめきは増すばかり。

「い、いえ、こんなにすてきなユーシウス様を見てしまった以上、もっといろいろなことをするまでは死にたくはありません……」

帝国騎士の白い制服は、まるでユーシウスのためにあつらえたかのようだ。飾り気のない格好ももちろんすてきだったが、騎士服を身にまとった姿はさらに優美で清らかな光にあふれている。

「でも、そのお姿のユーシウス様になら私、喜んで殺されます……」

甘く潤んだ瞳を苦い顔で見返したユーシウスは、ひとまずおとなしくなったミアリを解放し

た。そして、真面目な口調でこう尋ねてきた。
「君が生粋の悪魔ではないことは間違いないが、半分人間、というのも間違いないな？」
「え？　……は、はい。お話ししたとおりです」
媚薬に浸された頭が、一瞬戸惑いに揺れた。
魔界の状況から出生にまつわることまで、聞かれるままに全てをユーシウスに話した。愛する彼の求めに応えられるのが嬉しくて、何から何まで、全部話した。
と言ってもミアリの持つ知識はほぼアドルニの受け売りであり、おまけにアドルニの話はだいぶ本人に都合良く改ざんされているらしい。逆にユーシウスから、「魔界第五層までは、人間でも高位の聖職者なら侵入可能なはずだ。その男は、単にあまり強くないだけではないか？」「傲慢公は今まで代替わりをしていないはずだぞ」などと、正しい知識を教わってしまったぐらいだ。
「あの、私の両親に関しては、アドルニ様もよく知らないようで……父のほうが人間だということしか、分かっていないんですけど……」
しょんぼりするミアリの耳に、隣の部屋からカルガが呼びかける声が聞こえてきた。
「補佐官閣下？　どうされました。着替えの手伝いが必要ですか？」
嫌味ったらしい催促に、ミアリはこそこそとユーシウスにささやく。
「だ、だめですユーシウス様、お名残惜しいですけど早くお行きになって！　でないと、また

あの人にいじめられてしまいます!!」

それだけは避けねば、とあせるミアリに、ユーシウスはこう言い返してきた。

「――いじめられてつらい思いをしてきたのは、君だろう?」

思わぬ切り返しにびっくりして固まったミアリは、次の瞬間猛然と謝った。

「あの、ご、ごめんなさい！　不愉快なことまでお話ししてしまって!!　そうですよね、両親のことならとにかく、私の思い出なんかなんの役にも立たないのに……！」

「人間臭い」と馬鹿にされ、いじめられてきたことも確かに話したが、その時ユーシウスはひどく不愉快そうな顔で詳細な説明をさえぎったのだ。

不快な気分にさせて申し訳ない、とぺこぺこするミアリに、ユーシウスは決意した様子で言った。

「可能なら、私は君を人間にしたいと思う」

あまりにも突然で、あまりにも意外な申し出に理解が追いつかない。ぽかんとしてるミアリに、ユーシウスは苦笑しながら、

「詳細は戻り次第また。いいか、それまではおとなしくしているんだぞ。……でなければ、私は本当に君を殺す羽目になる。すまないカルガ、今行く!!」

もう一度命令を下したユーシウスは、痺れを切らしたカルガがこちらに踏み込んでこないうちにと牽制を放った。

やがて、とっぷりと日も暮れた頃。
外からかけられていた鍵が回る音に気づいたミアリは、うずうずする気持ちを持て余してその場で足踏みしてしまう。早く、早くと焦るその視界に、周囲に瞳を凝らしながら書類束を抱えたユーシウスが入ってきた。
「……ちゃんとおとなしくしていたようだな」
心なしか疲れが目立つその顔を見るなり、呆気なく自制心が振り切れる。
「お帰りなさい、ユーシウス様っ!!　お待ちしておりました!!」
「!?　こ、こら、馬鹿者っ!!　おとなしくしていろと、あれほど……！」
首にかじりついてきたミアリにユーシウスは動揺しているが、抑えが効かない。ところどころ制服に触れた部分の肌がちりちりと痛むが、そんなことはどうでもいい。
「はい、お言いつけどおり、おとなしく数を数えていました！　書類の枚数、全部で三百五十八枚ありました!!　二回数えたので間違いないと思います!!　ついでに少しお片付けもしておきました!!」

「……そんなに溜まっていたのか、そしてまた今日も増え……いや、とにかく離れたまえ、煙が出ているぞ!?」

手の平や首筋などの無防備な部分が、聖なる力に触れることで一部浄化されかかっているのだ。さすがにこれ以上浄化が進むと危険なので、ミアリは不承不承ユーシウスから離れた。

「大丈夫か？　私の法術では、おそらく君を治せないだろうしな……」

白い肌に浮いた火ぶくれを、ユーシウスは気遣わしげに見やる。ミアリもひりひり痛む手の平が少しつらくなってきたが、確かに法術で夢魔を癒すことはできないだろう。

「あの、それでしたら、ユーシウス様の精気を、少し吸わせていただければ……」

夕食を食べてきたらしく、スープの匂いを漂わせたユーシウスに触発された訳でもないが、ミアリはおずおずとそう頼んでみた。

途端にユーシウスが表情を硬くする。

「……その手には乗らんぞ」

「あっ、で、ですよね、ごめんなさいっ！　大丈夫です、放っておけばそのうち治りますから」

赤くなった手をしまって首を振るミアリに、ユーシウスがくるりと背を向ける。手近の木箱の上に持ってきた書類束を載せ、そしておもむろに制服を脱ぎ始めた。

「勘違いしないように。君がおかしな薬の効果で錯乱し、これ以上体を痛めつけないために着替えるんだ」

精気を提供するためでも、ましてや劣情を催した訳でもないとの注釈に、ミアリはぱちんと大きくまばたきをした。

「……悪魔といえども、君は半分人間で、しかも女性だ。もう少し自分の体を大切にしたまえ。淑女は無闇に男の前で肌をさらしたり、傷つけたりすべきではない」

さらにひと言、なんの変哲もない白いシャツに袖を通しながらつけ加えられた言葉が、ますますミアリを混乱させる。

媚薬の効き目が薄れてきているのだろうか。甘く痺れていたばかりだった心が、戸惑いに揺れていた。

夢魔と聖騎士の関係は基本的に二択。支配して精気を奪うか、服従して消滅させられるかしかない。

媚薬によりユーシウスに服従している自分の状態を、ミアリは分かっている。薬の効果でそれさえも甘く感じられるので逆らう気は起きないが、今さらに思った。

ユーシウスはなぜ、自分をこのままここに匿ってくれているのだろう？

使い魔として使役させられる、という可能性もなくはないが、彼は祓魔師でも魔術師でも錬金術師でもなく聖騎士だ。悪魔を使い魔とする聖騎士など、聞いたことがない。

まして騎士、という単語にやたらと固執するユーシウスが、そのイメージから外れた真似をするとは思えない。

そういえば今朝、彼はおかしなことを言っていた。
人間にする？
「ミアリ？　聞いているのか」
気づけばユーシウスはすでに着替えを終え、初めて出会った時と同じようなただの白い上着姿に戻っている。
ありふれた服を身に着けていても、やはりその容姿と魂の美しさは際立っていた。かすかな疑問はたちまち吹っ飛び、また抱きついてきたミアリをユーシウスはすげなく避ける。
「明らかに聞いていなかったようなので、もう一度言おう。今後も引き続き、君はここで書類でもなんでも好きなものを数えていたまえ」
「はい、ついでに少しお片付けもしておきますね!!」
「……中には法術をかけられたものもあるので、火傷しない程度にな。その間に私は、君を人間にする手はずを整える」
先ほど考えかけていたことが、再びユーシウスの口から出た。ミアリの熱に浮かされた頭も、ほんの少しだけ冷める。
「どうして……、そんなことを？」
「……時間が余っているからだ。どうやら当分、前線へ復帰することは叶わぬようだからな」
曖昧に答えたユーシウスは、ごまかすようにミアリを軽く睨んだ。

「君たちのせいだぞ」
「え？」
「並いる聖職者たちを片っ端から誘惑していた夢魔たちが、いつからか私だけを狙って集まってくるようになった。お前がいると周りの人間が危ないからと、前線を退けられ、書類仕事の毎日だ。君たちのおかげで、腕が鈍る暇はないがな」
「ご、ごめんなさい……！」
慌てて頭を下げるミアリだが、冷たい言葉を浴び続けるうちにまた媚薬のほてりが蘇ってきた。
「ごめんなさいユーシウス様、お詫びに私をどうにでもしてください」
「どさくさに紛れて都合のいい展開にしようとするなッ！　服の前を留めたまえ!!」
今にも弾けそうな胸の釦を一つ外したミアリを、ユーシウスが間髪入れず怒鳴りつけた。
「……まあいいだろう。媚薬の効果はそのうち切れる……、はず、だ」
あまり自信がなさそうにつぶやいたユーシウスは、軽く首を振って仕切り直した。
「とにかく、君はここにいたまえ。聞き耳を立てていたようなので大体分かっただろうが、私の従者であるカルガ、そして私の上官に当たるファルバート館長閣下は、私を嫌っているのだ。見つかったら非常に面倒なことになる」
「えっ、どうしてですか？」
媚薬に浸ったミアリの眼には、ユーシウスに他人に嫌われるような要素は全く見つけられない。

若くて美形で、出世もしていて、仕事熱心。夢魔には非常につれないが、そこもまた、たまらないというのに。

見回りの兵士すら不要、とカルガはうそぶいていた。つまりは襲い来る夢魔たちにひとりで対抗せよということだろうが、なぜそこまで冷たくされなければならないのだろう？

「……なぜだろうな。とにかく、見つかったら」

ごまかすように発せられた言葉に、ミアリは敏感に反応する。

「ユーシウス様に、ご迷惑がかかる、ですよね」

ユーシウスに自分が罰されるのは大歓迎だが、彼が誰かに罰されるのは大問題だ。真面目な表情でうなずくミアリに、ユーシウスは浅いため息をつきながら、

「……そうだ。まあ館長閣下が、直々にお出ましということはまずない。それよりもカルガだ。あいつは毎朝必ずここへ来るから、下手を打てばすぐ見つかってしまう」

カルガ。ユーシウス様をいじめる人その一、として覚えた名前を反芻しながら、ミアリはこう提案してみた。

「眠くらましの術なら、使えますけど……」

「だめだ。従騎士とはいえ、カルガはあれで相当の腕前を持っている。君程度の術なら、簡単に見つかってしまう。余計なことはしないほうがいい」

にべもなく撥ねつけられ、がっかりしながらミアリはある疑問を持った。

「でも、従騎士なんですね。お年もユーシウス様より上のようなのに、もしかして、お家柄の問題ですか？」

「……それもあるだろうな。カルガはバディスの外れの出身で、羊飼いをしていたそうだから」

バディスとは、ルマリアに併合された六国のうちで最後に膝を屈した小国だ。高山に居を構え、独自の文化を発展させてきた山岳民族である彼らは人数が少ないことなども手伝って、帝国内では軽く見られがちである。

「あの、でしたら私、あのカルガとかいう人を堕落させてみましょうか？」

いいことを思いついた、とばかりにミアリが明るい声を出した途端、ユーシウスがぴたりと動きを止めた。

「……夢魔が堕落させるというと、その、あれか。夢に……、その」

目元を赤く染め、ユーシウスが珍しく言い淀んだ。まあ、ユーシウス様でも知らないことがあるのね、可愛い、と思いながら、彼に恥をかかせないためにミアリは続きを口にした。

「はい、そうです。夢に忍び込んで襲うんです！　初めてですけど、ユーシウス様が喜んでくださるなら精一杯がんばります！　そろそろ精気も必要な頃合いですし!!」

赤みがまだ残る手の平を眺めながら、全てを解決する方法を思いつけた喜びにミアリは浮かれている。無理をしているでもない、のんきな態度にユーシウスは頬をひくつかせた。

「……君は、私のことが、好き、なのだよ、な？」

「？　はい……もちろん」

改めて聞かれるとちょっと恥ずかしくて、ぽっと頬が染まる。今そういう態度を取ることに、ユーシウスはますます戸惑っている様子だ。

「す、好きな男の眼の前で、他の男を……、その、そういう話をするのは、いかがなものかと思うが？」

「どうしてですか？」

聞き返して、ミアリはユーシウスが抱える不安に気づいた。大丈夫です、と豊かな胸を張って請け合う。

「大丈夫です、もしも失敗しても、絶対にユーシウス様のことは口外しません!!」

「――やめたまえ」

張り切るミアリに、ユーシウスがきっぱりと命じる。

「カルガのことは私の問題だ。君がその、ふ、ふしだらな真似をしてくれなくても、私自身でどうにかする」

この手の話題にはあまり免疫がないらしく、その視線は空中を泳いでいる。

「……私は君を人間にし、できるなら立派な淑女にするつもりだ。まだ理由はよく分からないかもしれないが、まずは形から入ってもらう。とにかく、私でも私以外でも、男をその、堕落させようなどと絶対にしないように。いいな」

ミアリもまた、思わぬ反応に面食らい、なんとなく瞳をさまよわせてしまった。ユーシウスだけでなく、自分自身に起こった反応についてだ。

夢魔としての自己を否定されたも同然なのに。

いつものように思いきり落ち込む気になれないのは、やっぱり媚薬のせいなのだろうか？

「……それに、カルガがああやって突っかかってくるのは、私個人に恨みがあるからではない」

停滞した空気を変えるように、ユーシウスが口にした言葉でミアリの物思いは中断された。

「全ての騎士を憎んでいる男の次の標的に、今度は私がなっただけだ」

「全ての騎士を……？」

そんな男がなぜ従騎士になり、ユーシウスに仕えているのだろう。

「……君がこの間言ったように、全ての騎士が騎士らしく在る訳ではない。すまないが、非才の身に過ぎた大役を仰せつかっている以上、これ以上の発言は控えさせてもらう」

追及を断つようにそう言い切ると、ユーシウスは部屋の隅へと視線をやった。

「疲れたので私はもう休ませてもらう。ところで、君に睡眠の必要はあるのか？」

「あ、ええと、何もすることがない時はよく寝ていました」

精気の消費を抑えるためと、やはり人の血が影響するのか、ミアリはしばしば眠りを取った。

夢魔が寝るな、とアドルニにはよく馬鹿にされたが、「何もしなくていい」状態がもっともありがたいミアリはその気ならいくらでも眠っていられる。

「でも、ユーシウス様の寝顔を見ていたいので、寝ません……」
意外とあどけなかったりするのだろうか、と早くも妄想を始めていると、ユーシウスに冷たく睨まれた。
「寝顔ぐらい見ても構わないが、くれぐれもおかしな真似をしないように。それと、もし眠りたいなら、私を起こしたまえ」
「えっ」
途端に、ミアリは瞳を輝かせる。
「まあ、まさか『私の胸が君の寝台』」
「ち、違う、勘違いをするな！　そうではなくて、君が眠りたいなら寝台を貸すから、起こせと言ったんだ!!」
急いで訂正したユーシウスに、ミアリはうつむいた。
「ユーシウス様は、そんなに私と寝たくないんですか……？　人間の男性は、そのためならどんな労苦も惜しまないと聞いていたのですが……」
「いや、だから、一緒に寝る訳にいかんから起こせと言ったんだ！　いいか、淑女は無闇に男と同衾（どうきん）してはいかん!!　そして騎士は、半分といえども人間の女性を差し置いて寝台で休む訳にはいかん!!」
「どうしてですか？」

訳が分からず、小首を傾げたことにより、今にも弾けそうなシャツの胸元が強調される。
「――……っ、もういい、寝る時はこれでも被って、くれぐれも肌を焼いたりしないようにしたまえ！　分かったな!!」
着替えだけでも早急に用意を、とぶつぶつ言いつつ、顔を赤らめたユーシウスが上掛けを投げ寄越してきた。ばさっと頭に被さったそれに頬を寄せ、ミアリはうっとりと眼を閉じる。
「ユーシウス様の匂いがする……なんだか、ユーシウス様に包まれているみたいです……」
キア茶のさわやかな香りに、かすかな甘い匂いが混じっているのだ。騎士、すなわち軍人であるということを考えると意外だが、ユーシウスのイメージには合っている。
「……そういう使い方しかしないなら、返したまえ」
身の危険を感じてか、寝台の脇に置いた剣の位置を何度も確認しながら、ユーシウスはそう言い置いて横になった。

我慢はするつもりだったのだ、とミアリは自分に言い訳をする。
だけど、聖なる力に灼かれた手の平はまだひりひりするし、媚薬の効果はまだ強いし、ユーシウスの寝顔はやっぱり美しかったし、上掛けから漂う匂いはたまらなかったし。
「だから、仕方がないのよね……」

本能的な衝動に突き動かされて、無自覚にユーシウスの夢の中に入り込んでしまっても。

ミアリ自身、何をどうしたかよく覚えていない。ぴしっと背筋を伸ばして眠るユーシウスを、彼に借りた上掛けをまとって見つめるうち、その表情に苦悶の翳りが差したところまでは記憶がある。

どうやら悪夢を見ているらしい。なんとかしてあげたい、という想いと、苦しむ表情が色っぽくてすてき、という欲望が合わさった瞬間、気づいたらこの場所にいたのだ。

あたりは一面、半透明の氷に覆われている。ぼんやりとした白い霧越しに届く、明け方のような曖昧な光のため視界は悪くないが、行けども行けども同じような景色ばかり。

「それにしても、私にもちゃんと夢魔としての能力があったのね……」

ひとりで人間界へも行けなかったミアリである。夢に入り込む、などといった芸当ができるのかどうか、ずっと不安だったのだが……

――やっぱり私は悪魔なんだ。

ほっとしたような、そうでもないような不思議な気持ちだった。

妙な気分だ。ミアリはずっと純粋な悪魔になりたかったのに。人の血など、魔界で暮らしていく上では障害でしかなかったのに。

媚薬が正常な心の動きを妨害しているからだろうが、もうひとつ、引っかかっていることがある。

「……ユーシウス様が、私を、人間に……？」

思い返してつぶやいた途端、ユーシウスの苦悶する姿も一緒に蘇ってきた。恋慕も、飢餓も同時に。

「ああ、そんなことよりユーシウス様を探さないと!!」

地面を覆う氷すら溶かしそうな熱い想いに突き動かされ、ミアリは足を速めた。

「それにしても、人間界よりは、夢の世界は魔界に近いのかしら……」

夢の中だからだろう。疲れないし、寒くもないが、延々続く氷結した景色に首をひねる。淫欲公の領地から出たことがないミアリだが、魔界のどこかにはこういう場所があると聞いたことがある。真面目なユーシウスは、夢の中で魔界に赴き、戦っているのかもしれない。

「……あっ」

青ざめた氷ばかりが立ち並ぶ世界に、ようやく変化が訪れた。

巨大な氷塊が立ち並ぶ狭間に、ユーシウスの金髪がきらめく様が見える。

「あの、ごめんなさい、本当にごめんなさい！　でも、私もここからどうやって出て行けばいいか分からないんです」

謝りつつも、足が止まらない。弾むようにしばらく駆けたミアリの足が、途中で止まった。強大な魔力の気配が行く手を阻む。

最初は、ユーシウスが強い悪魔と戦っているのかと思った。

だが、腰から下を巨大な氷塊に呑まれたような状態で苦しげな顔をしているユーシウス以外、周囲に他の存在はない。

「くぅ……っ、う……」

「ユ、ユーシウス、様……!?」

ミアリの存在に気づいたか、何かに耐えるように顔を歪めていたユーシウスが、はっとこちらを向く。

「君は……!?」

途端――白い制服を突き破り、真っ黒い十二枚の翼がユーシウスの背に生えた。

「きゃあああああッ!!」

「うわあああああッ!!」

朝の光が差し込む物に満ちあふれた室内に、二人分の響き渡った。全身汗だくになりながら身を起こしたミアリと、同じように身を起こしたユーシウスの視線がかち合う。

「ひっ……!?」

瞬間、媚薬の効果が吹き飛んだ。怯える半人前に戻ったミアリは逃げようとしたが、その手首をユーシウスが摑んで引き寄せる。

怒りに燃え上がる若草色の瞳が、凄絶な光を発している。夢の中で感じたような巨大な魔力も、黒い翼もありはしないが、その眼光の鋭さはミアリの胸を刺し貫いた。

「汚らしい夢魔めが……」

指先が容赦なく肌に食い込む。だが物理的な苦痛より、侮蔑に満ちた声が胸に染みて痛い。

純粋な幽星体である悪魔は本来、人と同じ肉体を持つ存在ではない。とはいえ半分人間であるミアリには一応肉体が存在し、そのために何かと面倒なことになるのだが、ユーシウスの罵倒に幽星体を激しく殴打されたような錯覚を覚えた。

「もう一度こんな真似をしてみろ。その時は私自身が、必ず君をこの手で殺してやるからな!!」

逃げた拍子に元からきつかった胸元がはだけていることなど、まるで眼中にない様子だ。出会ってから今まで散々怒らせてきたが、今回の怒りはこれまでの比ではない。

「ごめ、ん、なさ、い」

もつれた舌をたどたどしく動かし、そう言うのがやっとだった。

「もう、しません。二度と、しません。本当に、ごめん、なさい」

身動きひとつできぬまま、謝ったミアリの手が突然解放された。

ため息をひとつ零し、ユーシウスが寝台を下りる。寝乱れた服を着替え、髪を大雑把に直してから、振り返りもせずにこう命じた。

「……すぐにまたカルガが来る。夜までは戻らない予定だから、そこにいたまえ」

万一にもミアリの姿を見られないよう、慎重に角度を調整して扉を開けたユーシウスの姿が隣室に消える。

いったん吹き飛んだかと思われていた媚薬の効果は、まだ根強く残っているようだ。背中まで美しい姿を思わず眼で追うミアリだったが、夢の中で受けた恐怖は強く、相容れない感情が胸の中でぶつかり合っている。

「気持ち、悪い……」

肉体も幽星体も疲労がそろそろ限界に近い。初めて夢の世界に侵入した際、ミアリとしては大きな魔力を使ってしまったのが原因だ。

精気を吸えないなら、せめて眠って力の消費を抑えるべきだろう。

けれど、精気が枯渇してきているからこそ、高貴な魂の吸引力に逆らえない。

夢遊病者のような足取りで、ミアリは隣室に続く扉に近づき、昨日と同じように耳を澄ませた。

「おはようございます、補佐官閣下」

罪悪感に重い胃を抱え、執務室に足を踏み入れたユーシウスを、いつもどおりにカルガが出迎えた。恭しい一礼に儀礼的にうなずき返し、続く嫌味を警戒して背筋を伸ばした瞬間、意外な質問が飛んでくる。

「ところで、何か悲鳴が聞こえましたが？」

危うく動揺を顔に出すところだった。全てを覆い隠すことは出来そうになかったので、不快感を前面に出すことで気を逸らす作戦に出る。

「……ああ、ちょっと、不愉快な夢を見てな。驚かせてしまったなら悪かった」

「悪魔になる夢、ですとか？」

追及は、恐れていた方からではなく慣れた方向から来た。ミアリが夢に侵入してきたことが関係あるのだろうかと、ユーシウスは表情を厳しくする。

「……私の見ていた夢が分かるのか？」

「いえ、ただかまをかけてみただけです」

しれっと応じるカルガの唇には、暗い笑みが浮かんでいる。

「そう警戒なさらずに。悪魔の血を引く、との噂はあなたご自身の耳にも何度も入っているでしょう。それともあなたにとって、悪魔になる夢は別に悪夢ではない、という意味でお怒りなら」

「……そうではない」

背後を気にしながら、かろうじてひと言反論すると、カルガの笑みはますます深く、暗いものになった。

「ご先祖に感謝なさることです。悪魔に魂を売り渡したからこそ、バディスの蛮族どもを次々となぎ倒す力を得たあなた方は、騎士の位を手に入れた」

「……私の祖先がルマリアと共に攻め滅ぼしたのは、バディスだけではない。ランドールも、キメレアも、ミラン・ピクスも、メールセンも、全てだ。そして、我が祖先は決して悪魔と取引などしていない」

歴史書を読み上げるような調子で模範解答を述べる、それしかできない自分に辟易する。しかし、ここで怒りに身を任せる訳にはいかない。

下らない噂を体現する訳にはいかない。

先祖伝来受けてきた汚辱を、自分の代で雪ぐことこそがユーシウスの悲願なのだから。

「左様でございますな。先見の明を持つ、賢きベルールの民は、ルマリアの先兵として全ての民を足蹴にした。別段バディスに恨みがあった訳ではありますまい」

アシュリー家にまつわる噂話については否定も肯定もせず、カルガも模範解答を読み上げる。

「――もういいだろう、館長閣下のところへ行くぞ」

「おや、バディスの話に傾ける耳をお持ちではないと？」

「そういう訳ではないが、館長をお待たせしては申し訳ない。続きは悪いが、道すがら聞こう」

問答無用で部屋を出たユーシウスを、カルガが「なるほど、右から左へ流すのが適切な話という訳ですか」などと言いながら追いかけてくる。

心底腹が立ったが、今はカルガの話などどうでもいい。

問題は、一連の会話を多分ミアリに聞かれただろう、ということだ。

昨日よりは早い時間に部屋の鍵が回った。タペストリーの模様を数えて飢餓感を紛らわしていたミアリはびくりと身を竦め、それからおずおずと立ち上がる。

「お、お帰り、なさいませ」

ミアリが部屋の隅にせっせと積み上げたのと似たような、粗末な木箱を抱えて戻ってきたユーシウスに飛びつきたい衝動はまだあった。けれどその衝動をかろうじて抑制できる程度には媚薬の効き目も薄れてきており、そして盗み聞いた話は衝撃的だった。

「……今夜はおとなしいな」

あまりミアリのほうを見ず、持ってきた木箱の蓋を意味もなく撫でながら、ユーシウスがぽつりとつぶやく。

「昨夜の夢のせいか？　それとも、今朝方カルガがしゃべったことのせいか？」

単刀直入な質問に、ミアリは言葉に詰まった。だがごまかしすら聞こうともせず、ユーシウスはいら立ったように話を進めていく。

「言っておくが、私は悪魔の血など引いていない！」

叩きつけるような言葉に怯え、身を竦めるミアリを見ないまま、ユーシウスは続けて叫んだ。

「私の先祖はきちんと武功を立て、それに相応しい地位を得ただけだ。悪魔と契約などしてい

ない、そんなはずがない……!!」

「ユ、ユーシウス様、落ち着いて……！　人が来てしまいます……!!」

だんだん大きくなっていく声に怯えてそう言えば、ユーシウスは薄く笑った。

「……館長閣下が人払いをしてくださっているので、よほどの大声でなければ大丈夫だと思うが……そもそも好んで私に近づきたがる者は多くないしな。しかし、確かに人が来れば、君が困るか」

陰鬱な笑みもまたいい、と思ってしまうが、言いたいことはそうではない。

「ユーシウス様だって……、怒られます、その、カルガという人はとにかく、館長閣下はあなたの上官ですよね……？」

もう二日もミアリをここに匿っているのだ。情報を聞き出すにしても、報告ぐらいしてしかるべきだろう。

「……いや」

懸命に話を逸らそうとしても、ユーシウスは自嘲的に頬を歪めるばかりだ。

「自分の中の悪魔を祓うため、君を使って実験をしていた、と言えば話は通じる。君を人間にできるなら、私の中の悪魔も祓えるかもしれない、と……」

明らかな矛盾を、ミアリは恐る恐る聞き返した。

「……あ、の。ユーシウス様は、悪魔の血なんか、引いて、ないんじゃ……」

「――本当は私にも、よく分からないんだ」

疲れたようにつぶやくと、ユーシウスは崩れ落ちるように椅子に座った。うつむき、膝に載せた木箱の上で両手を組むと、

「アシュリー家の祖先が、多少腕に覚えがある程度の家士だったことは事実だ。ルマリア帝国建国に尽力し、正式な騎士の称号を得たことも事実。激しい戦乱を勝ち残るため、悪魔の力にすがった者が多くいた時代だったことも、やはり事実……」

ルマリア帝国が安定期に入って以降に生まれたミアリには、正直このあたりの話はぴんと来ない。そもそも人間界の事情はおろか、魔界の事情にも全く詳しくないのだが。

「無論私は、私の祖先がそのような真似をしたとは信じていない！　……実際、祓魔師を呼んだこともあったが、何も問題は見つからなかった」

「あら、それでしたら、やっぱりユーシウス様は悪魔ではないのでは……？」

法術に特化した悪魔退治の専門家、祓魔師が異常を認めないのなら問題ないのではないか。ほっとしたように笑うミアリに、ユーシウスは黙ってかぶりを振った。

「だが……、夢を見るんだ。何度も何度も。君たち夢魔が私を狙い始めてから、特に頻度が高くなった……」

言われて、ミアリも恐怖の記憶を思い出す。

氷に閉ざされた世界、氷に閉じこめられたユーシウス。その背に生えた十二枚の黒い翼。

無論、夢はしょせん夢であり、どんなことでも起こり得る。自分が悪魔かもしれない、というユーシウスの恐怖が反映されているに過ぎない可能性は高い。

ただ、あの時ミアリを凍りつかせた膨大な魔力の説明としては、足りない気もする。

「……君を人間にしたいと言ったのは、君に少し、私と似たものを感じたからだ。……異物として疎外されるのは、人でも悪魔でもつらいものなのだな」

非常に夢魔らしいことを珍しく考えていたミアリは、ユーシウスが顔を上げたことに気づいた。高い鼻の先が、少し赤らんでいる。

「君はあまり、夢魔らしい夢魔ではないと思う」

「……はい、すいません。もっともっと、ひと目で相手をひれ伏させるほど美しければよかったのに……」

人間の美少女程度の魅力しかない、底辺夢魔との自覚はある。うなだれるミアリを、ユーシウスは慌てて慰めてくれた。

「いや、見た目は十分……ではなくて、その、心根がな。人間界も決して楽園ではないが、魔界でなんとかという男にすがって生きるよりは、人として生きるほうがましではないか。き、君は、人間なら十分すぎるほど、う、美しい、し……その気になれば、立派な淑女に……」

気恥ずかしそうにぼそぼそと語られる言葉を、ミアリはぽかんと口を開けて聞いていた。

この間から、何度もこういうことが起こる。

ユーシウスはたびたび、ミアリにはよく分からない価値観に基づいた発言をする。これまでは戸惑いのほうが強かったが、今、はっきりと思った。

嬉しい。

ユーシウスに褒められると、ものすごく、嬉しい。

「……茶でも、淹れようか」

気まずくなったのか、キア茶に逃げようとしたユーシウスにミアリがこう言った。

「ユーシウス様は、もしかすると夢魔なのかもしれません」

「なっ!?」

腰を浮かせかけていたユーシウスが眼を剝いた。その指摘は予想外だったらしく、おろおろと視線を巡らせながら、

「……確かに、私は別に自分の外見などどうでもいいが、容姿を褒められることはよく……い、いや、そんな、そんなはずがない、この私がそんなふしだらな!! そして我が家の祖先は、どうやって夢魔の力を借りて出世を……!?」

一気に先走ったユーシウスは、あらぬ考えに及んだらしく金髪を掻きむしっている。

赤くなったり青くなったり忙しい彼を、ミアリはうっとりと眺めて微笑んだ。

「だって私、また、どきどきしてきたんですもの……」

徐々に媚薬の効き目が薄くなってきている気がしていたのに、甘い毒が心を満たしていくの

を感じる。
　ユーシウスにとって悪魔が唾棄すべき敵であるように、ミアリにとっても人間は餌に過ぎないのに。なのにいちいちその言動に喜びを感じ、はしゃいでしまうなんて、魅了の術にかかっているとしか思えない。
「ユーシウス様が優しいことを言ってくださるたびに、私……どんどんあなたに、惹かれていくんです……魅了の魔法を、魔力も発さずに使うなんて、さすがですね……」
　夢魔の心さえ翻弄するなど、きっと相当上級の夢魔が彼の祖先に違いない。
「……それとも、私がだめな悪魔だから効くんでしょうか……」
　後半ちょっと落ち込んできたミアリに対し、ユーシウスは一時はほっとした様子になった。
「――な、なんだ。そういう、ことか」
　が、わずかな間を置いて、いきなり赤くなってうつむいてしまう。
「ユーシウス様？」
「くそ、私としたことが……」
　顔を覗き込もうとするミアリの視線を避けるようにしながら、ユーシウスは咳払いした。
「……勘違いしてほしくないことが二点ある。まずひとつは、その理屈でいくと私は夢魔ではない。そして、私は別に、君に優しくしているつもりはない。もし、君が人間になれるなら……わ、私の中にいる得体の知れないものも、祓えるかも、しれない、から、な……うわッ」

偽悪的な言葉を無理やりひねり出す作業に気を取られたか、ユーシウスが手にしていた木箱をひっくり返した。

途端に物でいっぱいの床に広がったのは、初めて見る、しかしとても美しい造形の乱舞。細長い緑の棒のような部分の先は、よく見ると一本一本色も形も違う。香りも微妙に違うけれど、それぞれにとても香しい。

「きれい。いい、匂い。これは……もしかして、花、ですか？」

アドルニからいつか聞いた話を思い返して尋ねると、ユーシウスは驚いた様子ながらうなずいてくれた。

「……確かにそうだが、見たことがないのか？」

「魔界に、花は咲きませんので……でも、人間の女性の気を惹くためには、有効だと聞いたことがあります」

「……なるほど」

初めて見る花に、ミアリは戸惑いながらも瞳を輝かせている。そんな彼女を眺めて、ユーシウスは言いにくそうにつぶやいた。

「その、薬の効果でおかしな真似をしているだけなのに、朝方もさっきも怒鳴りつけてすまなかった。私は女性が喜びそうなものがよく分からないので、とりあえずこれを持ってきたんだが……本当は君の着替えも用意したかったのだが、さすがに私が女物の服を用立てるのは難し

くてな……」

暇つぶし用に子猫でも連れてきたほうがよかっただろうか、と真剣にひとりごちているユーシウスに、ミアリは花がほころぶような微笑みを浮かべた。

「嬉しい」

「……こ、こら、やめたまえ。そんな風に……、笑うな」

自分程度の笑顔では、やはりユーシウスには見苦しくしか映らないようだ。少し悲しくなったが、それでも勝手に頬が緩むのを止められないまま、

「嬉しいです、ユーシウス様。どうぞいくらでも、私を使ってください。あなたのお役に立てるなら、なんでもします。おっしゃるとおり私は、人間として暮らすほうが生きやすいのかもしれませんし」

「いや、花ごときで君を懐柔しようとしたんじゃないぞ！　き、騎士は女性を、尊重せねばならない……!!」

よほど「騎士」にこだわりがあるらしく、自分に言い聞かせるようなつぶやきに微笑みを浮かべながら、ミアリは淡い桃色をした花を初めて手に取った。

「気を付けたまえ、中には聖具もいくつか交じ……」

注意をうながしたユーシウスの瞳が見開かれる。

そうしようとした訳ではない。

だがミアリの手の中で花はあっという間に茶色くしなび、代わりに微量の精気が流れ込んできた。

「……えっ？」

ミアリにも最初、何が起こったのか分からなかった。

けれどユーシウスの顔が強張ったのと、葉とも花びらとも判別のつかなくなった乾いた欠片が宙に舞ったのを眼にした瞬間、気づいた。

「ご、ごめんなさい！　私、こんなつもりじゃ……!!」

慌てた拍子に、足がもつれた。雑多な品物と枯れた花びらの残骸に足を取られ、転びそうになるミアリをユーシウスが慌てて支える。

そしてミアリがひとりで立てるようになった瞬間、両者ともぱっと手を放した。

ミアリは、ユーシウスの精気を吸ってしまわないかと恐れ……ユーシウスも、きっとそれを恐れたのだろう。

「いや……、そうだった、な。君は、悪魔だった」

ユーシウスは、表情の選択に困っているようだ。ミアリは何か言わねばと思い、必死にこうまくし立てた。

「あの、ご、ごめんなさい、大丈夫です、花と違ってユーシウス様はとってもお強いですから、触れただけで私なんかに精気を吸われるようなことは……!!」

言ってから、なんの慰めにもなっていないことに気づく。己が手にかけた花のように元気を失い、下を向いたミアリを、ユーシウスも困ったように見やる。

「……泣きそうな顔をしないでくれ。腹が減っていれば、差し出された物を食べてしまうのは当たり前だ。しかし、本当は子猫でも連れてこようかと思っていたんだが、やめておいて正解だったな」

仕方がないことだと結論づけた後、床に散らばった花を拾い集め、花瓶代わりに木箱に差し始める。

「本当に、ごめんなさい……」

皮肉と取ったミアリは大きな瞳を潤ませたが、ユーシウスは手元に視線を落としたまま言い訳をする。

「い、いやその、猫は鳴くかもしれないし、それに、もしも猫の精気を吸ってしまったら、君はもっと……ああ、何を言っているんだ、私はッ!!」

自分を持て余すように口走る言葉が、また甘い毒となってミアリの中に浸透していく。

本当に自分はだめな夢魔だ。アドルニが持たせてくれた媚薬ならともかく、人間の聖騎士の魅了（チャーム）にたやすくかかってしまうなんて。

……そういえばアドルニは、今ごろどうしているのだろうか。

成功するまで帰ってくるな、と言われているし、人間界の時間でまだ三日しか経っていない。しかしそろそろ、首尾はどうだと聞かれてもおかしくない。

とはいえ、自分よりはましな夢魔とはいえ、アドルニは果たしてここへ来られるのだろうか。眼くらましの術はユーシウスには通用しないのだから、下手をするとアドルニまで捕まりかねない。

でも、今は正直、アドルニに会いたかった。

花の精気を無意識に吸ってしまうぐらい、ミアリは消耗しているのだ。このまま行くと、駄目元でユーシウスに襲いかかって返り討ちに遭うか、あるいは——消滅か。

少し暗い顔をしていたら、ユーシウスは勘違いしたらしい。

「……だからといって、物欲しそうな顔をしても、私の精気を吸わせてはやらんぞ」

「あぅ、は、はいッ!!」

冷ややかな台詞にミアリはしゃんとするが、無論ユーシウスも、ミアリの状況には気づいているようだ。

「……どうにかしないとな……いろいろと」

ばたばたしたせいではだけかけているミアリの胸元を一瞥し、彼は意味もなく咳払いをした。

淫欲公の領地の中央部。暴雨吹き荒れる最中に威風堂々と立つ石城を遠く望む巨大な岩の上で、アドルニは必死に言い訳を続けていた。

「申し訳ありません、あと少しだけお待ちください」

「お前、いつもそればかりだよな」

平伏したアドルニを取り囲んだ数匹の夢魔たちが、口々にみじめな彼を嘲笑う。

「貴重な薬を無駄にさせられた」

「あんな半人前をあてにする時点で、こうなることは分かってたんだよ」

「大体お前みたいな無能は、誰が次の淫欲公になっても同じことさ」

アドルニを取り囲む夢魔たちは、みなそれぞれに非常に美しくなまめかしい。その口元に歪んだ笑みを浮かべていても、毒々しい強さに満ちた美は少しも損なわれていない。

ミアリも、そしてアドルニも持ち得ない凶器としての魅力。

形良い唇を噛んで耐えるアドルニに冷めた視線を投げていた夢魔たちは、やがて彼への興味をなくしたようだ。這いつくばったアドルニを無視して、互いの間だけで話し始めた。

「あの騎士に下手に固執した大物が何匹もやられて、風向きが変わってきているようだな」

「嫉妬公を目指す連中と、獲物の取り合いになっているらしいし」

「取り入る相手を変えるべきかもしれないな……」

彼らもまた、アドルニから見れば格上であっても、しょせんは淫欲公になどなれはしない中位の夢魔たちだ。この時期に膝を折る相手を間違えれば、代替わりが成った後、次の淫欲公に粛正される可能性は高い。

ましてアドルニは、直接淫欲公候補にはべることなどできない下級夢魔だ。頭上で勢力図の解析に夢中の夢魔たちに見捨てられれば、這い上がる機会はまた次の代替わりまで——数百年あまり先まで、待たねばならない。

「お待ちください。ミアリは、俺の言うことなら絶対に聞くんです。また人間界の時間ではほんの数日しか経っていませんし、もう少しだけ時間を……」

「ふん、どうせとっくに消滅させられているんじゃないのか？」

小馬鹿にしたように言い返され、アドルニは一瞬返す言葉に詰まった。だがすぐに、無意識に髪をいじりながら懸命に追いすがった。

「そ、そんなことはありません」

口では否定するものの、片手が黒髪の先をいじっている。ミアリも知らない、嘘をつく時の彼の癖だ。

——本当は、アドルニも薄々ミアリが返り討ちに遭ったのではないか、と危ぶんではいたのだ。というのもミアリをルマリア帝国首都まで送り届けて以降、せっかくかけた探査の術が消えてしまったのである。

もちろん、本人が消滅すればかかった術は消えるのだ。だがやはり、ちゃんと確かめなければならない。

「すぐに確認しに行って参りますので、どうかもう一度機会をください」

岩に額をこすりつけるようにして懇願すると、夢魔たちは馬鹿にしたように笑った。

「好きにすればどうだ？　いいかげんお前の汚い顔も見飽きたしな。あの騎士を堕落させるまで帰ってくるなよ、アドルニ」

「別に帰ってこなくてもいいけどな。お前なんぞが夢魔を名乗るとは片腹痛い、一族の面汚しが‼」

口々に罵声を浴びせ、夢魔たちはその場を離れていく。

ひとり取り残されたアドルニは黙って頭を下げながら、苦々しく独白した。

「今に、見ていろ……！」

激しい風に巻かれて誰の耳に届くこともなかったが、彼は確かにそう言った。

ミアリが花の精気を吸ってしまった翌日の朝、ユーシウスはいつものようにカルガに会うため執務室へ行こうとした。

「いってらっしゃいませ、ユーシウス様……」

寝台に身を横たえていたミアリは体を起こそうとしたが、すぐに止められてしまう。

「……いいから寝ていたまえ」

自分は椅子を並べた上で睡眠を取っていたユーシウスは、そう言い置いて行ってしまった。

ひとり残されたミアリは、ふうっと大きなため息をついて枕に顔を埋める。

一夜明け、本格的に衰弱がひどくなってきた。視界がぶれ、眼に映る全てが二重に見える。

ユーシウスの勧めもあり、彼が持ってきてくれた花の精気をすべて吸ってみたが、焼け石に水だ。その瞬間はひと息つけるが、あっと言う間に飢餓が襲ってくる。

極上の魂が常に側に在る状況に置かれていることを思えば、なおさら。

「……だめ……」

ほしいけれど、可能なら今すぐ追いかけていって襲いかかりたいけど、でも、だめだ。

ユーシウスの精気を吸うなんて、できない。

「……どうして？」

自分の心の動きが理解できず、横たわったままミアリは首を傾げた。部分的にきつくて苦しそうだから、という理由で与えられた大きめの麻のシャツのおかげで、体を動かすのに苦痛はない。

眠るユーシウスの夢に侵入を果たさずにいられたのは、弱ってろくに魔力が使えないから、という理由はもちろん大きい。

だがそれが全てではないことを、もうミアリ自身が分かってしまっている。

アドルニなどと比べるといかにものんびりしていても、ミアリだって夢魔だ。人間の血が混じっているということだって、他の悪魔から聞かされただけ。

父親の顔も名前も知らないし、ぼんやりとした思慕は感じるけどそれだけだ。元は堕天使である悪魔たちにとって、「父」とはいまも天上にいます神のことであり、親を賛美するような風習は魔界にはないのだ。

人間は餌。ユーシウスはその中でも極上の餌。

けれど、どうしてか、少なくとも自分の意志で、彼の精気を吸いたいとは思えない。

――汚らしい夢魔めが。

昨日の冷たい罵倒を思い出すと、まだ身のうちに残った媚薬か、夢魔の性だかが反応してちょっぴりぞくぞくしてしまったりもするが、それ以上に……、悲しい。

ユーシウスに嫌われたくない。

人間になることも、ましてや淑女になることもまるでぴんと来ないままだが、ユーシウスが喜ぶなら……その願いを、叶えてあげたい。

「やっぱりユーシウス様って、夢魔なんじゃ……」

「おい、ミアリ!?」

しつこく疑っているミアリの耳に、聞き慣れた呼び声が重なる。

ぎょっとして眼を見開くと、すぐ横の敷布の上に蝙蝠状の翼を広げたアドルニが立っていた。

純粋な悪魔である彼の幽星体（アストラル）は、転移の術など使わなくても建物の壁ぐらい簡単にすり抜けられる。

「まあ、アドルニ様、煙が出てますけど大丈夫ですか……!?」

とはいえ、聖騎士の集う建物へ無傷で侵入するまでの力はなかったようだ。剝き出しの肩や羽に火傷を作ったアドルニは、それどころではないと吠（ほ）える。

「うるさい、後で適当に女でも襲ってくるからいいんだ！　それよりくそっ、やっぱりどじを踏みやがった！　あの騎士に捕まったんだな!?」

消滅してはいないものの、ユーシウスの部屋でぐったりしているミアリはそうとしか見えないだろう。

実際ミアリはユーシウスに囚（とら）われている。体も、そして甘い毒に侵食されつつある心も。

「あ、ええ、まあ……あの、ごめんなさい、それより先に、精気を」

「話が先だ!!」

とりあえず頼んでみたが、にべもなく一喝されてしまった。

やむなくミアリはのろのろと体を起こし、経緯を手短に説明する。アドルニはみるみる顔色を変えた。

「あの媚薬を飲まされて、あいつの下僕になっただと……!?　ああ、くそ、本当に使えないなお前はッ!!」

案の定ものすごく怒られてしまった。返す言葉もないミアリは、「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」と繰り返す。

「おまけにお前を人間にする、だと!?　ふざけるな、そんなことができるはずがないだろう!!　大体お前みたいな底辺夢魔、下手に人間なんかになったら娼館にでも売り飛ばされるのがおちだ!!」

ショウカンとはなんだろう、と人間界の風俗に詳しくないミアリは首を傾げるが、聞き返せばまた怒られるか馬鹿にされるかするだけだ。素直に「すみませんすみませんすみません」と言っておいた。

しかし、当初はミアリを蹴り飛ばしそうな勢いで怒り狂っていたアドルニは、途中から思案顔になった。

「いや……、待てよ。確かにあれは強力な薬だが、その分効力は短い。お前がここに来てから、もう三日だろう？　なら、だいぶ効き目も薄くなってきたはず……」

ついには満面の笑みを浮かべたアドルニは、でかした、とでも言うようにミアリの頭をぐりぐり撫でてくれた。

「――そうだな、ちょっと予定とは違うが、奴の懐に飛び込むところまでは成功しているんだ！　しかもお前が下僕状態だと思えば、あいつも油断するだろう。でかしたぞ、ミアリ!!」

珍しく褒められてしまったが、残念ながらそれは違う。

「それが、違うんです、アドルニ様。どうやらユーシウス様は、魅了が使えるようなんです」

「……なんだと？　そんな馬鹿な、あいつは聖騎士だろう？　確かに、祖先がどうとかいう噂はあるようだが、人間は都合の悪いことはみんな悪魔のせいにするからな」

アドルニはどうやら、ユーシウスにまつわる噂を聞き知っていたようだ。しかしあくまでただの噂だと思っているらしく、不審そうにするばかり。

「でも……、ユーシウス様、時々、不思議なことをおっしゃるんです。体を大事に、しなさいとか。他の男の人を、襲ってはいけないとか……」

反論するために口に出した言葉が、ユーシウスの声で耳の奥に蘇る。甘いような苦いような、複雑な気持ちも一緒に蘇ってくる。

「そのたびに私……、胸がきゅんとして……、どうも、魅了されてしまうようなんです……」

頬を染め、小さな声で語るミアリをアドルニは驚愕の表情で見つめている。

「……本当に、低脳で、申し訳ないです……」

いつものように激しく罵倒されることを覚悟していたミアリだが、声もなくただ見つめられるのも怖い。沈黙に耐えられず、いよいよ卑屈になる彼女に、アドルニは乾いた声で言った。

「――お前、まさか、あの男のことを」

緊張をはらんだ言葉が、不意に途切れる。

「まずい」

顔をしかめたアドルニが壁のほうを向くやいなや、その姿は宙に溶けるように消えていく。



どこかへ転移する気なのだ。

「アドルニ様っ……!?」

引き留めようと伸ばした手は、幽星体を虚しくすり抜けるばかり。間抜けな姿を瞳だけ振り返ったアドルニは、冷たい声でこう命じる。

「俺がまた来るまでに、あの騎士を堕としておけ。いいか、他の夢魔たちが奴を諦め始めた今が好機なんだ。でないと俺もお前も、魔界に居場所はないと思え!!」

脱出時にも法術に邪魔されているらしく、ぱちぱちと火花を散らしながらアドルニは姿を消した。

「ま、待って、精気を分けてください……!! でないと、私……!!」

すがりつかんばかりの懇願も効果はなかった。頼みの綱のアドルニは去っていき、力尽きたミアリはぐったりと寝台に身を預ける。

「に、人間になったり、ユーシウス様を堕落させる前に、私が消えそう……」

意識が混濁する。深い深い闇の淵へ、否応なく引きずり込まれていくのが分かる。

夢魔でありながら昼寝好きのミアリだからこそ、これは眠りに落ちるあわいの感覚とは違う、と分かる。「次」がない、「目覚め」のない……「無」に至る眠りが、自分を呑み込もうとしている。

願いを込めて部屋の中を見回しても、室内に精気を吸えそうなものは何もない。暇にあかせ

てあらゆる物の数を数え上げたのだから分かっているが、それでも、期待したかった。
このまま消えたくない。
せめて最期にひと目、ユーシウスに会いたい。
願っても、陽がまだ高いこの時間、忙しい彼が戻ってくることはないだろうけれど。
「……ユーシウス様の裸を、もっとちゃんと見ておけばよかった……」
無念を噛み締めていた時だった。

「ミアリ、大丈夫か」
最初は幻聴かと思った。
「ミアリ、おい、しっかりしろ!!」
だがこちらを覗き込む心配そうな表情の幻覚にくわえ、肩を摑んで揺さぶられたので、ようやく本物のユーシウスだと分かった。
「……ユーシウス様？　あ、あら、なんだか、今日は、早いですね……」
ぼんやりしながら美しい顔を見上げたミアリの鼻先を、甘い匂いがくすぐった。
この間ユーシウスが持ってきてくれた花とはまた違う。今も体にかかっている上掛けから感じた覚えがある、甘ったるくて、食欲をそそる香り。

一方ユーシウスは、魅惑的な匂いを漂わせた木箱を卓の上に置きつつ、別の匂いに不審そうな顔をしている。

「……なんだ？　焦げ臭くないか」

もうひとつの木箱を手近の棚に置きつつの指摘に、ミアリは縮み上がった。……アドルニが急いで姿を消した原因はユーシウスの接近だったのだろうが、出入りの際に術に焼かれた臭いがまだ残っているのだ。

「あ、あっ、あの、そのっ、わ、私、また、聖具、触ってっ」

焦げ臭さに紛れた硫黄臭にユーシウスが気づかないうちにと、ミアリは必死に言い訳を考えるが、何も浮かんでこない。不自然なその挙動が、決め手になったようだ。

「……例の、君をいじめていた夢魔が来たのか」

不愉快そうに眉根を寄せたユーシウスは、あっさりとアドルニの来訪を看破してしまった。

「彼はなんと？」

「あ、ええと……」

――俺がまた来るまでに、あの騎士を堕としておけ。いいか、他の夢魔たちが奴を諦め始めた今が好機なんだ。でないと俺もお前も、魔界に居場所はないと思え!!

いろいろな意味で、とても言えない。やむなくミアリは、過程を全部すっ飛ばした。

「な、何も。急に来て、ユーシウス様がお戻りになることを察知してか、また急にいなくなっ

てしまって……せ、精気も、分けてもらえませんでしたっ……!!」

「――ミアリ」

にこりと、ユーシウスが微笑む。甘く優しい誘惑がその唇から発せられた。

「ちゃんと答えられたら、私が精気を与えてやろう」

「『俺がまた来るまでに、あの騎士を堕としておけ。いいか、他の夢魔たちが奴を諦め始めた今が好機なんだ。でないと俺もお前も、魔界に居場所はないと思え!!』とおっしゃいましたっいただきます!!」

ひと息に自白したミアリに抱きつかれ、ユーシウスは悲鳴を上げた。

「こ、こら、やめないか！　落ち着け、離れろ、分かった、勘違いさせて悪かったッ!!」

まだユーシウスは白い騎士服を着たままなのだ。飢餓も頂点に達し、見境がなくなりつつあるミアリをユーシウスは必死に引き剝がした。

「全く……だが、さすがに他の夢魔たちは諦め始めた、か。ならば、後は吸精以外の方法で精気を得ることさえできれば、長期戦も可能だな……」

そんな独り言を言いつつ、火傷した手の平をさすっているミアリに木箱を差し出す。

「これは……」

また花かと思ったが、そうではなかった。色も形も様々なところや、甘い匂いをさせているところは同じだが……これは、菓子だ。

それもクッキーなどはとにかく、パイやらタルトやら、チョコレートで表面を覆ったトルテまで。高位の貴族でなければ口にできないような豪華な菓子が、木箱の底にぎっしりと並んでいる。

「花や小動物から精気を得るのは気まずいのだろう？　だから、食べ物を用意してみた」

ルマリア本国を含めて七つの国の文化が入り交じった帝国内は料理の種類が豊富で、特に菓子は多いとアドルニが言っていた。ちなみにユーシウスが属するベルールは、元は料理のまずさで有名だったらしい。

「あー、ところで今さら聞くが、君は食べ物を食べることはできるのだよな？　以前、茶を飲んでいたかと思うが」

「あっ……え、その、まあ、一応は」

出会った時のことを話題にされると、いろいろ思い返して死にたくなる。だが今はそれよりも、眼の前の菓子が発する甘い誘惑に惑わされている。

木箱の縁にしがみつき、じっと菓子の群を見つめているミアリにユーシウスが微笑んだ。

「どれでも好きな物を取って、食べたまえ」

皿とフォークまで手渡され、ミアリは困惑しながらもこう聞き返す。

「え……、いいの、ですか？」

「もちろんだ。そのために、持ってきたのだから」

許可が出た途端、「待て」を解かれた犬のようにミアリは行動を開始した。本能の赴くまま、チョコレートたっぷりのトルテを手で摑み取る。

「こら、淑女がそのような……！」

慌てるユーシウスの声も耳に入らない。食べ方の作法をまるで知らない訳でもないのだが、せっかく渡された食器を放り出してミアリはトルテにかじりついた。

「……いや、いい。気が済むまで、食べたまえ」

諦めたようにつぶやいたユーシウスは、ちらと木箱の中身に視線を走らせてから立ち上がる。適当な書類を一束取り上げ、椅子に腰掛けて読み始めた。

そのことにも気づけないまま、ミアリは一心不乱に菓子を食べた。口の周りも借り物のシャツもべたべたになったが、乾ききった肉体に栄養が補給されていくのがあまりにも心地よくて止められない。

中途半端に肉体が存在しているからこそ、食物を通じて栄養を摂ることができたのだ。ミアリは初めて己が肉体を持っていることに感謝し、そこに眼をつけたユーシウスの慧眼に感服した。

「けぶ、あ、ああ、ごめんなさい、こんなに汚して……！」

ようやくひと息ついたミアリは、ついでに理性も取り戻した。我に返って謝るが、ユーシウスは素っ気ない。書類から顔も上げずに、

「汚れは後で落とせる。構わないから、どんどん食べたまえ」

冷たく響くほど淡泊な答えに、ミアリはびくっと動きを止める。
「ご、ごめんなさい。浅ましい、姿を……」
暴食公の眷属のような姿をさらしたことを恥じていると、ユーシウスは少しだけ表情と声音を和らげてくれた。
「消滅しかけていたのだから仕方がない。まあ、せっかくだから皿とフォークは使ってほしいが」
汚れを払う手間をかけるだけではないか、とも思ったが、ミアリはおとなしくアップルパイを皿に移した。あくまでこちらを見ようとしないユーシウスが、やっぱり怒っているような気がしたからだ。
「本当に、申し訳ないです……」
「気にしなくていいと言っている。それより、もっと食べたまえ」
まだ木箱の底には、半分以上菓子が残っているのだ。素早くそれを確認したユーシウスに言われ、アップルパイを食べ終えたミアリは恐縮した。
「い、いいえ、もう」
「なんだ、君は三日も栄養補給をされていない状態だったのだろう？　私のことは気にするな、精気を直接吸われるよりは何倍も助かるのだから」
「いえ、あの……、本当に、おなかがいっぱいで」
吸精と違い、食物からの栄養補給は時間がかかる。肉体をあまり使い慣れていないから、な

おさらだ。

おまけに、いくらなんでも菓子ばかりこんなに食べられない。花同様、女性は菓子が好き、という単純な思い込みで持って来てくれたのだろうが、それにしても量が多すぎる。

「ひょっとすると、甘い物は嫌いか？」

「い、いえ、食べ物を食べること自体初めてですし……見た目も可愛いし、甘くてとてもおいしかったです。ただ、ごめんなさい、一度にもうこれ以上は入らなくて」

今さらの問いに困りながらもそう断ると、ユーシウスはようやく納得したようだ。まだ半分以上菓子の残った木箱を閉じ、もうひとつ持ってきた木箱を開いた。

中から取り出されたのは、キッチンメイド用と思われるひと揃いの服だ。法術できれいにしたのか、白いエプロンには染み一つないが、生地自体はかなりくたびれている。

「厨房に行ったついでに、適当な理由で譲り受けてきた。少々古びているが、油などから身を守るため肌の露出はないに等しい。淑女に相応しい衣装だ」

「分かりました、これを着ればユーシウス様の好みになれるんですね！」

満足そうにつぶやいたユーシウスの望みどおり、ミアリは早速着替えを始めようとした。

「淑女が男の前で服を脱ぐな!!」

……シャツの釦を外そうとした瞬間注意されたので、おとなしく部屋の隅に行って着替える。

「……終わったのか？　よし、では茶でも……」

律儀に壁のほうを向いたままキア茶を淹れていたユーシウスは、ミアリを見て絶句する。
「あ、あら？　こういう衣装が、お好きなんですよね……？」
標準的な女性のためにデザインされた、白黒のメイド服。足首までをきっちりと、体型の全てを覆い隠すはずの禁欲的な衣装の胸部は、ぱんぱんに押し上げられている。
「……余計に卑猥なような……いや、なんでもない、座りたまえ!!」
「は、はい、あの、お茶までありがとうございます!!」
せき立てられ、気づけばすっかり体調もよくなったミアリは、礼を述べてからユーシウスと一緒にカップを傾けた。

アドルニが焼けた匂いは菓子とキア茶の芳香に駆逐されたようだ。ユーシウスが時折書類をめくる音以外、室内に他の音はない。
沈黙は、だが気詰まりではなかった。
服を着ることにも慣れてきたし、多少回りくどくはあるが精気を得る手段も分かった。アドルニのことなど、いろいろと不安もあるが——ユーシウスと二人きりでキア茶を飲んで寛げる、この幸せの前には些末なことだ。
本当に、ユーシウスと二人きりで昼間から茶を飲んで寛げるなんて……

「……あの、ユーシウス様。今日は、どうしてこんなに早くお戻りになったのですか？」
ばたばたしていて聞き忘れていたことを思い出し、ミアリはそっと尋ねた。
もしかするとアドルニの来訪に勘づき、戻って来てくれたのだろうか。嬉しいような、申し訳ないような気持ちで聞くと、ユーシウスはようやく書類から眼を上げてくれた。
「今日早く帰ってきたのは、口が固くて信頼できそうな、悪魔祓いに詳しい人脈にひととおり声をかけ終わったからだ」
「え？」
「言っただろう？　君を人間にする、できれば淑女にしてみせる、と」
何度目かの台詞を、ユーシウスはもう一度口にした。
「――私の中の悪魔を祓うためにも、かつて何度か協力してくれた連中がいる。口は固い。腕もいい。……少々、既存の善悪から外れるきらいもあるが、研究者とはそういったものだろう」
微妙な言い回しが気にはなったが、ユーシウスはあまりそこには触れずに説明を続けた。
「だが彼らも、悪魔祓いの経験はあっても、半魔を人間にしたことはないらしくてな。やる気はあるようだが、すぐには返事はできないということだ。だからひとまず、私は溜まっていた仕事を片付けながら、ここで連中からの連絡を待つ」
要するに、祓魔師たちとのつてを辿ることをやめてしまうと、ユーシウスのこの部屋の外での仕事は昼過ぎに終わるということらしい。

「この、四百二枚ある報告書と、五十八個ある聖具と、百十三個ある私にはよく分からないものが全部、ユーシウス様のお仕事なんですか……？」

「……聖具を数えたりすると、また火傷をするからやめたまえ。そして書類はまたそんなに増えたのか……」

帰ってくるたび書類束を抱えている自覚はあるのだろうが、具体的な数字を出されてユーシウスはうめいた。

「全部が全部、私の仕事という訳ではない。正確に言うと、これはみなの仕事であり、誰の仕事でもない」

「え？」

謎かけのような言葉に小首を傾げるミアリに、ユーシウスはため息交じりに経緯を教えてくれる。

「……ここは騎士団への報告書と、それに付随する様々な物品の倉庫なのだ。去年の秋まで、私の部屋は隣の本館の最上階にあった」

「まあ、そうなのですか」

心なしか気恥ずかしそうな告白を、ミアリは別段妙にも思わず受け止めた。

「……気を遣って聞いてこないのかと思っていたが、その様子だと、もともと気にしていなかったのだな」

ミアリがもう少し人間界の事情に詳しければ、館長補佐官が使用人と同じ場所に居を構えていることに、もっと早く疑問を持っていただろう。苦笑して、ユーシウスは説明を続けた。
「だが、君たちの攻撃が激しくなるに従い前線を外された私は、いつ来るか分からぬ夢魔をひとりで撃退し、暇な時は誰も手をつけずに放っておいた雑用を片付けるよう命じられたのだ」
皮肉っぽい言葉を、ミアリはやはり素直に真に受ける。
「まあ、ではここにある報告書は全部、どうでもいいものなのですか？」
「……どうでもよくはない。帝国全土から集まった、悪魔が関わる事件に関する大切な報告書だ」
むっとしたようにユーシウスが言い返してきたので、思わず身が竦んでしまった。
「ご、ごめんなさい、私、よく知らないのに……」
差し出口を叩いたと謝ろうとしたその前に、ユーシウスが自らの口元を手で押さえた。
「――参ったな」
悪夢から覚めたようにまたたく瞳の縁は、羞恥をたたえてわずかに赤らんでいる。
長いまつげを伏せ、恥じ入るようなその表情に釘づけのミアリに気づかぬほど、ユーシウスは深く反省しているようだ。
「悪かった。私が先に傲慢な物言いをしたのだから、君がそう思うのも当然だ」
恥じ入るを通り越し、己を責めるようにその声は暗くなっていく。
「騎士は、弱き人々を守る者。この報告書の数だけ、困っている人々がいるというのに……」

無意識の傲りを見透かされたような気分なのだろう。落ち込むユーシウスの美しさはまた格別だった。本音を言うとちょっといじめてみたいような気持ちにもさせられたが、だんだん気の毒になってきた。

「あ、あの、でも、人には向き不向きがありますもの。それにユーシウス様はあくまで補佐であって、誰がどの仕事をするか、お決めになる訳では……」

「――……そうだな」

ユーシウスの声の調子が変わった。落ち込んだ気配は消えた。

代わってその身を包む刺々しい空気が、ぴりぴりとミアリの肌を刺す。

「お、お決めになるのは、ええと、確か……」

「ニークレーン・フォン・ファルバート閣下だ。ベルール国内においては随一の名家の子息であらせられ、ベルール騎士館長を務めておられる」

間髪を容れず返ってきたのは、ユーシウスの直属の上官の名前だ。毎朝迎えに来るカルガとともに、ユーシウスが挨拶をしに行っている男。

夢魔の標的にされたユーシウスを庇うどころか、前線から撤退させ雑務を押しつけ、毎日そのことを報告させている。あれだけ露骨にユーシウスを嫌うカルガのことを、把握していないとも思えない。

まるで、ユーシウスが堕落するのを待っているように。

「館長閣下も、騎士がお嫌い……？」

こわごわとそう尋ねると、ユーシウスは大きく息を吐き出してから、こう答えた。

「ご自分に従順な騎士は、愛しておられる」

それが、生真面目な彼の精一杯の反抗なのだろう。以降はぴたりと口を閉ざしてしまったので、仕方なくミアリは自問自答した。

「でも、随一の名家の出の方が、騎士館長……？　ユーシウス様がこだわる訳ですね、騎士はベルールではそれほど尊重されて……」

「よせ、ミアリ」

今度はミアリが口を閉ざす番だった。ユーシウスがはっとしたように話をさえぎったのだ。

「大丈夫だろうとは思うが、万一ということがある。君に皮肉のつもりはないのだろうが、今の話を館長閣下に聞かれたら」

気色ばんだユーシウスの迫力に押され、ミアリは声もなくこくこくとうなずいている。ユーシウスもかえって上官に失礼な態度を取っていることに気づいたらしく、いきなり話を打ち切った。

「……疲れているようだな。馬鹿なことをしゃべった、忘れたまえ。君は菓子でも食べて、あ

とは寝ていればいい。私のことは気にするな」

菓子入りの木箱に一瞥をくれ、ユーシウスは読みかけだった書類に眼を戻した。

言われてミアリは、そろそろ消化が進んできたこともあり、じゃあもうひとつ食べようかと木箱を引き寄せ……ふと、こう声をかけてみた。

「……あの……ユーシウス様、一緒にお菓子を食べませんか？　お茶を飲む時は、お菓子も一緒に食べるのですよね？」

いいかミアリ、人間は茶を飲み菓子を食いながら、互いに相手を値踏みする。そこで気の利いた会話をしてうまく立ち回ることができれば、悪魔を警戒している位の高い貴婦人でもいちころだ――と、アドルニが自慢げに言っていたのを思い出したのだ。

ところがユーシウスは、じろりと冷たくミアリを睨む。

「私が菓子を好むように見えるか？」

ひと言言って、また書類とにらめっこを始めてしまった。

「……すみませんでした」

うなだれたミアリは数枚のクッキーを、音を立てないように遠慮しながらかじった。気を遣いすぎてすぐにまたおなかいっぱいになり、木箱の蓋を閉じてしまう。

「それだけでいいのか？」

「ごめんなさい、おなかがいっぱいで……」

素早い指摘にますます満腹感が強まった。本当に今はいい、というのが伝わったらしく、ユーシウスが困ったように木箱を見やる。

「……そうか、それは困ったな。君がどれだけ食べるのか分からなかったので、ありったけの量をもらってきてしまった。術である程度保存は可能だろうが、味が落ちてしまうな……」

中身を一瞥し、またすぐに視線を書類に戻す。あからさまな態度に、ミアリは華奢な体を縮こまらせる。

「……見るのもお嫌なものを、わざわざ持ってきてくださったのに、ごめんなさい……」

「――ああ、いや」

にわかにユーシウスが慌てた顔になる。

「いや、嫌いでは、その、と、とにかく、もっと食べたまえ」

「いえ、あの、おなかがいっぱいで」

「む、そ、そうだったな」

さっきと同じやり取りをもう一度繰り返したあたりで、さすがにミアリも反応のおかしさに気づいた。

「あの、残すのも悪いですから、ユーシウス様がお食べになれば……？」

「……いや、私は別に、さっき食事をしてきたばかりだし」

小さな声でつぶやきながら、視線をさまよわせるユーシウスに効きそうな呪文を試してみる。

「き、騎士とはたぶん、なんでも残さずよく食べるのでは……」
「……なんでも騎士をつければいいと思っているな？」
自分でも「騎士」への拘泥を自覚しているらしく、半眼になってユーシウスが突っ込んできた。首を竦めるミアリだが、
「――だが、まあ、せ、せっかく、料理人が作ってくれたものだし、な」
咳払いしたユーシウスは、妙に形式張った調子で言うなりそろそろと木箱の蓋を開けた。蜂蜜に濡れ光るパンケーキに、若草色の瞳が吸い寄せられたことをミアリは見逃さなかった。だが彼は、さっきミアリが食べたのと同じクッキーを一枚手に取った。
健康そうな白い歯が、さくりとクッキーをかじる。懸命に眉根を寄せ、謹厳な表情を保とうとしているユーシウスに、ミアリはそっと尋ねた。
「……おいしいですか？」
「ま、まずくはない、無論。君は知らないだろうが、これだけ大量に砂糖を使った菓子は大変貴重なのだぞ。多くの税を使って作られたものなのだから、ありがたく、食べないと」
「まあ、そうなんですね……」
通貨の存在しない魔界で暮らしていたミアリには、「税」についての知識はアドルニから伝え聞いたものだけだ。強欲公の眷属なら自然と詳しくなるかもしれないが、今はそこまでの情報は必要ない。

ただ、こう切り返せる程度のことを知っていればいい。
「では……、そんなに貴重で、ありがたいものでしたら、全部食べないといけないですよね？」
「なんで君はそんなに、私に菓子を食べさせたがるのだ!?」
ミアリの企みに気づいたユーシウスが、引きつった声を上げる。劣勢を自覚してか、余裕のないその態度に臆せず、ミアリはうっとりと微笑んだ。
「だって……お菓子を食べると、ユーシウス様はとっても嬉しそうに笑うから……」
石でも噛んでいるような顔を作ってクッキーをかじる、その唇が幸福そうに緩むのをミアリはしっかり捕らえていた。
「なっ……、そんな、分かるほど……、いや」
誘導尋問に引っかかりかけたユーシウスは、口元を押さえてだんまりを決め込んでしまう。
「お好きなんですよね……？　お菓子」
「……」
「では……、もう私も食べられませんし、残りは処分してしまいますか……？」
「……！」
観念したように唇を噛んだユーシウスは、恨みがましい眼でミアリを睨んだ。
「君は本当に、私を堕落させたいらしいな……」

すねたようなまなざしが、不意打ちで心臓を襲う。

凛々(りり)しい立ち居振る舞いにはどきどきしたし、優しい笑顔にはくらくらしたが、子供のようにふてくされた表情にはまた別の魅力があふれている。卑怯(ひきょう)だわ、とミアリは頬を染めながら彼を責めた。

「ユ、ユーシウス様こそ、やたらと魅了(チャーム)を連発するのはやめてください……」

「なっ!? き、君こそ、作戦を変えてきただろう、どんどん……」

ミアリ以上に赤くなったユーシウスは、途中で言葉を切るなり木箱の中に手を突っ込んだ。

「ああ、くそ、分かった、分かった、そうだ私は菓子が好きだッ!!」

勢いのまま摑み出したパンケーキを、ちゃんとミアリが使っていた皿に載せるあたりはやっぱりユーシウスである。乱暴にフォークを刺し、半分ほどをひと息に食べてしまった彼は、不意に残りを放り出して顔を覆った。

「……くそ……、こういうものは、大きな戦果を挙げた後だけ、と決めていたのに……!」

まだパンケーキが口の中に残っているらしく、部分的に声がくぐもっているが言っていることは分かった。「騎士」がどうとか、「いい年の男が」とか、さらにぶつぶつぶやいている。

必死の本人には悪いが、その様は可愛いとしか思えなかった。

そしてユーシウスが本当に堕落したくないのなら、夢魔の立場から忠告したいことがある。

「……ああ、そうだ、君が全て食べてくれればありがたい……」

ミアリがパンケーキが載った皿を引き寄せたことを、ユーシウスは誤解しているようだ。しかしミアリはその口元へと、不器用に切り分けたパンケーキを差し出した。

「!?　ばっ、やめたまえ、こんな、昼間から女人に菓子を食べさせてもらうなど、本当に堕落してしまう……!!」

魔界の門が開いたかのように慌てふためくユーシウスに、ミアリはこれもアドルニから聞いた知識を披露する。

「厳しく自分を律している人間ほど、反動も大きいとは聞きます。あまりにも欲望を抑え込んでいると、かえって悪魔の誘惑に引っかかりやすいらしいです」

悪魔が高位の聖職者を好んで狙うのは、そういう意味もあるのだ。清らかな魂を持っている確率が高いことにくわえ、欲望との適度なつき合い方を知らない彼らは案外誘惑に引っかかりやすい。

「ですから、ユーシウス様のような御方は、たまには堕落したほうがいいのではないでしょうか……？」

「……堕落とは、そんなに気軽なものなのか……？」

不審そうに聞き返してきたユーシウスだが、彼も悪魔狩りの実戦経験を積んだ聖騎士だ。ミアリの忠告にも一理あると思ったらしく、差し出されたパンケーキをまじまじと見つめた。

形良い唇が、一瞬開きかけた。ミアリはつられて自分も口を開いてしまったが、ユーシウス

はすぐに唇を閉ざして首を振った。

「……いや、だからといって、これは堕落しすぎだ。……皿を寄越したまえ、ひとりで食べられる」

結局、ユーシウスは自分で残りのパンケーキを平らげた。内心がっかりしたミアリだったが、幸せそうなユーシウスの顔を見ていると自然と笑顔になってしまう。

「……やはり、うまいな……」

蜂蜜が好物なのだろう。名残を惜しむようにフォークに絡みつく舌先を、ミアリはうっとりと見つめた。

いかにも幸福な微笑みを浮かべた彼女に、ユーシウスもちらりと視線を走らせる。

「……誰かと食事をするのも、ずいぶん久しぶりだ……」

「え？」

舌の動きばかり追っていたミアリが聞き返すと、ぶっきらぼうに命じる。

「……なんでもない。夜は部屋で食べるようにするから、よければつき合いたまえ」

「はい!!」

なんだかよく分からないが、またおいしい食事をユーシウスと共にできる約束を与えられ、ミアリは嬉しさいっぱいで微笑んだ。

第三章　試して、確かめて

ミアリが食事で精気を得ることができることが判明した日の翌朝、ユーシウスはいつものように執務室でカルガを出迎えた。

「おはようございます、補佐官閣下」

慇懃な挨拶から始まる恒例のやり取りは、なんとなく平素より短く感じられた。差し当たっての心配事がひとつ減ったせいかもしれない。

それにしても気分が明るいようにも思えるが、それは昨夜たくさん好物を食べたからであって、ミアリと一緒に食べたことは関係ない。断じて。

「では、参りましょうか」

適当な返事を繰り返している間に、いつの間にか恒例のやり取りは終わっていた。これもやはり、心に余裕があるせいか。

堕落とまではいかないにせよ、ミアリが言うようにたまには気分転換も必要なのだろう。

「珍しいですね、何かいいことでもありましたか？」

ニークレーンの執務室があるベルール騎士館本館の最上階へ向かうため、歩き出そうとした

瞬間カルガが振り返った。
「……な、なぜ、だ？」
「先程から何度か、私の話とは全く無関係のところでお笑いになるので」
「……いや、別に、その、すまない」
しどろもどろに謝ったユーシウスは、気分を落ち着かせるためにあたりを見回した。
赤煉瓦で外装を固めたベルール騎士館は、内部も瀟洒な造りだ。手入れの行き届いた白い制服に身を包んだ騎士たちが、誇らしげに大勢闊歩している。
だがひとたび別棟の方角から姿を現したユーシウスとカルガを見た途端、活気に満ちたざわめきは悪意と嘲笑に取って代わる。
「左遷もいいところだろう？　下男のような部屋に押し込められて、よく恥ずかしくないな」
「悪魔が悪魔を呼び集めているんだ。館長閣下もお人が悪い、とっとと異端審問にかければいいのに」
「なんなら俺が、父上に頼んで皇帝陛下に親書を……」
父親の権威を笠に着て発言しているのは、ベルール王家と遠戚関係にあるのが自慢の貴族の次男である。ルマリアが帝国としてまとまった現在、騎士の地位を得るのはこういった名家の次男以下が圧倒的に多い。
爵位も継げない、土地も財産もほとんどもらえない。そのため仕方なく騎士になるけれど、

人々を守ることにも悪魔を狩ることにも全く熱意を見せない。

熱心なのは騎士館内での足の引っ張り合い、嫌々派兵された先での乱暴狼藉、女漁り。商人を襲って身代金を奪うようなことさえ平気で行い、時には悪魔に魂を売り渡してまで自己の利益を追求する彼らが、ユーシウスと同じ騎士なのだ。

ベルール騎士館だけではない。ルマリア本国付きを含めた七つの騎士館に集う者たちはほぼ全て、似たような連中である。

しかし中でもベルール騎士館が最悪なのは、館長にさえ「騎士」の座に賭ける情熱が見られないことだ。今の地位は通過点に過ぎないと豪語し、暇さえあれば舞踏会だ狩りだと上流階級とのつき合いに明け暮れるような男の下で、職務への熱意を保つのは難しい。

わずかに高揚していた気分がたちまち萎れていく様を、ユーシウスは他人事のように感じていた。

探すまでもなかったな、という皮肉な思いに口の端が歪む。現在の騎士館内には、自分の気分を浮上させるものなど何ひとつありはしないのに。

――いや、ひとつだけある。

ユーシウス様、と嬉しそうに呼んでは、人にはありえぬ薄紫の髪を揺らしてはにかむ少女。

「先日、中庭の花を園丁に切らせたとお伺いしました。いかがされました、急に」

気がつくと、また意識が飛んでいた。無意識のうちに最上階へと続く階段を上っていたユー

シウスは、先導するカルガが突然発した問いに危うく足を止めそうになる。
「……お前こそなんだ？　急に。部屋があまりにも殺風景で、気分を変えたくなってな」
うまくごまかせているのだろうか。振り返りもしない従者の背からは感情が読み取れず、内心激しく動揺しているユーシウスに質問は続く。
「大量の菓子を、厨房から持っていったともお聞きしましたが？　あと、騎士服につぎを当てたいのなら、メイド服を一式持っていく必要がありますか？」
靴底が規則正しく階を叩く音に交じり、淡々と繰り出された問いに頭の中が真っ白になる。カルガが自分を快く思わないニークレーンの間諜であることは最初から承知しているが、こうも的確かつ迅速に行動を把握されているとは思わなかった。朝のやり取りがやけに短かったのも、油断を誘うためだったに違いない。
一応考えていたはずの言い訳がどこかに行ってしまった。狼狽している間に沈黙が積み重なっていく。
まずい。絶対に変だと思われている。
「――知らんのか？　私は甘い物が好きなのだ」
気づいたら、そう口走っていた。
「は？」
カルガが眼を丸くしてこちらを振り返る。へりくだりながら馬鹿にする、という器用な態度

を崩したことのない男は、あ然とした表情で年下の上官を見つめていた。

……最早言い繕える状態ではない。捨て鉢な気分になったユーシウスは、開き直って趣味を語る。

「ちょうどいいからお前にも教えておいてやろう。私は蜂蜜と砂糖とバターをたっぷり使った、甘ったるいパンケーキが好物だ。チョコレートも大好きだ。以前から何度か、疲れが溜まると厨房にかけ合って菓子を融通してもらっている」

「……は、はあ、左様で」

珍しく饒舌なユーシウスに気圧されたか、カルガはそれだけ言って前を向いてしまった。衝撃でメイド服のことは忘れてしまったのか、心なしか速い足取りで、また階段を上り始める。

虚しい勝利に浸りながらその背を追いかけ、やがて最上階に辿り着いた。その瞬間、聞き慣れた闇を帯びた声でカルガが話しかけてきた。

「久しぶりに、補佐官閣下の楽しそうなおしゃべりを聞きましたよ。聞くところによると、先代館長閣下の前では、あなたも大層愛想が良かったようですね」

ベルール騎士館先代館長、スティード・リューディス。

年若く、悪魔の血を引くとの噂が絶えないユーシウスの真面目さと聖騎士としての能力を認め、周囲の反対を押し切って補佐官に引き上げてくれた男だ。

スティード自身が一兵卒からの叩き上げである。また、平民階級出身の自分が館長を拝命し

たのは優れた騎士であることよりも、帝国内の政治力調整の結果だと彼自身が一番よく知っていた。

てっきりファルバート家の三男がなるものだと思っていたのに、うまくやったものだ。

なんとか兄上たちに追いつこうと、地位を得るため躍起になっていたあの方から館長の座をかすめるとは、意外に面の皮が厚かったのだな。

そんな陰口を叩かれていたスティードだったからこそ、つきまとう噂に苦しむユーシウスへの共感があったのだろう。

『運良く分不相応な地位をいただいたはいいが、名家のぼっちゃんとのつき合い方はよく分からんからなあ。お前ぐらいが補佐官でいてくれたほうがありがたいんだよ』

だまされているのでは、と不審感丸出しで自分を指名した理由を聞いた時、あっけらかんと語ってくれたことをよく覚えている。

酒癖が悪いのが玉に瑕だったが、明るく豪快な気のいい男であり、ユーシウスにとっては第二の父親のような存在だった。他人の眼を恐れ、家族やごく少数の使用人以外とは顔を合わせない暮らしを送る実父以上に、スティードの影響力は大きかった。

そんな彼が、遠征先にて悪魔に殺されてからはや三年。

ベルール館長は、かねてからその座を熱望していたニークレーン・フォン・ファルバートに代わった。

「リューディス閣下は、私から見ても比較的よい方でしたよ。あのような方をあのように無惨に殺害するとは、悪魔とは残忍なものですね」

混戦の中で行方不明になったスティードの亡骸の五体が、ばらばらに引き裂かれていたことは公にはされていない。しかしユーシウスの努力も虚しく、スティードの死は面白おかしく誇張されて帝国全土を駆け巡った。

やはりあのような身分卑しき男に、栄えあるベルール騎士館長の座は相応しくなかったのだ。熱弁を振るうニークレーンが浮かべた勝者の笑みは、一生忘れられないだろう。

誰も言わない。誰も言えない。

けれど、ユーシウスを含めた多くの人々は直感している。邪魔だったスティードを悪魔の仕業に見せかけて殺したのは、ニークレーンに違いないと。

ユーシウスを補佐官の地位に留め置いたのは、悪い噂を回避するためだと。実質的な権限を取り上げ、使い走りのように酷使することで、自主的に辞任するのを待っているのだ、と。

「……人の皮を被った悪魔もいる」

これは罠だ、余計なことを言ってはいけない。そんな理性の忠告を振り切り、口から飛び出した言葉をカルガが投げ返してくる。

「それは、館長閣下のことですか。それとも、あなた自身のことですか？」

挑むような物言いに、ユーシウスはしばし逡巡してからこう尋ねた。

「……お前は、堕落した騎士を憎んでいるのではないのか。そんなお前がなぜ……」

勇気の要る質問だった。そんなお前がなぜ、あのニークレーンに仕えているのかと言外に問うたも同然だからだ。

不敬罪で告発されることも覚悟の上だったが、案の定カルガは鼻先で笑って言い返してきた。ただし、ユーシウスの予想とは少し違う方向から。

「言葉を知らない方だ。堕落した騎士、などという言葉はおかしいのです。なぜなら全ての騎士は堕落しているのですから」

冷たい断定を他の誰かが口にしたなら、ユーシウスも「騎士」にこだわりのある身だ。論戦を開始したに違いなかったが、相手がカルガだと思うと、どうしても気後れが先に立つ。

「……そんなことは」

鈍い反論こそを馬鹿にするような眼をしたカルガは、衛兵に守られた大扉を視線で示した。

「さあ、おしゃべりはここまでにしましょう。我らがファルバード館長がお待ちかねです」

腹が立つような助かったような、複雑な気分でユーシウスはカルガから視線を逸らした。第一おしゃべりにこれ以上時間を費やせば、今度はニークレーンに嫌味の材料を与えることになってしまう。

「ベルール騎士館長補佐官ユーシウス・アシュリー、ただ今参上いたしました」

無表情な衛兵たちが開いた扉の内部へと、気を引き締めて一歩踏み出す。

「メイド服の件と、祓魔師どもと急に連絡を取り始めたことについては、後日ゆるりと」
斜め後ろに控えたカルガのつぶやきは、ユーシウスの耳には入らなかった。

昼食の時間はとうに過ぎているのだが、ユーシウスはまだ戻ってこない。
「……おなか空いた……」
空きっ腹を抱えたミアリは、壁を構築する煉瓦の数を数えるのをやめてため息をつく。
ひとたび食事をすることを肉体が覚えてしまったせいで、空腹まで分かるようになってしまったのだ。全ての面倒を一足飛びに解決することは、なかなか難しい。
「おなかが空いたわ、ユーシウス様とお食事がしたい、ユーシウス様をお食事したい……」
欲望のままにそんな独り言を言っていたら、静かに扉が開いてユーシウスが戻ってきた。手にまた木箱を抱えている。
「あっ、きゃあ、ごめんなさい！」
邪念を読み取ったかのような間合いの良さに、ミアリは反射的に謝ってしまった。だがユーシウスの表情の険しさは、彼女に向けられたものではない。
「まずい」
「え？」

「やはり、昨日の菓子はちょっと量を多く持って来すぎた。メイド服の件は、私が着るとでも言えばよかったか……？　とにかく、カルガが疑いを抱いているようだ」

よほどあせっているのか、真剣な顔でそんなことを言いながら、ユーシウスは木箱を開いて中身を取り出した。数十枚の書類、古びた十字架や銀のナイフといったものにくわえ、男物の服が入っている。

「……ずいぶん大きいですね……それも、遺留品ですか？」

この部屋を満たす書類は報告書、聖具は悪魔退治の際に使われたもの、それ以外は被害者の遺留品がほとんどであると聞かされている。服の一部はたくさん見たが、服一式、というのは他にはなかった。

「いや、これは君が着るんだ」

「え？　あ、はい、分かりました」

驚きながらも、愛するユーシウスの望みとあればと、ミアリは自主的に部屋の隅に行って着替え始めた。

「……あの、着ましたけど……」

着てはみたものの、シャツはまるでコートのようだし、ズボンは縦横どちらも布が余って仕方がない。困惑しながらもユーシウスを呼ぶと、彼も出来上がりを眺めて不満そうな顔をした。

「申し訳ないです、もっと高位の夢魔であれば、たとえどのような服でも着こなせるかと思うのですが……」

悄然とするミアリの、主に胸元を見てユーシウスはしかめ面をしている。

「……この大きさの服でも、胸が、その、そういうことになってしまうのか……」

コートと化したシャツを着ていても、見事に張り出した胸はごまかしきれていない。なんだか恥ずかしくなったミアリが胸元を手で押さえると、ユーシウスもはっとしたように咳払いを始めた。

「いや、違う、誤解しないでくれ！　私はただ、君をよそに移そうと思っただけだ!!」

「え？」

思わぬ言葉に、ミアリはぎくりと固まる。

――よそとは、ショウカン、とやらにだろうか。

「心配するな、いや、少しは心配してもらったほうがいいが、ここでカルガたちに見つかるよりはましなはずだ。祓魔師たちにあまり借りを作るのは避けたいが、この際仕方がないだろう」

ミアリの不安になど気づいた風なく、ユーシウスは手短に状況を説明してくれた。

カルガは、上官の様子がおかしいことに気づいている。

腐っても館長補佐という地位にあるユーシウスである。たとえ従者であっても、元は倉庫で

しかない部屋であっても、補佐官の私室として割り当てられた部屋に勝手に侵入することなどない。仮にそんな真似をすれば、それを理由にユーシウスが相手を厳罰に処することができる。

しかし、いざ踏み込んできた先でミアリが見つけられてしまえば話は別だ。ニークレーンに報告することもなく、夢魔の女をここに匿っていることがばれたら、ただではすまない。

だから、ひそかに繋ぎを取っている祓魔師たちにミアリを預けてしまおうというのだ。まだ明確に色良い返事はないが、ユーシウス曰く知的好奇心の塊のような連中なので、本人を連れて行けば断ったりはしないだろうということだった。

「念のため、向こうに行った後もきちんと変装をしていてほしいのだが、しかしこれではな……移動中にばれてしまう。君も夢魔なら、変身などはできないのか？」

シャツの布地をかき集めて腹に入れる、などの知恵を絞っていたミアリは、ユーシウスの問いに切なく眉根を寄せる。

「……申し訳ありません、私は本当に能力のない夢魔で……中途半端に肉体があるので、変身は難しいのです……」

またここで、肉体の問題が顕在化した。幽星体（アストラル）なら形を変えることも比較的容易なはずなのだが、どれだけがんばってみても胸も尻も引っ込まない。

だがひとつだけ、変化した部位があった。

「あ、髪だけなら、なんとかなりました！」

いつも背中に感じていた重みがなくなったことを察知したミアリは、試しに手で自分の頭を触ってみた。

腰に至るほどに長かった髪はユーシウスよりさらに短く、まるで少年のような長さになっている。髪の色も黒く変じ、そこだけ見れば人間の男のように見えなくもない。

「……ううむ、確かにそのような短い髪の女性は修道女でもあまりいないだろうが、やはりその胸、いや、その体つきは……顔立ちも……」

ルマリア帝国の文化圏の中では、女性は普通髪を長く伸ばしている。聖職者や罪人でなければ今のミアリのような髪型になることはないが、残念ながら少年には見えない。

真剣に考え込んでいるユーシウスを前に、ミアリも努力せねばと自分にできることを探した。

「ああ、でも、幻術（イリュージョン）なら使えます！」

「なるほど、見る側を惑わせることができればいいのか」

出会った時に使っていた眼くらましの術も幻術（イリュージョン）の一種だ。ミアリの提案に最初はユーシウスも乗ってきたが、

「……ちょっと待ちたまえ。私たち聖騎士は、普段から悪魔の術が効かないように訓練をしているぞ。どこまでごまかせるか……」

出会った当初のごとく、下手に術を使ったことで正体がばれる可能性もあるのだ。当時の恥ずかしさを思い出してひっそり落ち込むミアリに、ユーシウスがこう命じる。

「とりあえず、やってみたまえ。私に効く術なら、他の者の眼もごまかせるだろう」
「は、はい、分かりました。ええと、男の人、男の人……」
淡い魔力の紗幕がミアリを取り巻き、やがてそこに、彼女のよく知る男の幻が映し出された。
一拍の間を置き、ユーシウスが乾いた声で問いただす。
「……ミアリ。その、ひらひらした、着ているのか着ていないのかよく分からん格好をした男は誰だ？」
「アドルニ様です」
「……そうだな。そいつが、君にとって最も身近な男だものな……」
何気ない調子で漏らしたユーシウスは、途中で不意に眉をひそめた。
「ユーシウス様？　あの、申し訳ありません、羽は出さないようにしたのですけど……」
だめですよね、とアドルニの姿で肩を落とすミアリから、ユーシウスは眼を逸らして言った。
「アドルニの格好は、なんというか、あまり我らが騎士館の風紀に相応しくないようなのだが……第一そいつも夢魔ではないか」
それもそうだ。反省したミアリは、早速別の男の姿を幻の紗幕に映し出した。
「私が二人いたらおかしいだろうが!!　そして私は、そのように胸元をはだけてはいない!!」
「も、申し訳ありません、あまり他の人の情報がなくて!!」
知り合い自体少ないミアリは、願望交じりのユーシウスの姿でおろおろと謝る。本物のユー

シウスは、深々とため息をついている。
「しかし、私は二番目か……」
「何かおっしゃいましたか？」
「気のせいだ、そして早くその姿をどうにかしたまえッ!!」
「は、はいっ!!」
涙眼になりかけていたミアリは、せき立てられるままに慌てて術を解いた。
「これはやはり、最初に着ていたような外套でも着てもらうべきか……」
最終的に、一連の流れが無駄になる結果に落ち着いてしまいそうだ。疲労した様子のユーシウスに、ミアリはぶかぶかの袖を激しく振りながら頭を下げる。
「あ、あああ、ごめんなさい、申し訳ないです、よそに匿うなんて、とんだご迷惑を……!!」
「いや、気にしないでくれ」
苦笑いしたユーシウスの、優しいまなざしが呼吸を危うくする。
そして続く言葉に、別の意味で息が詰まった。
「もうだいぶ、おかしな薬も抜けてきたのだろう？　あまりべたべたしてくることもなくなって、君本来の、慎み深く……は怪しいが、夢魔らしからぬ控えめな性格に戻ってきているようではないか」
労るような微笑みが遠い。

「夢魔だからと決めつけて、差別的に扱って悪かった。人間になった君は、きっとすばらしい淑女になるだろう」

まるで別れの言葉のようだわ、と一瞬考え、思い違いに気づく。

まるでどころではなく、これは本当に別れの言葉なのだ。

祓魔師たちにミアリを預けたが最後、ユーシウスが会いに来てくれることはないだろう。魔を滅することしかできない聖騎士である彼に、半魔を人間にする手助けはできないのだから。

「そ、そうですね、私が人間になる方法が分かったら、ぜひいらしてくださいね……？　私、ユーシウス様の、お役に……」

せめての望みを託してそう言うと、ユーシウスは困ったように笑った。

「そのことはもう、忘れてくれて構わない。……私については、本当はもうとっくに結論が出ているのだ。誰にもどうしようもない、と」

根がやっかみがもとの噂であり、それに基づいて調査をしても悪魔の血を引く証拠など見つからなかった。だが、そのことをいくら言い立てても、噂は消えなかった。

「異端審問にかけてもらうことまで考えたが、私ごときのために無為な手間を取らせてしまっては申し訳ない。第一、そこまでしても扱いが変わる保証はどこにもない」

いくら証拠がないと叫んでも、誰も耳を貸してくれない。その理由は分かっている、とユーシウスは自嘲的に笑った。

「――単に、私と私の一族が嫌われているだけのことだ。先祖伝来の汚名を雪ごうと、理想の『騎士』にこだわる青二才は、戦時ならとにかく平和なこのルマリアには不要であると散々言われてきた」

「そんな……」

否定しようとしたミアリに、ユーシウスはかぶりを振ってみせる。

「……分かっているんだ、自分でも。実在しない理想の『騎士』にしがみつくことで、安い自尊心を守っているだけだと……いっそ私もこれを機に、父のように田舎に引っ込むべきなのかもしれん」

「そんな、こと……」

慰めの言葉は、中途半端に宙に溶ける。ミアリ自身、人間界の知識が少なく、まして平時における騎士たちの堕落ぶりにそこまで詳しい訳でもなかったので、それ以上気の利いた言葉が出せなかった。

「気にするな、君は自分の未来のことだけ考えていたまえ。さて、君の外套は……」

初日に茶を零して以来、しまったきりのミアリの服を取り出そうとユーシウスがクローゼットを振り返った。すっかり見慣れてしまった背中を、ミアリは絶望の思いで見つめていた。

媚薬が抜けてきたことを、ユーシウスは悟り始めている。

――言い訳がなくなってしまう。

おかしな薬の効力のため、本人にもどうしようもないこと。そう考えているから、ユーシウスは本来敵であるミアリがべたべたつきまとっても多少は優しくしてくれるのだ。

そして、自分自身への言い訳も。

気づけばユーシウスを眼で追ってしまう理由も、今こんなに胸が苦しい理由も、媚薬抜きでは説明できない。

「いいえ！」

不意の大声に、ユーシウスが驚いてこちらを振り向く。油断したその腕の中に、ミアリは思いきり突撃した。

ニークレーンのところから帰ってきたばかりだ。まだユーシウスが身にまとう制服が肌を焼くが、構いはしない。

「最初の媚薬は、抜け、抜けたかもしれませんけどっ、わ、私は、ユーシウス様の、魅了（チャーム）に、まだ、かかっていますしっ！　隙（すき）あらば、精気を得ようと、狙（ねら）っていますッ!!」

「なに!?」

思わぬ力と告白に、ユーシウスも慌てているようだ。その胸に取りすがり、ミアリは必死に訴え続けた。

「好きです、好きですユーシウス様っ!!　大好きっ!!　人に見つかったら私を殺してください、だからそれまではお側（そば）においてください……!!」

「ぱっ、や、やめたまえ、こら、やめないか、せめて、せめて私が制服を脱ぐまで、待ちたまえ……!!」

混乱したユーシウスは、ミアリを引き剝がそうとしたり自分が制服を脱ごうとしたりと方向性が定まらない。そのためどちらも成果が上がらない。

「やめたまえ、本当に消滅するぞ!?」

「は、離れ離れになるなら、いっそこのまま、消えたって……!!」

もみ合いを続ける二人の耳に、高らかな哄笑が聞こえてきた。

「――はは、これはこれは!!」

ぎょっとして同じ方向を向いたミアリとユーシウスの眼に映るのは、長身痩軀の陰気な男。抑えきれない笑みに口元を歪めた、カルガだった。

「なんということだ、我らが補佐官閣下が男色家だったとは!!」

抱き合ったまま凍りついた二人を眺め、カルガはこの上なく楽しそうに笑っている。

「男……、ば、馬鹿者、誤解だ!!」

とりあえずミアリを離しながら、ユーシウスが顔色を変えて怒鳴った。だがカルガは軽く彼をいなす。

「は、誤解ですか。ならばこれはどういう状況で？」
「……それは……」
ミアリは女性だ。そして夢魔だ。
そんなことが言えるはずもない。
「花だの菓子だのメイド服だのと、お堅いあなたが妙なことをなさる、とは思っていましたが――いや、愉快愉快、実に愉快な話だ!!」
よほど嬉しかったのか、普段は勘が鋭いこの男が短髪のミアリを少年と断定したばかりか、漂う焦げ臭さにも気づかない様子だ。
「ま、待って！」
このままではまずい。決意したミアリは、だぶだぶのシャツの前を勢いよく開いた。
「待ってください、違います、私は女です!!」
「!?　なっ!?」
これにはカルガも度肝を抜かれた様子だが、それ以上に反応したのはユーシウスである。
「ミアリ!?　ば、ばばば、馬鹿者ッ――!!」
飛びつくような勢いで近づいてきたユーシウスが、必死になってミアリの服の前をかき合わせる。だが胸元を見ないように、肌に触れないようにと苦心しているせいで、なかなかうまくいかない。

「いたた、ごめんなさいユーシウス様、痛いです……！」
「く、くそっ、なんだって君の胸はこうも大きいのだ……!!」
ミアリたちがもたもたやっている間に、カルガは一足早く立ち直った。
「……な、なんだ、女なら女で問題だ、女人禁制の騎士館に女性を引っ張り込むなど……」
若干衝撃は残っているものの、ミアリが男だろうが女だろうが、彼の目的は果たされている。
「まあ、そんな建前など、守っている者のほうが少ないですがね。いずれにしろ、事はすぐに公となるでしょう。楽しみにしていなさい、補佐官閣下……!!」
「待てカルガ!!」
会心の笑みを浮かべて立ち去ろうとするカルガの手を、ユーシウスが摑む。しかしカルガは冷たくその手を振り払った。
「この期に及んで命令ですか」
冷ややかにユーシウスを睨んだカルガの口調が粗野な、おそらくは彼本来のものに変わった。
「同族狩りで名を挙げた程度でいい気になるなよ、悪魔め。頭のおかしい女と楽しんだ手で、俺に触るな。穢らわしい」
黒い瞳の奥に凝る、憎しみの炎。カルガについてよく知らないミアリでさえ凍てつかせるそれを見て、ユーシウスが動きを止める。
だが彼は鼻を鳴らして去っていこうとするカルガの上着の裾を、強く摑んで引き留めた。危

うく転びそうになり、不機嫌も露に振り向いたカルガにもう一度繰り返す。
「待て。……頼む、待ってくれ」
「……あなたが私に頼み事とは珍しい」
まだ、憎しみの火はカルガの眼の中で燃え盛っている。
しかしその表情には、残酷な余裕が漂い始めていた。探っても探っても隙を見せなかった年下の上官が、どれだけ無様な姿をさらすのかを楽しむつもりなのだ。
「よろしいでしょう、好きなだけ言い訳をさえずられよ」
勝ち誇るカルガが入ってきた扉を閉めたユーシウスは、重い息を吐きながら打ち明けた。
「――実はミアリは、女性で……、夢魔、なんだ」
「……は？」
不意打ちに、カルガは一瞬素直に眼を丸くした。

髪の色と長さを元に戻したミアリを改めて見やり、カルガは深々と息をつく。
「経緯は、拝聴しました」
長々と続いたユーシウスの説明が終わるや否や、彼は簡潔に話をまとめた。
「つまり、そこの夢魔は間抜けにも己が仕込んだ媚薬を飲まされて、あなたの下僕になってい

ると。そういう訳ですか」
「……そうです……」
だぼだぼのシャツ姿のまま、ミアリはしょんぼりと頭を垂れる。
「そして、補佐官閣下も補佐官閣下で、半魔であるこの女を祓魔師の手を借り、人間にしようとしていると。そういう訳ですね」
「……そうだ」
ユーシウスも、改めて説明したことで恥ずかしくなってきたようだ。鼻先を赤く染め、精一杯いかめしい顔を作ってうなずいた。
「あなた方は、揃いも揃って大馬鹿ですな」
容赦のない断定に、ミアリは首を竦め、ユーシウスも反論の言葉が見つからない様子で黙り込んだ。
「特に補佐官閣下。あなたはやはり、媚薬を飲まされたのでは？」
まさかの指摘にミアリは眼をぱちくりさせ、ユーシウスは血相を変えて否定した。
「なっ、違う、飲んでいないぞ!!」
「では、途中から魅了にかかったのでしょう。そうとしか思えませんね。半魔を人間にするなど、聞いたことがない」
口の端で笑うカルガは、要するに二人を小馬鹿にしているだけなのだ。ミアリを人間にする

など、できる訳がないと明らかに思っている。
いっそ清々しいほどの軽蔑に、ミアリはいつもの癖で頭巾の陰に隠れようとしてしまった。生憎とシャツに頭巾はついていないので、襟を立てて気持ちだけ防御してみる。
「そ、そうですよね、私が人間に、なんて……」
ミアリだって、自分が人間になるなどという話を頭から信じている訳ではない。そもそも、そんなことを考えたことがなかった。
だが、ユーシウスがそうしたいと言うから。彼が自分が人間になることを望むなら、叶えてあげたいとは思う。
……しかし、人間になったミアリは、その後どうなるのだろう？
「……違う、魅了されてなど……私は、ただ……」
立てた襟に顔を埋めて考え込むミアリとは別方向に、ユーシウスも考え込んでいる。
「……私は、ミアリを救うことで……、己を、救いたい、だけだ」
「……ほう？」
意外そうに、カルガが眉を上げた。ユーシウスも自分の言葉にはっとした様子を見せたが、続きを促すような従者の視線を受けて、そのままぽつぽつと言葉を繋ぐ。
「異種の血が混じっているとして、私の一族は長く白眼視され続けてきた。似たような境遇の、しかも女性が、自分が何をしているかの自覚もないまま男に……その、そんなことは……放っ

ておけない」

「夢魔が男を誘惑することに、憐れみを感じていると？　相変わらず無自覚に傲慢な方だ」

間髪を容れず、カルガが皮肉を発した。唇を噛んで黙るユーシウスから、冷めた視線は襟に埋もれたミアリへと向かう。

「その女は夢に現れ男を襲う、そうしなければ消滅してしまう存在なのです。あなたは夢魔から生きる術を奪うおつもりか」

「違う、だから人間にするのだ！」

むきになったように叫んだユーシウスを、カルガは冷ややかに見つめ返す。綺麗事もいいかげんにしろ、と言わんばかりの瞳に一瞬怯んだユーシウスだが、懸命に反論を続けた。

「食べ物から栄養を摂取できるのだ、可能性は決して低くないはず。……私の正義を押しつけている自覚はあるが、それでも、私は……、私は」

それ以上は、言葉にならなかった。拳を握り、自らの無力を責めるようにきつく唇を引き結ぶと、深くカルガに頭を下げる。

「頼めた義理ではないことは分かっている。お前の立場まで悪くすることも承知の上だ。しかし、私は……ミアリを、殺したくないのだ。彼女のことは、誰にも言わないでくれないか」

弱々しい懇願を聞いて、ミアリは思わず両手を握り合わせた。

半分人間でも、私はやっぱり悪魔なんだわ。改めてそう自覚する。

何重にも魅了にかかり、ユーシウスのためならなんでもできるような状態のはずなのに、苦しそうな彼を見て感じるのは――喜び。

ミアリのためを想い、不仲の従者に懸命に頼んでくれるユーシウスを見て喜ぶ。なんと罪深い存在だろう。

「あなたが私に頼み事をするのは、初めてですね。しかもそのように、頭を下げて」

罪悪感と背中合わせの喜びに震えるミアリを尻目に、カルガが小さく言った。

「あなたのように、私を解雇しようとも、賄賂で懐柔しようとも、怒りに任せて打ち据えようともせず、ただじっと側に置いてくださった騎士も、初めてです」

ユーシウスが初めて仕える相手という訳ではないらしい。かつての上官たちを思い出したか、冷たく瞳を細めたカルガに、ユーシウスは表情を改めた。

「表明の仕方には、いささか問題があるが……私は、お前が騎士を嫌うのは仕方がないと思っている」

「騎士」という単語に、カルガがかすかに眉を寄せる。憎しみが踊り始めた瞳を、ユーシウスはしっかりと見て続けた。

「だが同時に、私は理想の騎士たらんと日々精進している身だ。……お前のことも、ミアリのことも含め、助けを求める全ての人々のために私は在る」

「……だから、半分とはいえ悪魔であるこの女を、殺さずにいた訳ですか。館長補佐という地

位にあるあなたが？」

素っ気なく言い返され、ユーシウスは返答に詰まった。

「……それは」

「騎士は武器を持たぬ者を殺さない。騎士は女性と子供を殺さない、ですか」

ぽつりと、カルガがつぶやく。ミアリにも聞き覚えのあるそれは、初めて出会ったあの日、ユーシウスが苦しそうに吐き出したのと同じ言葉だった。

「――いいでしょう」

しばらくの沈黙を置いてから、カルガはゆっくりとうなずいた。

「馬鹿げた夢物語ではありますが……このカルガ・ナズルも、夢物語の実現にご協力いたしましょう」

そう言うなり頭を垂れた従者を見つめ、ユーシウスが思わず、といった調子で確かめた。

「……本当に？」

「嘘のほうがよろしければ」

「い、いや、違う、悪かった、疑った訳じゃない!!」

急いで言い直したユーシウスは、再び金色の頭を下げた。

「カルガ……、すまない」

万感の想いが込められた声に触発され、ミアリも彼に倣う。

「カルガ様、あの、あ、ありがとうございます……」
揃って頭を下げる二人に対し、カルガの反応は素っ気ない。
「礼を言うのはまだ早いですよ。私を巻き込んだ以上、ミアリと言いましたか、彼女の存在は絶対に秘密にしていただかなければなりません」
「分かっている。だから、ミアリを他の場所へ」
ユーシウスの考えを、カルガはあっさり否定した。
「いえ、それはやめたほうがいい。私でさえ気づいたぐらいですから、これ以上の下手な動きは当分お控えください」
「しかし……、お前はすでに、館長閣下に私の動きを報告しているのではないのか？」
ニークレーンはカルガが決定的な証拠を押さえ、戻ってくるのを待っているのではないかとユーシウスは危ぶんでいる。
「見つからなかった、もしくは逃がした、と報告したところで、ここを調べられたら終わりだ。それよりは、祓魔師たちに預けたほうがいいのではないか」
「あなたもご存じのとおり、私は館長閣下の忠実な僕という訳ではありませんのでね。私の目的はあくまで、あなたの化けの皮を剝がすこと」
直截な物言いに、ユーシウスは眉根を寄せた。だが結局反論することはなく、カルガもそのまま話し続ける。

「もっともその点においては、館長閣下と目的は一致しているのですが……とにかく、今回の件については、まだあの方には何もお伝えしておりません」

心配は要らない、と告げてから、カルガは薄笑いを浮かべた。

「とはいえ、あなたはご自分が思っていらっしゃる以上に目立つ存在だ。妙な行動をしていることは、噂になり始めてはいます」

「！　なら、やはり」

「ですから館長閣下にはひとまず、補佐官閣下は長い雑務に倦んで、お好きな菓子をやけ食いしているようだとお伝えしておきましょう。これでしばらくごまかせます」

「……よろしく頼む」

苦虫を噛み潰したような顔でユーシウスがうなずく。ミアリはやり込められる彼の可愛さにうっとりしているが、カルガは素知らぬ顔で話を進めた。

「さて、となれば話は早い。例の祓魔師の使いが、あなたを捜してうろうろしているようですよ。補佐官閣下は急な用事が入ったので、少し時間を潰してからまた来てほしい、と伝えてしまいましたが、今ならまだ間に合うでしょう。当分そちらに行くことはない、と話していらっしゃい」

「なんだと!?」

これ以上驚かされるとは思っていなかったらしく、ユーシウスが声を上ずらせる。

「話がどう転ぶにせよ、奴らにここに来てもらっては困りましたのでね。ですのでどうぞ、補佐官閣下」

早く行け、と言わんばかりの態度に、ユーシウスは警戒を露にする。

「……お前は？」

「館長閣下は、あなたのことを全く疑っていない訳ではないのですよ？　誰かが踏み込んできた時に備え、彼女をひとりにはしておけないでしょう」

淀みなく語られる理由を聞いて逆に不安になったらしく、ユーシウスは食い下がる。

「……なら、お前が使いの者に」

「そんなに私が信用できませんか？　では今すぐ館長閣下のところに参りましょうか？　本日は兄君主催の舞踏会に参加されるとかで、昼間は自室で眠っていらっしゃるはずですよ」

少しだけ背の低い上官を見下ろし、カルガは平然と言い切った。緊迫した空気が流れる。

二人のやり取りを声もなく見守っていたミアリは、かけるべき言葉を探しておろおろと視線をさまよわせた。が、自分の存在が争点になっているだけに、うかつに口を開けない。

どうしよう、どうしようと思いながら、無意識に身を竦ませる。

その刺激がいけなかったのか、唐突にミアリの腹が鳴った。

「きゃあっ!!」

途端に二人の青年の視線が集まったことを感じ、ミアリは真っ赤になって腹を押さえる。

「ごごご、ごめんなさい、嫌だ、私ったら、まるで暴食公の眷属……！」

「腹はいいから胸を隠したまえッ!!」

恥ずかしさの余り、だぶつくシャツで腹を包み隠そうとしているミアリの胸元は今にも弾けそうだ。ユーシウスはその前に立ち、カルガの視線からミアリを守ろうと必死になっている。

さすがのカルガも呆気に取られた様子を見せたが、彼はすぐに立ち直った。

「……えー、ミアリも腹が減っているようではないですか。あなたも昼食も摂っていないでしょうし、何か持って来てはいかがですか」

「……分かった……」

いいように鼻面を引き回されていることを察しているのだろう。恨めしそうなユーシウスだが、今はカルガに従う他ない。渋々外に出て行こうとしたが、

「いいかカルガ。分かっていると思うが絶対に絶対に絶対に、ミアリにおかしな真似をするなよ。……彼女は夢魔とはいえ、その、あまり男のことなど知らない、純粋な女性なのだ。くれぐれも不埒な眼で見ないように」

隣室へと出て行くその一瞬、そう釘を刺すのを忘れなかった。

ユーシウスの足音が遠ざかっていくと、あたりからは音がなくなった。

騎士館内部とはいえ、この付近は本来使用人が使っている区域なのだ。階級意識の高い騎士たちは近づいて来ないし、昼間は使用人たちも出払っているので、ユーシウスがいなければミアリが何かを数える声以外はほとんど聞こえない。

「……ええと……」

無音の室内にカルガと二人きり、という気まずさに、ミアリはさかんに襟を引っ張ってしまう。と、見上げたカルガの唇が、不意に震えた。

「――ははははは!!」

静まり返った空間に、突如として爆笑が響く。

「カ、カルガ、様……？」

「なんということだ！　ああ、本当になんということだろうな!!　愉快愉快、こんなに笑ったのは久しぶりだ……!!」

長身を折り曲げるようにして、カルガは積み重ねられた木箱やタペストリーに覆われた壁を叩きながら笑っている。

「あのユーシウス・アシュリーが！　この俺に頭を下げて頼み事を!!　はは、ははははは、あっははははは……!!」

目尻に薄く涙さえにじませ、笑い続ける姿をミアリは呆然と眺めた。と、ひとしきり笑い転げたカルガは、不敵な表情に戻ってじっとミアリを眺めやる。

その瞳には、ユーシウスが心配していたような欲望は感じられない。

しかし、だからと言って、好意的にも見えないのはなぜだろう。

「……カルガ様？　あの、あなたは、私のことを」

黙っていてくれるんですよね、と言いかけた瞬間、カルガはにやにやしながら褒めてくれた。

「よくやってくれたな、ミアリ」

その褒め方は、先日いきなり現れていきなり去っていったアドルニと同じだ。ミアリの心中になど全く頓着していない、自分本位な賞賛。

「なんとかという下級夢魔、眼のつけどころはさすがと褒めてやろう。氷の悪魔騎士、我らが麗しの補佐官閣下から、悪魔への同情を引き出すとは！　挙げ句、それを足がかりに魅了を成功させるとは!!」

奇しくもカルガは、アドルニのことまで褒めてくれた。けれどアドルニへの評価はとにかく、自分へのそれには戸惑いを隠せない。

「そんな、私、魅了だなんて」

「自覚がないのか？　無能だか有能なんだかな……男が命がけで女を庇う理由に、恋以外のものがあるか」

鼻を鳴らしてそう返され、ますますうろたえてしまう。

「そ、そんな」

うろたえつつも、不意にもたらされた答えを、その魅力を、否定できない。だがユーシウスは媚薬を飲んでいないし、ミアリも魅了の術など使った覚えはない。

もちろん夢魔は人の欲望を煽り、虜にする存在だ。表現として恋をさせる、恋に堕とすという言い方はすることもあるが、肉欲が先行するその状態は人間や天使が説くような「恋」とは違うらしい。

――大体「恋」とは、なんなのだろう。

半分だけとはいえ夢魔であるミアリにとって、恋は相手にさせるもの。どういう状態なら「恋」になるのか、よく分からない。

「あの補佐官閣下、色恋については赤ん坊以下だからな。自覚していない可能性もあるが……夢魔を捕まえて何が純粋だ、くだらない」

悶々と悩んでいるミアリをよそに、カルガがまた鼻を鳴らす。突き放すような物言いが、思いがけない強さで胸に刺さった。

そうだ、ミアリは夢魔なのだ。ユーシウスとは全く違う価値観を持ち、そのために何度も叱られてきた。

「騎士」とまではいかないが、ユーシウスは「淑女」にもこだわりがある様子。だが夢魔の女性が「淑女」とは対極の存在であることぐらいは、ミアリにも知識がある。

「……そう……私になんか、ユーシウス様が恋をするはず……」

暗い顔をしているミアリとは対照的に、カルガは意気揚々と告げた。
「いずれにせよ、でかした。今後とも協力を頼むぞ」
「……協力？」
カルガが自分とユーシウスに協力してくれるのは分かるが、自分が彼に協力するとはどういうことだろう。首を傾げるミアリに、カルガは冷たく笑んだ。
「とぼけるな。もちろん我らが補佐官閣下を、お前の力で堕落させるんだよ」
「えっ!?」
仰天するミアリの顔を、カルガが上から押さえつけるように覗き込んでくる。
「まさかお前、俺がお前を人間にするなんて世迷い言を信じたと本気で思っているのか？」
ユーシウスに対する時のへりくだった態度はどこへやら、ごろつきのような所作にミアリは身を縮めた。アドルニとはまた違う、陰湿な暴力の臭いが心と体を萎縮させる。
「な、なんの、ために……？」
「決まってる。あの取り澄ました補佐官閣下の化けの皮を、俺の手で剝がしてやりたいからだ」
時間稼ぎのような問いに、カルガは先ほどと同じような答えを呆気なく返してくれた。
「あの方に聞いていないのか？　俺は騎士が大嫌いなんだ。特に何かと綺麗事ばかり口にする、現実から眼を逸らしている奴らには反吐が出る！」

実際に唾でも吐きそうな口調でまくし立てる彼は、最早ミアリなど眼中にない様子だ。
「騎士なんてものはどいつもこいつも同じだ！　悪行を誇るような奴らよりも、下手に表面を取り繕っている奴のほうが始末が悪い。俺はその手の偽善者どもの悪事を、白日の下にさらすために生きているんだ!!」
吐き捨てるカルガの眼の奥で、また憎しみの火が燃え始めている。ともすれば彼自身をも焼き尽くすような激しい炎を直視できず、ミアリは苦しげに視線を逸らした。
ユーシウスの警戒は正しかった。
カルガが表向きいい返事をしてみせたのは、上官の意思を尊重したからではない。
ニークレーンの手を借りず、より最悪な形でユーシウスの自尊心を踏みにじるためだ。
「……無理、です」
か細い声と勇気を、ミアリはうつむきながら振り絞った。
「私は、ユーシウス様のことが大好きなんです……だって、媚薬を飲んでしまった、から」
そうだ、そのせいだ。
「だから、あの方を裏切るようなことは……」
「ふん、なんだ、お前に選択の余地があるとでも思っているのか？」
ミアリの反論を予想していたのか、カルガはすぐにそう切り返してきた。
「では俺はただちに館長閣下のところに赴き、泣く泣く上官を告発するだけだ」

「そんな……！」

あっさりと退路を封じられ、泣きそうなミアリにさらに畳みかけてくる。

「第一お前も、『人間にしてやる』だなどという戯れ言を、本気で信じている訳ではないだろう？」

「……そういう、訳では……」

確かにミアリも、自分が人間になるなんて夢物語を信じている訳ではない。

――第一人間になったミアリを、ユーシウスはどうする気なのだろう。

よかったな、と言って、放り出す気なのだろうか。

「それとも、ショウカンとかいうところに……」

「？　何か言ったか？」

蚊の鳴くようなつぶやきを聞き取り損ねたらしく、カルガが聞き返してくる。

「な、なんでもないです！　あの、でも、それでも私は、ユーシウス様を裏切るなんて……！」

なおも抗うミアリを、無理やり押さえつけてもだめだと思ったのだろう。不意に優しげな笑みを浮かべたカルガは、違う角度から攻めてきた。

「なるほど、媚薬を飲んでいるから、な。だが媚薬を飲んでいるのなら、なおさらあいつを堕落させたくなるんじゃないのか？」

「え？」

思わず聞き返すと、カルガは思わせぶりな口調でこう問いかけてきた。

「このままではいずれ、お前たちは必ず離れ離れになるぞ。しかしお前の魔力で、あの男を虜にすれば……魂の奴隷になったあいつと、魔界で永遠に一緒にいられるのだろう？　もちろん、俺も協力してやる」

そそのかす声は、悪魔よりも悪魔的な力でミアリの心を揺さぶった。

祓魔師のところに預けられるにせよ、人間になれたにせよ、もうユーシウスと一緒にはいられないだろう。

「……私……」

人間界の時間で、ユーシウスと一緒に過ごしたのはまだたった四日。けれどこの時間が終わってしまうのかと思うと、それだけでミアリの心は悲鳴を上げる。

だってユーシウスは、ミアリに恋なんかしていないのだ。

彼が自分に向けているのは、共感と同情だけ。欲望でも感じてくれればまだどうにかなるのに、理想の「騎士」を目指す強靭な理性の鎧に阻まれてしまい、ミアリ程度の魅力では全く歯が立たない。

なら、当初の目的を果たせばいい。

ミアリの恋の奴隷になったユーシウスをはべらせて、魔界で二人、幸せに暮らせばいいのだ。

彼の魂を手土産にすれば、今よりましな待遇を受けられるとアドルニも言っていたではないか。

「――がんばって、みます」

小さな声で、でもはっきりと、ミアリは決意を口にした。

カルガと協定を結び、今後の対策をこそこそと話し合っている間にユーシウスが帰ってきた。手にパンとチーズだけの、簡単な食事の用意を携えている。

「どうにか使いの者と話せたぞ。……ところで、私がいない間に何もなかっただろうな？」

ユーシウスも、やはりまだカルガの約束を完全に信じてはいないようだ。当初は不安そうだったが、カルガが親しげに「ええ、問題ありませんでしたよ。なあミアリ？」と微笑むなどすると、かえって不審そうに瞳をすがめた。

「お前たちは、意外に気が合うのだな……」

「おや、妬いていらっしゃるので？」

カルガが素早くからかう。

「ば、馬鹿者、誰がッ!!」

思いきり否定されてちょっとしょんぼりしたミアリだが、おかげでユーシウスの気が逸れたようだ。その後カルガはニークレーンに報告をする、と言って去っていき、ミアリはユーシウ

スが持ってきてくれた昼食を食べた。
何事もなくその日は終わり、次の日からミアリの攻勢は始まった。

カルガから見せかけの協力を取りつけた日の翌日、昼前にユーシウスは部屋に戻ってきた。
「戻ったぞ。カルガも一緒だ」
昨日まではひとりで帰ってきていたユーシウスだが、本日はカルガも同行していた。ミアリのことについて相談するため、とでも言ってついて来たのだろう。
「お帰りなさい、ユーシウス様!!　とカルガ様！」
まだユーシウスが制服姿であることを確認したミアリは、勇気を振り絞って立ち上がった。抱きついて体を押しつけるよう指示もあったが、また火傷（やけど）をしてしまうし、何より恥ずかしくてこれが精一杯だ。
「――!?」
菓子のことをからかわれでもしたのか、いつにも増して疲労していたユーシウスの眼が大きく見開かれる。
「ミ、ミアリ、その、服、いや、布はどうしたッ!?」
「あ、これは先ほど、カルガ様から……」

そう言うとミアリは、ぎりぎりまで露出された胸元をもじもじと押さえる。ユーシウスは驚愕の表情で背後のカルガを問い詰めた。

「なっ……！　お前、急に消えたと思ったら、こんなことのために……!?」

ユーシウスをニークレーンのところまで送った後、すぐにここへ戻ってきたカルガは「これを着て補佐官閣下を出迎えるように」との指示を残していったのだ。曰く「まずは様子見だ。たぶんこの格好は補佐官閣下の好みではない」とも言われたのだが、まともにユーシウスの顔を見られない。

今のミアリの服装を端的に示す言葉は、「場末の踊り子」もしくは「大胆な娼婦」である。短い真紅の上着の胸元は大きく開き、豊かなふくらみを強調するばかり。ほっそりした腰は露出しており、可愛いへそが覗いている。そしてただでさえ短い腰布に深々と入った切れ込みが、太股と尻のラインをこれみよがしに見せつけている。

誘いかけるように輝く貴石の飾りを多数ぶら下げた、豊満な肉体を誇示するような服装は、ミアリの普段着だった外套とは対極のものだ。

「に、にに、人間の、女性の服に、慣れなければならないとおっしゃって……わ、分かっているんです、私ごときがこんな格好をしてもみっともないだけだって!!　で、ですけど、ユーシウス様、どうか我慢してください……」

半泣きで懇願されたユーシウスは、動揺のあまり持ってきた木箱を意味もなく開いたり閉じ

たりしながら、
「が、我慢？　私が何を我慢していると？　ぶぶぶ無礼だぞ、そんな、私は騎士だ、しかも聖騎士だぞ、何を我慢していると……!?」
「申し訳ないです、お目障りですよね、見苦しいですよね、本当にすみませんすみません」
うろたえる二人を、カルガはひとり冷めた眼で観察している。そのうち飽きたのか、無言であごをしゃくってミアリに次の行動に移るよう促した。
やるしかない。覚悟を決めて、ミアリはほてる頬を押さえながら頼む。
「すみませんけど、あの……ユーシウス様も、着替えてくださいませんか」
「なぜだ!?」
大仰に身を引いて警戒するユーシウスに、ミアリはためらいながら理由を述べた。
「その……お側に、行きたい、ので」
か細い声で紡がれた願いを聞いて、ユーシウスは眉間を寄せた。
「……カルガに、何を吹き込まれた？」
陰謀を嗅ぎ取った彼に睨まれて、ミアリは飛び上がった。カルガも睨まれたのだが、こちらは平然と知らん顔をしている。
「い、いえ、何も」
「言いたまえ」

「いえっ！　私がただ、ユーシウス様のお側にいたいだけですッ!!」
仕込まれた台詞であり、本音でもあった。ユーシウスが虚を突かれたように黙り、カルガはさっと頭を下げる。
「だ、そうですよ、補佐官閣下。では私はお邪魔のようですので、これで」
「ま、待て、カルガ!!」
置いていくな、と言いたげなユーシウスに背を向けながら、カルガは白々しく言った。
「あなたが本当に高潔な理想の騎士であるなら、裸同然の女性にどれだけまとわりつかれようが、関係ないのでは？　その辺の男のような劣情に駆られることなど、当然ありはしないのでしょう？」
「む、無論そうだが……」
煮え切らない態度を示すユーシウスに、ぬけぬけと続ける。
「それにあなたが人間にしたい、などとほざく、失礼、願うほど、ミアリは夢魔とは思えぬ優しい女性のようだ。父代わりでもあった男を殺された挙げ句、仇に飼い殺しにされているお気の毒な補佐官閣下を、少しでも慰めたいと考えているようですよ」
「――……!!　貴様、余計なことを……!!」
亡きスティードのことを口にされ、顔色を変えるユーシウスを無視してカルガは行ってしまった。代わってミアリが、じりじりとユーシウスへの距離を詰めていく。

「よ、よろしければ、私がお着替えを、手伝いましょうか……？」
「いや、いい、き、着替えないぞ私はッ!!」
乙女のように自らを抱きしめ、制服姿を死守しようとするユーシウスにミアリは思いきって近づこうとした。途端、ユーシウスは血相を変えて叫ぶ。
「馬鹿者、この格好の私に近づいたらだめだ！　しかも君のその格好ではだめだ!!　露出が多くて、その……余計火傷をしてしまうだろう!?」
「ですけど……！」
ミアリだって恥ずかしいのだ。けれどひと目で男を屈服させるような魅力のない身では、接触による刺激で劣情を煽るしかない。
「それでしたら、着替えてください！　着替えて……、ぎゅって、させてください……!!」
「ま、待ちたまえ、分かった、待て、来るな、とりあえず脱ぐ、脱ぐから……!!」
今にも飛びかかってきそうなミアリを片手で制し、ユーシウスは片手で慌ただしく白い制服の上着を脱ぎ捨てた。着やせする、と自ら口にしていたとおりの、優美な外見からは意外なほど引き締まった見事な体軀が露になる。
「きゃあああああ!!」
「騒ぐな、君が着替えろと言ったのだろう!?　待て、だめだ、まだ来るなよ!?」
歓喜の悲鳴を勘違いしたらしく、やけくそで怒鳴ったユーシウスが替えのシャツを摑み取っ

た。それに袖を通そうとした途端、気の迷いを振りきるように首を振る。

「――やはりだめだッ!!」

眼を閉じて言い切ったユーシウスは、やにわにミアリに向き直った。

「え？」

上半身をさらした格好のまま、決意の表情をしたユーシウスが近づいてくる。

夢魔の本能が知っている、けれど実体験を伴わない男女の営みについてのあれこれが脳裏を駆け巡った。

「え？　や、やった、の？　で、でも、待って、私、まだ心の準備が……!!」

まさか、ついにユーシウスは自分の魅力に陥落したのか。待ち望んでいた瞬間のはずなのだが、あまりにも唐突すぎて怯えが先に立った。

「ユーシウス様、待って、落ち着いてください、せめて、せめて寝台に……、えっ？」

怯えて背を向けたミアリの背を、暖かい感触が包み込む。

「……騎士は、たとえ自分が裸であろうが、淑女をはしたない格好で放っておくような真似はしない……!!」

後ろを向いた状態のミアリに、ユーシウスが背後からシャツを着せたのだ。そのまま、ぎこちなく釦を留め始める。

「カルガの馬鹿にろくでもないことを吹き込まれたようだが、安心したまえ。君のことは、私



が必ずなんとかする。それに、その、私は慰めなど必要としていないのだから、何も気にすることはない……！」

とにかく服を着せねばならない、という使命感でいっぱいなのだろう。腕の中にすっぽりとミアリを抱いていることに、ユーシウスはしばらく気づかなかった。

――天国ってきっと、こんなところなのね。私が本当に行ったら消滅するだろうけど。

やがてユーシウスが騒ぎ出すまでの間、ミアリはこの上なく甘く優しい時間を過ごした。

「だめですカルガ様、また私のほうが魅了されてしまいました……」

「やはりか。では、明日はこうするんだ」

次の日、またしてもカルガ連れで戻ってきたユーシウスは、非常に用心深いしぐさで扉を開いた。指二本分の隙間から、恐る恐るミアリの服装を確認している。

だが今日は、ミアリは昨日彼に着せられたシャツをちゃんと身に着けている。それを確かめたユーシウスは、ほっとした顔になってすっかり整頓された室内に入ってきた。

「……よし、ちゃんと私の服を着て……、いや、おい、ちょっと待て、なぜズボンを穿いてい

ない!?」

カルガの入れ知恵でユーシウスの行動を読んでいたミアリは、わざと戸口に背を向けて座っていた椅子から立ち上がった。太股ぎりぎりを隠す長さのシャツを、ちょこちょこと手で引っ張って直しながらユーシウスに歩み寄る。

「待て、だめだ、見ろ、私は制服を着ている!!」

己が身にまとった白い衣装を指し示し、「来たら危ない」と示すユーシウスの望みどおりにミアリはその数歩手前で立ち止まった。シャツの下からすらりと伸びた白い足が、ちょうどよく見える位置だ。

声もなく、ユーシウスがひくりと喉を鳴らす。うつむいたミアリはそれには気づかず、両手の指先を絡み合わせながら今日の服装の説明を始めた。

「に、人間界は、思ったより暑いんですよね……ご存じかとは思いますが、夢魔の住む魔界第二層は、暴風吹き荒れる世界でして」

「この間まではちゃんと穿いていただろうが！　御託はいい、ちゃんと服を着たまえッ!!」

眼を逸らしながら逃げようとしたユーシウスは、さり気なく背後に陣取っていたカルガにぶつかって動きを止めた。

「そんなにズボンを穿かせたいなら、あなたが手ずから穿かせて差し上げればよいのでは？　補佐官閣下」

「き、貴様、ふざけるな、そこを退けッ!!」
「お静かに。いくら人払いをされているとはいえ、あまり大声で騒ぐと、誰か来ますよ?」
ぐっと詰まったユーシウスの退路を断ったまま、カルガはミアリに視線で命じる。心得て、ミアリはユーシウスの手をそっと取った。
「ユーシウス様……」
中性的にすら見えるユーシウスだが、騎士である彼の手はやはり大きく、手の平が厚くて節が目立つ。明らかに自分とは違う作りの手を、ミアリは細い指先で撫でるように触れた。
……やっぱりユーシウスは、魅了の術を使っている。
まだ手に触れただけなのに、鼓動は速くなるばかり。もっと触りたい。もっと触ってほしい。
「や、やめ、やめたまえ……!」
顔を真っ赤にしたユーシウスは、かかとでカルガの足の甲を蹴りつけながらうめいた。さすがのカルガも痛みに顔を歪めているが、辛抱強くそこに立っている。
「ユーシウス様……」
一方、ユーシウスと同じぐらい顔を赤くしたミアリは、ユーシウスの手を握りながら甘えるようにささやいた。
「私に、ズボンを、穿いてほしいですか……?」
「あ、あああ、無論だ、早くしたまえッ!!」

かかとでカルガを蹴り、肘でカルガを小突きながらユーシウスは大声で命じた。
「では、ユーシウス様がズボンを脱いでください……」
「なっ、なぜそうなる!?」
当たり前の突っ込みに、ミアリは返答に詰まった。困ってカルガを見上げるが、カルガはユーシウスの攻撃に耐えるので精一杯の様子だ。
仕方がない。「男女間の会話は雰囲気を重視するべきで、内容になど特に意味がなくていい」とアドルニも言っていたことを踏まえ、適当にこの雰囲気に合った会話をでっち上げる。
「ユーシウス様がズボンを脱いでくださったら、私はズボンを穿いて……、シャツを脱ぎます……それで、いいですよね……？」
「な、そ、なッ、そッ!!」
動揺しすぎて続きが出てこないらしく、ユーシウスはうわずった声で「な」「そ」と繰り返した。おそらく「なんだそれはふざけるな」と言いたいのだろう。
と、その腰を、後ろからカルガが摑んだ。
「女性にここまで言わせて、何もしないなど騎士の名折れですよ。手伝って差し上げましょう、補佐官閣下。ミアリにこの制服を触らせると、また火傷をしますしね」
散々痛い思いをさせられた復讐も兼ねているのだろう。含み笑いをしたカルガが、ユーシウスのベルトに手をかけようとする。

金属音にはっと我に返ったユーシウスは、少し屈んでいたカルガのみぞおちに肘鉄を叩き込んだ。

「ぐッ!?」

突然の反撃に虚を突かれ、その場に尻餅をついたカルガの襟首を摑みながらユーシウスはミアリに命令する。

「淑女の素足はドレスの下の真珠っ!!　私にもカルガにも気安く見せていいものではないのだ、馬鹿者ッ!!　着替えのある場所は分かっているだろう、さっさとズボンを穿きたまえッ!!」

まなじりを吊り上げて叫ぶなり、まだ胸を押さえているカルガを引きずってユーシウスは去ろうとしている。

「やっぱり、私程度の足じゃだめですね……胸のほうがまだもうちょっと自信があったのですが、ズボンだけ穿いていたほうがよかったかしら……」

悲しくなって、ミアリはそんなことを言いながら自分の姿を見下ろす。胸は貴婦人でも結構ぎりぎりまで出すものらしいけど、と思いながらシャツの襟ぐりを広げていると、すかさずユーシウスの注意が飛んできた。

「言っておくが、足も胸も他のところも全て出してはいかん！　できれば顔だって出さないほうがいいぐらいだ!!」

「……はい、分かっています……」

全身を否定され、魔界に達しそうな勢いで落ち込んだミアリは、シャツの襟を立てて顔を隠そうとする。誤解されたことに気づいたユーシウスが慌ててつけ足した。

「違う！　その……、君があまりにも魅力的だからだ！　美しくか弱い女性は、無闇にそのすばらしさを男に教えてやると危ない!!　……まあ私は騎士だから、誘惑に乗ることはないが、他の男には絶対……、おい、カルガ、どこに行く!?」

まくし立てるユーシウスの手を振り払ったカルガは、慇懃に一礼して室外へと眼を向けた。

「のろけ話に胸焼けがしてきたので、お邪魔虫は退散しますよ。私はどこぞの補佐官閣下と違って、甘い物は苦手ですので。では」

「違うカルガ、私は一般論を説いているだけだ！　き、貴様の企みなど分かっているのだぞ、私は断じて堕落などしないからな……!!」

競い合うように互いに肩をぶつけながら、ユーシウスとカルガは出て行った。

そんな二人を見送るミアリの唇には微笑みが浮かび、胸は暖かな感情に満たされていた。

「ユーシウス様の魅了がすごすぎて悔しいです……しかも無自覚なのが恐ろしいです……」

「よし、そろそろ俺も本気を出す」

さらに翌日、ひとりで帰ってきたユーシウスは、指一本分開いた隙間から室内を覗いてしかめ面をした。

「……やはりここにいたのか、カルガ」

朝方ユーシウスをニークレーンのところに連れて行った後、「用事があります」と言いおいて姿を消したカルガはミアリと一緒にユーシウスの私室にいた。この状況を予測していたユーシウスは、あらかじめ顔を伏せてから室内に足を踏み入れる。

「お前たち、先に言っておくが、ぬ、布地の少ない服で私を惑わせようとしても無駄だぞ。祓魔師たちとの話は秘密裏に進めている、ミアリは時機が巡ってくるまでここでおとなしく……」

「ユーシウス様」

ぶつぶつつぶやいているユーシウスに、ミアリはそっと声をかけた。

「――ユーシウス様、あの……顔を上げてください」

「……服は着ているか？」

二日続いた罠のせいで、ユーシウスは疑い深くなっているようだ。

「き、着ています」

「……体の何割ぐらい、服を着ている」

言われて、ミアリは自分の体を眺め回した。
「ええと……八割、ぐらい、ですか」
「……透けているとか……、そういう話では、おい、カルガ!?」
戸口で立ち止まり、延々と質問を続けていたユーシウスの頭をカルガがいきなり摑んだ。
「ぐたぐだ言っていないで、見てやりなさい」
摑んだ頭を無理やり引き上げ、ミアリのほうへと向ける。あまりにも無礼な態度を咎めようと口を開いたユーシウスが、そのまま固まった。
「あ、あ……」
見開かれた若草色の瞳に、自分が映っている。気恥ずかしさに耐えきれず、ミアリは真っ赤になってうつむいた。
「その……、わ、私、ご、ごめんなさい、こんな、ドレス、なんて……！」
カルガが今回ミアリに用意したのは、ふんわりとした黄色の美しいドレスだった。コルセットで締め上げられて一層細くなった腰を中心にして、花びらのように幾重にも重なったスカートが愛らしい。
カルガ曰く「さすがに本物の貴婦人用のものは無理だった」とのことで、行きつけの店の女から借りた、とのことだった。一見それらしいがよく見ると仕立は粗いし、布も絹ではなくモスリンだ、とも。

服自体着たことがあまりないミアリにとっては、布地の種類などささいなことである。コルセットを締めた時には改めて半端に肉体があることを恨んだものだが、今はただ、ぽかんとしているユーシウスの反応が怖い。

「……ミアリ……」

呆然と呼ぶユーシウスの表情を観察し、ほくそ笑んだカルガが足音を立てずに外へ出て行く。扉が閉まるかすかな音にユーシウスははっと身じろいだが、ミアリは最早それすら意識の外だ。ユーシウスの視線が痛い。恥ずかしい。

カルガは絶対にだめだと許してくれなかったが、いっそ裸のほうがまだましだったのではないか。

「申し訳ないです、ドレスに申し訳ないです、宝石に申し訳ないです、針子に申し訳ないです、髪を結って服を着せてくれたカルガ様に申し訳ないです……!!」

ふるふると頭を振るたび、結い上げた髪も一緒に揺れる。見てはいけないもののように白いうなじにユーシウスは釘づけになっているが、うつむいて震えるミアリは気づかない。

「ユーシウス様に、申し訳ないです……私、こんな……こんな格好が、似合う淑女ではないのに……」

申し訳なさに身を縮めると、流行を反映して大胆に開いた胸元が一層強調される。ほっそりとした首を取り巻く、真珠のネックレスが豊かな谷間に入り込んでしまいそうだ。



「ご、ごめんなさい！　あの、すいません、やっぱり脱ぎます、まだ裸のほうが」
あまりの無反応に耐えかねて、着替えを始めようとしたミアリにユーシウスは呆然とこう言った。
「とても、きれいだ」
「……えっ？」
「ああ、いや、普段から君はきれい……いやその、とても、そうだ、とても淑女らしい！　君はすばらしい淑女だ！　立派な淑女だ!!」
「淑女」という単語を、ユーシウスは大切なお守りのように連呼した。そしてふと、優しく瞳を和ませる。
「その格好がいい。ずっとその格好でいたまえ」
しみじみとした感慨のこもった、暖かな笑みに胸が詰まった。
嬉しい。嬉しいのに、悲しい。
ユーシウスが遠い。
「安心した。君ならきっと、すぐに人の中に受け入れられ……幸せに暮らしていけるだろう。……君を奉仕の対象とする騎士も、大勢出るだろうな」
騎士たちの習慣のひとつに、貴婦人に対する奉仕というものがあるとはミアリもなんとなく知っていた。自由な恋愛というよりは、厳格な規則に則って互いの役割を演じ合うゲームのよ

うなものらしいが。

「……ユーシウス様は、もうどなたかに奉仕をなさっているのですか？」

いつの間にか、ミアリはそう聞いていた。

「わ、私か!?」

急な問いかけに驚いたか、ユーシウスはにわかに動揺し始める。

「わわ、私は騎士は騎士でも聖騎士だ！　ルマリア唯正教を信じる聖職者なんだ!!　無論女性を尊重するのは騎士の務めだが、特定の女性に奉仕したりはしないッ!!」

その答えに、半分ほっとして半分がっかりした。と同時に、今自分がするべきことを思い出した。

「私は……、奉仕されるより、奉仕したいです。……あなたに」

手を伸ばし、自らドレスの胸元に触れる。かちんと音がして、呆気なく留め金が外れた。

通常は使用人に着せてもらうはずのこの手のドレスは、全ての留め具類は背中側にあるのが普通である。だがカルガが持ってきたこの偽のドレスには、「いろいろ便利だからな」という理由で、一部前側に留め具があるのだ。

「うぎゃあああああッ!!」

奇声を発したユーシウスは逃げ出そうとしたが、ミアリはあらかじめ用意していた台詞で足止めを狙う。

「お待ちください！　敵前逃亡は騎士の恥ですよ!!」
「だから、なんでも騎士をつければいいと思うなッ!!　ああ、もう、これでも被りたまえッ!!」
　素早く寝台に駆け寄ったユーシウスが、ミアリに向かって上掛けを投げつける。正確に頭上に振ってきたそれにミアリがわたわたしている間に、彼は戸口に辿り着いていた。
「君がカルガにおかしなことを吹き込まれていることは分かっている！　だがその手には乗らんッ、君は人間の乙女になり幸せに暮らすのだ!!」
　幸せに。
　……ユーシウスと、離れて。
「あいつが何を企んでいるかは分かっているが、とにかく告発しないでいてくれることだけはありがたい！　また他の夢魔どもが来ないうちに、君を人間にしてみせる!!　そうすれば最悪、見つかっても君だけは救えるからな!!」
　だからおとなしくしていろ、と言いおいて、ユーシウスは出て行ってしまった。
　取り残されたミアリは、マントのように背負った上掛けに顔を埋める。
「……ユーシウス様の、匂い」
　キア茶と甘い匂いの入り交じった独特の匂い。以前は不思議に思ったが、甘い匂いが菓子の残り香であることはもう理解できた。

「お好きなら、いくらでもお食べになればいいのに……」
連日の堕落への誘いにより、ユーシウスは相当ぐったりしている様子である。そのくせ菓子に逃げる様子を見せないのだから、見事な精神力であるとしか言いようがない。
「……私のことも、少しぐらい食べてくれてもいいのに」
まだドレスの前を開いたまま、ミアリはやっぱり全裸のほうがよかったのでは、と反省した。

貴婦人作戦も失敗に終わった次の日の朝、カルガはまたユーシウスをひとりニークレーンの部屋に置き去りにして戻ってきた。
「全く、大した朴念仁だな」
姿見の間に座らせたミアリに昨日の報告を聞きながら、カルガはぶつぶつとぼやく。
「あと一歩だと思うんだが、その一歩が難しい。だが予想どおり、貴婦人路線は八割方うまくいった。次はメイドで勝負だ」
また例の店から持ってきたという、質素なメイド服を着せつけられたミアリの頭上で、武骨な指先が忙しなく動き回っている。鏡に映ったその像を見るともなしに見ながら、ミアリは「メイドなら以前やりました」と言う気にもなれず、うつむいて押し黙っていた。
「おい、顔を上げろ。ちゃんと結えない。こう、ひっつめ髪で、いや編み込んで、そうだな、

眼鏡でもかけて……」

ユーシウスの好みを大体把握したらしく、地味に地味に、だが色気は忘れず、と繰り返していたカルガの指が止まる。

「浮かない顔だな」

探るようなその眼に、背筋が震えた。……まずい。カルガはその気になれば、すぐにでも自分の存在をニークレーンに報告できるのだ。

そうなれば、ユーシウスに迷惑がかかる。

「い、いつもお上手ですね、カルガ様」

話題をすり替えようと、ミアリは顔を上げて無理やり微笑んだ。

「髪とか、服とか。私ひとりでは、特に昨日のドレスなんて、とても着られませんでした。例の行きつけのお店では、こういうことも教えてくださるのですか？」

一瞬カルガの指が止まった。わずかな逡巡の後、彼は珍しい話を始めた。

「……妹が二人いたからな。ませた奴らで、大人になったら立派な淑女になる、と息巻いて、あれこれ手伝わされた」

「まあ、そうなんですね。妹さんは、お元気なんですか？」

兄弟という概念も悪魔には馴染みが薄いものだが、例がない訳ではない。私にもそういう存在がいればよかったのに、と思いながら聞くと、カルガはぞんざいな口調で答えた。

「生きている時は、元気だった」
再び動き始めた指に髪を編み込まれながら、ミアリはひたすらに身を竦める。
「……ごめんなさい……」
「人間を餌にしている分際で謝るな」
にべもなく撥ねつけられ、ミアリはおそるおそる尋ねた。
「……妹さんは……、悪魔に？」
また、沈黙。
聞かなければ良かった。ミアリが激しく後悔をし始めたあたりで、今度はカルガが急に話を変えた。
「――しかし、補佐官閣下の理性の強靱さには眼を見張るものがある。お前、本当に何もされていないのか？」
「……何も……」
急な話題展開に驚きつつも、しおしおとうなだれる。
「すみません、私の魅力が足りないばかりに……」
「……いや、それは」
落ち込むミアリに何か言おうとしたカルガは、結局「まあそういうことだな」と冷たくまとめた。顔が膝につきそうなほどにうつむくミアリを引きずり上げ、乱暴に髪を整えながら、

「俺がいるから反応が違う、という訳でもなさそうだしな。そもそも何かする気なら、俺が現場を押さえるまでのほうが都合が良かったか……ふん。日頃散々、騎士はかくあるべし、とわめくだけのことはあるか」

「……他の、あなたが今まで仕えてきた方とは、違いますか？」

あなたのように、私を解雇しようとも、賄賂で懐柔しようとも、怒りに任せて打ち据えようともせず、ただじっと側に置いてくださった騎士も、初めてです。

先日ユーシウスに向けて、カルガが口にした台詞。

あれは、嘘だとは思えなかった。

「……違うと認めざるを得ないところはある」

非常に回りくどい言い方ながら、カルガはミアリの言葉を否定しなかった。

「独りよがりの偽善に過ぎないが、偽善の強度はさすがだな。金にも女にもまるでなびかん。たまにぽろっと愚痴など漏らすが、すぐに反省するふりをするのが腹立たしい。俺より年下のくせに、人間ができすぎている。可愛げがない」

いら立ちを露呈させた独白に、いつもなら怯えて縮み上がるところだ。

しかし気づけば彼と過ごす時間も長くなったせいか、妹のことを聞いたせいか、今日は少し違う角度から捉えることができた。ユーシウスが時々カルガに遠慮を見せることも、関係しているのかもしれない。

カルガはずっとユーシウスを試している。
ユーシウスを確かめている。
「あなたも本当は、高潔な騎士の存在を信じているのでは？」
そう口にした途端、鏡に映るカルガの瞳が鋭く光った。
ひい、とかすれ声でうめいたミアリに、彼は喉の奥でくつくつと笑う。
「恐ろしい効き目の媚薬だな。なんという強固な信頼、美しすぎて眼が潰れそうだ」
カルガの指がミアリの髪から放れた。
「お礼に俺は、眼を覆いたくなるほど醜いものを見せてやろう」
言うなりカルガが服を脱ぎ出したので、ミアリは仰天して思わず立ち上がった。
「カルガ様!?　どうしたんですか、まさかあなたもメイド服……、きゃっ!?」
さては二人がかりで、と早合点して驚いているミアリの前に、カルガは上半身をさらけ出す。
ぎりぎりまで肉がそぎ落とされた、貧相ではないがどこか危なっかしい雰囲気の肉体。その右半分は、赤紫色のひどい火傷跡に覆われていた。
息を呑むミアリの反応に満足したか、カルガははだけた上着をいい加減に羽織り直した。白い騎士服の襟れなき白さと、その下から覗く焼けただれた肌の対照が眼に痛い。
「お前の言うことは、過去形なら当たりだ。俺だってガキの頃は、騎士とは全て高潔にして誇り高く、弱い者の味方をしてくれるものと思っていた。吟遊詩人なんぞが来るたびに、騎士道

物語をせがんだものさ」

カルガは昔郷里で羊飼いをしていた、と以前ユーシウスが漏らしていたことをミアリは思い出した。今の彼と「羊飼い」のイメージがまるで結びつかないが……、カルガにだって、二人の妹の良き兄だった時代があるのだ。

「本物の騎士を、目の当たりにするまではな」

皮肉っぽく笑んだ瞳は、過去を覗き込む者のそれになっていた。

「俺が暮らしていた村は強盗団と化した騎士たちの襲撃を受け、羊を連れて外に出ていた俺以外全員殺された。慌てて戻ってきた俺も騎士たちに捕まり、火を点けられて見せ物のように踊らされた。家族の死体の横でな。助かったのはただ単に、運が良かったからだ」

「……ごめんなさい。つらい、ことを」

「気にするな。俺はこの話を聞いた奴の反応を見るのが好きなんだ」

意外な台詞に驚けば、カルガは暗い笑みを浮かべてこちらを見下ろしている。

「あの時俺たちを踏みにじった連中が、騎士どもの中で突出してろくでなしだった訳じゃない。村を焼かれ、暮らしに困り、仕方なく帝国に出て来てそれがよく分かった」

言外に語る声が聞こえるようだ。

無邪気で無知だった幼いあこがれは、そうやって何度も踏みにじられてきたのだと。

「騎士なんてものは、全員くずだ。金と地位と女を貪ることしか考えず、弱者を救う志などあ

りはしない。騎士道物語が美しい理想を描くのは、現実が物語とかけ離れているからだ」

全ての騎士が騎士らしく在る訳ではない。ユーシウスも、そんなことを言っていた。

「警告が存在する、ということ自体、それを破る奴がいるということだからな。盗むな、犯すなとの説教は何百年も前から繰り返されているが、今も罪人は世にあふれているだろう？　まあこんなことは、人間の俺が言うまでもなく、悪魔であるお前のほうがよく知っているだろうがな」

皮肉たっぷりに語ると、カルガは上着の前をきちんと直した。見た目は完璧な騎士然となった己の姿を鏡に映し、また笑う。

「だから俺は、騎士同士の権力闘争が大好きなんだ。安定したこのルマリアでは、武勲よりも社交のうまさで出世が決まるからなぁ。陰険な足の引っ張り合いに勤しむ連中は、俺を蔑みながらもこう頼む。あの邪魔な男を追い落としたい、面白い話があったら教えてほしい、と……」

ユーシウス以前の上官たちを、カルガは繰り返し告発してきたのだろう。だからこそかつての上官たちは彼を忌み嫌ったのだろうし、時には無体な扱いもしてきたのだろう。

「そして他人のあら探しをしたことを理由に、また別の奴に追い落とされる。何度繰り返しても奴らはちっとも学習しない。馬鹿ばかりだ」

彼らしい皮肉で結ぶと、カルガは吐き捨てるように言った。

「挙げ句に魔が差した、悪魔が憑いてやらせたのだと言い訳をする始末だ。悪魔の侵入を許す

ようなひ弱な魂しか持たないと、自ら公言して恥ずかしいとは思わないのか？　――人の皮を被った悪魔が、一番たちが悪い」

饒舌にしゃべり続けたカルガは、しゃべりすぎたと感じたのか唐突に黙った。

むっつりと不機嫌に唇を引き結んだ彼は、視線で「座れ」と命じてきた。促されるまま鏡の前に腰掛けながら、ミアリは慎重に尋ねかける。

「……ユーシウス様にも、さっきの跡を見せたのですか？」

「ああ」

「……あの方は、なんと？」

「……特に何も、言わなかったな」

薄紫の髪を器用に編み込みつつ、本当につまらん男だ、と毒づくカルガが怖い。ミアリの本来の性格上は、あまり関わりたい相手ではない。

けれど、きっと媚薬とユーシウスの魅了（チャーム）のせいだ。

自分とは違う意味でユーシウスにこだわるカルガに、奇妙な親近感を感じてならない。

「ユーシウス様が、このまま私の誘惑に堕落することがなければ……、他の騎士は信じられなくても、あの方のことだけは、信じられる……？　痛ッ!!」

音がするほど強く髪を引っ張られ、ミアリは悲鳴を上げた。涙にぼやけた視界の中、鏡に映ったカルガが侮蔑（ぶべつ）の息を吐くのがかろうじて見えた。

「――くだらん」

そのまま彼は、ミアリを放り出して歩き出した。

「カルガ様!?　あの、カルガ様、こ、この後、どうすれば、私……」

三分の二ほど編み込まれて放り出された髪を押さえ、困惑するミアリを置いてカルガは去っていってしまった。

第四章　理想の騎士

カルガは突然いなくなり、ユーシウスはなかなか戻ってこない。

半端に編まれた髪をほどいたミアリは、仕方なくまたいつものように木箱に収納した書類を数えて過ごしていた。

「四百一、四百二……」

気づけば窓から差し込む光は茜色を帯び始めている。いまだ慣れない人間界の太陽光の変化を不思議に思っていると、外から物音がした。

ユーシウスかカルガが戻ってきたのかと思ったが、そうではない。やけに足音が荒いし、人数が多すぎる。

とっさの判断で、ミアリは眼くらましの術を使った。ほぼ同時に、せっかくきれいに積んだ木箱や少ない家具を蹴り飛ばす勢いで、五、六人の騎士たちが室内に押し入ってきた。

「おい、いないぞ」

「どこに逃げた!?」

壁にしがみついて震えるミアリの眼と鼻の先で、白い制服に身を包んだ男たちが周囲を見回

している。揃いの制服姿であっても全員血色が良く、腰に佩いた剣に施された銀の装飾は精緻であり、位の高い騎士であることは歴然としていた。

なのに、誰もミアリの存在に気づかない。

道徳的な質もだが、能力もまた下がっていると嘆く、ユーシウスの声が聞こえた気がした。

だが、そんな騎士ばかりでもなかったようだ。

「退け」

役に立たない騎士たちを押し退け、体格のいい壮年の男がぬっと姿を現す。

ベルール騎士館を構成する赤煉瓦を、もう一段濃い色にしたような見事な赤毛が眼を引いた。緩く波打つその髪は肩先まで自由に伸び、大股に歩むたびに翼持つ獅子が黒く染め抜かれた真紅のマントと一緒に踊る。

威風堂々とした体軀はもちろん、漂う風格と権威に押されたように騎士たちが慌てて道を譲った。うちひとりの騎士とぶつかりそうになり、避けようと動いたミアリの手首を赤毛の男が摑む。

「痛っ……、!?」

握りつぶそうとでもいうような力にうめいた瞬間、ばちっ、と音がした。

ユーシウスに初めて出会った時、探査の術を弾き飛ばされたのと同じだ。赤毛の男の手が触れた瞬間、眼くらましの術は青い火花を立てて消し飛んだ。

「なるほど、服装は妙だが、この髪の色は確かに悪魔だな」
ここまでされては疑いようがなかった。男の瞳は完全に、ミアリの姿を捉えている。
「そしてこの美貌は、確かに夢魔だ。少々幼いが、あの青二才がたらし込まれたのも無理はないか」
「……どな、た……」
聞きかけて、思いとどまる。容姿についてはなんの情報も持たないが、この能力といい、騎士たちの反応といい、間違いないだろう。
「あ、あなたは、もしかして、ベルール館長閣下……？」
問いかけに、赤毛の男はにっと笑った。獲物を見つけた肉食獣のような、獰猛な笑みだ。
「魔界にまで名が知られているとは光栄だな。そのとおり、私はニークレーン・フォン・ファルバード。ベルール騎士館長を務めている」
肩書きと名前を口にした時、小鼻が尊大にふくらんだのが見えた。自尊心の強さをうかがわせる態度が、ミアリをますます萎縮させる。
なぜ、どうして、彼がここに。混乱するミアリの視界を、見慣れた姿がかすめた。
「カルガ様……!!」
白い制服をきちんと着込んだ長身痩軀の男が、ミアリを見つめてざわめく騎士たちから数歩離れたところに立っている。

思わずその名を呼んでしまい、ミアリは後悔した。下手なことをすればカルガに迷惑がかかる、と思ったのだ。

しかしカルガは、ただ冷淡に口の端で微笑むだけ。

その笑みで全てが分かった。

ニークレーンが独自にミアリの存在を摑んで踏み込んできたのではない。

カルガが館長に報告したのだ。ユーシウスが夢魔を匿っている、と。

「ユーシウス様は!?」

そこまで考えが及んだ瞬間、ミアリは夢中で叫んでいた。

「ユーシウス様は、どうなったのですか!?　まさか、もう……!!」

「安心しろ、まだ殺しはしない」

答えたのはカルガではなくニークレーンだった。暴れるミアリのあごをぐいと摑み上げ、苦しそうなその姿を楽しむように眺めて笑う。

「お前たちにはいろいろと話してもらいたいことがあるからな。二日後の異端審問会にて、また会おう」

異端審問。ルマリア唯正教に反する異端者を審議する場に、本来ならミアリを引き出す必要はない。

なぜならミアリが悪魔であることははっきりしているからだ。わざわざ問いただすまでも

分かることだし、無駄な手順を踏んだところで財産を没収できるなどの旨味もない。
つまり全ては、ユーシウスを貶めるためのものなのだ。
スティード殺しの汚名を避けるためだけに手元に置いていたユーシウスを、合法的に始末するために。
「わ、私は、何も、しゃべりません……！　あっ!?」
抵抗を叫ぶミアリを、ニークレーンは乱暴に近くの騎士たちに押しやった。
「カルガよ、お前も心配性だな。まだあの若造は堕落しきっていない、という話だったが、この小娘の必死さを見たか？　やはりアシュリーは悪魔だったのだ！　でなければ、半魔とはいえ夢魔がここまで尽くすはずがないものな!!」
今日まで報告が遅れたことを暗になじるニークレーンの言葉は、耳には入っても心にまでは届かない。
ミアリの胸を占めるのは、ユーシウスへの想いとそれゆえの絶望だけだった。

鎖に繋がれたまま、ぱさぱさに乾いたパンをかじるミアリの姿を檻の外から見つめ、二人の兵士がごくりと喉を鳴らす。
「これで低位なのか、さすが夢魔だな……」

メイド服姿のミアリは、苔むした牢獄の隅で膝を抱えた状態で座っていた。カルガ曰く「いろいろ便利だからな」という理由で標準より短いスカートから、すんなりとした白い足が無防備に伸びている。

もともと服を着る習慣がないミアリである。心ここにあらず、の状態では足を隠すことに気が回らず、兵士たちの視線に気づくこともない。

「どうせ殺すんだろう？　なら、俺たちで少し楽しませてもらっても……」

下品な会話を聞き流しながら、ミアリは半分だけかじったパンを皿に戻した。精気が枯渇してきた時特有の視界のぶれはまだ収まっていないが、食べる気になれない。

ここは、騎士館が集まった首都レティシアの中心部から少し離れた地下牢獄だった。半魔とはいえ悪魔であることを警戒してか、他の獄室から距離があり、近くにミアリ以外の囚人はいない。

姿を見なくなって、そろそろ丸一日経つユーシウスがどこにいるのかは分からない。異端審問にかけるという話だから、殺されてはいないだろう。しかし、魔力を封じる鎖に繋がれたミアリ同様、なんらかの逃亡を予防する策は講じられているはず。

悪い想像がぐるぐると脳裏を巡り、胸が苦しくなった。ため息をついて胸元を押さえるそのしぐさを見つめ、鍵を手にした兵士がおもむろに檻に近づいてくる。

「よせよ、相手は半分とはいえ夢魔だぞ。それともまさかお前、もう魅了にかかったのか？」

相方が咎めたが、興奮した様子の兵士は聞く耳を持たない。

「鎖に繋がれているんだから、大丈夫だって。ちょっと触るぐらいならいいだろう？　護符もちゃんと身に着けているんだから、平気平気」

「だが、下手なことをしてベルール騎士館長を怒らせるとまずいぞ。こいつらの様子見に来ているらしいじゃないか。あの方、噂ではルマリアの帝王になるとか息巻いているそうだし」

「帰ったってさっき聞いたぜ。それに今の段階で騎士館長風情の男が、帝王になんかなれるかよ。なれるとすれば兄君のどちらかだろう？　いいじゃねえか、どうせばれやしないって」

他に誰もいないと思って、兵士はかなり大胆なことを口走った。ニークレーンが嫌われているのか兵士の質が低いのかは不明だが、いずれにせよユーシウス様が聞いていたら怒るでしょうね、とぼんやり思う。

牢の鍵が回る音を聞いている間も、ミアリはぼんやりしていた。荒い息を吐きながら兵士が近寄ってきた時も、その兵士が「ファルバート館長閣下！」と慌てて飛び退いた時もまだぼんやりしていた。

「……あら？」

なんだかうるさかった、程度の認識しかないままに顔を上げたミアリは、眼の前にニークレーンが立っていることに気づいてぎょっとした。

いつの間にか、見張りの兵士たちはいなくなっている。狭い牢獄の中には、ミアリとニーク

レーンの二人きりだ。
鷲を思わせる鋭い眼が、無言でミアリの全身を這う。怖くなってスカートの裾を引っ張った瞬間、ニークレーンの姿がぶれた。
飢餓がひどくなったのかと思ったが、そうではなかった。赤毛の偉丈夫の姿は消え、代わって現れたのは艶やかな黒髪を額の中央で分けた美青年。
「久しぶりだな、ミアリ」
「アドルニ様!?」
驚くミアリに、変身を解いたアドルニが問う。
「ミアリ、お前、なんだその格好は」
「アドルニ様こそ……、大丈夫ですか？」
久しぶりに会ったアドルニは、消耗しているのが明らかだった。ただでさえ青白い肌からは完全に血の気が失せ、自慢の髪の艶も減じている。
「そんなことはどうでもいい！　それよりお前も例の標的も、なぜこんなところに閉じこめられているんだ!?」
「えっ、ユーシウス様もこちらにいらっしゃるんですか!?」
いつにない勢いで聞き返してきたミアリに驚いたか、アドルニは檻の外に眼をやった。
「あ、ああ、向こうにいたぞ。ベルール騎士館長が顔を見に来ていたんだ。奴が帰ったので、

俺は奴の姿を真似て……」

みなまで聞かず、ミアリは周囲を確認した。

ニークレーンの姿のアドルニに命じられたらしく、兵士たちはいない。牢の鍵も開いている。

「おい、ちょっと待て、ミアリ!!」

駆け出そうとしたミアリの手首を、アドルニが摑んで引き留めた。

「ごめんなさい、アドルニ様、放してください!!　私はユーシウス様に会いに」

「だめだ、説明が先だ!!　第一お前、自分がどういう状態かを忘れているだろう!?」

アドルニの言うとおりだ。メイド服姿であることはとにかく、精気が枯渇しかけて足元はふらふら。おまけに、鎖で壁に繋がれている。

仕方なく、ミアリは手短に経緯を説明した。説明中アドルニはあ然としており、説明が終わると憤然とした。

「お前、この、この馬鹿野郎ッ!!　お前、やっぱり……!!」

悔しそうに吐き捨ててから、アドルニは急に小さく、自分に言い聞かせるようにひとりごちた。

「……やっぱり、例の騎士は魅了の術を使えるんだな。うん、そうだ、そうに違いない」

「……ええ、きっとそうなんです」

ミアリもその推理には異存がない。

「だから……ごめんなさい。私、ユーシウス様を堕落なんて、させられません」
ミアリ自身がユーシウスに堕落、いやむしろ昇天させられ、人間の乙女のような思考に陥ってしまっているのだ。
彼が何よりも大事にしている「騎士」の誇りを奪われ、異端審問にかけられて殺される。そんなことには、絶対に絶対にさせられない。
「お願いです、アドルニ様。私の鎖を外して、精気を分けてください。ユーシウス様を助けに行かないと……!!」
「……まず、鎖は外してやろう」
すがりつくミアリを見下ろして、アドルニは意外なほどの物分かりの良さを見せた。兵士から奪ったらしき鍵を使って、難なく鎖を外してくれる。
「ありがとうございます！　次は」
「――そうだな。精気も、分けてやってもいい」
ぱっと笑顔になるミアリだったが、
「その代わり、お前はこのまま俺と魔界に戻るんだ」
「……そんな」
提示された条件に、ミアリは愕然と眼を見開いた。
「まだ……、ユーシウス様を、堕落させていないのに。でないと魔界に居場所はない、という

話では……」

「……あんなものはただの脅しだ。本気にするな、馬鹿」

黒髪の先をいじり回しつつ、ふてくされたようにアドルニは言った。

「……俺が他の奴らには謝ってやるよ。謝るのは、慣れているしな。だから……これまでどおりでいいだろう、俺たちは」

そこまで口にしてから、慌てたように言い訳をつけ加える。

「お、お前がいなくなると、俺が威張れる機会がなくなる、いや、減るからなっ!!　……だから……お前が生きる分ぐらいの精気は、これからも俺が分けてやる。だからもう、ユーシウスのことは忘れろ」

ひどく真面目な忠告が、心臓の真ん中に突き刺さった。

「ミアリ？」

一番大きな言い訳がなくなってしまった。

「ミアリ……、おい、なんだお前、そんなにあいつのことを……」

下を向いたミアリの落ち込みように動揺し、アドルニは不安そうな声を出した。

その手に、細い指先が触れる。

「……分かりました」

ゆっくりと顔を上げたミアリは、雨に打たれた花のように儚く笑んだ。

「ごめんなさい、アドルニ様。言うことを聞きます。だから私に、精気を分けてください」
束の間、魅入られたように動きを止めたアドルニが、赤らんだ頬を隠すように顔を背ける。
「ふん、さ、最初からそう言えばいいんだ、出来損ないが一人前の口をききやがって」
嫌味にも、ミアリは「ごめんなさい」と深く頭を下げる。同時に握ったアドルニの指を、促すように優しくさすった。
「がっつくな、馬鹿。ほら、いくぞ……!!」
心なしか嬉しそうなアドルニから、甘い力の奔流が流れ込んでくる。
やっぱり私は夢魔なのね、とミアリは思った。食料から栄養を得ることにかなり慣れてはきたが、直接精気の形で受け取るのはやはり効率が段違いだ。
そんなことを思っている間に、いつもよりも早くアドルニから流れ込む精気の量が減っていく。アドルニ本人がやけに消耗しているためだろう。あるいは、小出しにして言うことをきかせ易くしようとしているのかもしれない。
ごめんなさい、と唇だけ動かしてつぶやいた。
「……ミアリ……？」
両手を握り締められたことに気づいたアドルニの不審そうな問いかけに、ミアリはその眼を覗き込むようにして訴えた。
「アドルニ様……、お願い、もっと」

普段は散々焦らされた挙げ句、アドルニ側の裁量で精気を与えられておしまいだ。追加を要求されたことがなかったので、アドルニは驚いている。

「なんだ、お前、今までそんなこと」

「お願いです……、もっと、欲しい」

「……わ、分かった、よ」

濡れた青い瞳の懇願に押し負けて、精気の流れが強くなる。それでも足りない、と言わんばかりに、ミアリは紅い唇を舐めて繰り返した。

「もっと……、もっと」

「――!! この、こら、やめろ、ミアリ……!」

異変に気づき、慌てて精気の流れを遮断しようとしたアドルニだが、無駄だった。

一度開かれた通路を、ミアリの側が固定している。ただ精気を与えられるのではなく、奪っている。

「お前、こ、こんなことが、できたのかよ……!!」

やがて、限界ぎりぎりまで精気を奪い取られたアドルニが床に崩れ落ちた。対するミアリは、体中に満ちあふれた力を確かめるように両手の拳を握ってみた。

自分でも、本当にこんなことができるとは思っていなかった。

物心ついた時には魔界で過ごしていたミアリは、それ以来ずっと半魔と馬鹿にされてきた身

の上だ。持って生まれた魔力は乏しく、精気を得るために人間界へ行くことすらままならなかった。アドルニが来るのが遅れたせいで、本気で消滅しかけたことも何度もある。

だが媚薬を飲まされ、ユーシウスの魅了にかかったせいでミアリは変わった。欲望に対して忠実になり、夢の中にも入り込める程度には、夢魔の力を使えるようになったのだ。

「ごめんなさい、アドルニ様。今までありがとうございました!!」

干涸びて消滅するまでではないが、すぐには動けないアドルニを置き去りにして、ミアリは牢の外へ抜け出る。

「私のような恩知らずのことは、もう忘れてください!!　魔界に戻るぐらいの力は残っていると思います。お元気で、さようなら!!」

言いおいたミアリの姿が、幻を映す紗幕に覆われる。

ニークレーンの姿を模した彼女が駆けていく様を、アドルニは床の上で見送るしかなかった。

「くそッ……色仕掛けでだますなんて、一人前の夢魔みたいな真似をしやがって……!!」

悔し紛れに汚い床を叩きながら、艶を失った黒髪をぐしゃぐしゃとかきむしった。

「……くそ……ッ、馬鹿野郎、逃げられるもんか、お前も殺されるぞ……!!」

アドルニが教えてくれた情報を頼りに牢獄の中を歩くと、ユーシウスの居場所はすぐに分

かった。無関係と思われる兵士たちまであたりを大勢うろうろしているし、口々に「とうとう悪魔騎士が捕まった」などと噂話に夢中になっているからだ。

その中を歩くのは勇気が要ったが、幻術はミアリの得意とするところである。アドルニから奪った精気を惜しみなく投入したニークレーンの虚像を、兵士たちはぴんと背筋を伸ばして出迎えた。

「ファルバート閣下、どうされましたか、何かお忘れ物でも……!!」

「――牢の鍵だけ置いて、貴様らは下がれ」

余計な説明のない命令が、いかにも本人が言いそうなものに聞こえたのだろう。詮索する様子すら見せず、兵士たちはミアリに鍵を渡してそそくさと去っていった。

目当てのものを得たミアリは、改めて牢の中のユーシウスを見やる。

先ほどのミアリよりも太い鎖で、ユーシウスは壁に繋がれていた。誇り高き白い制服は奪われ、上半身を覆うのはあちこち破れたシャツ一枚。下半身は囚人用と思われる灰色の汚いズボンを穿かされただけだ。

おまけに破れたシャツから覗く肌には、赤いみみず腫れがいくつもある。まだ血のにじんだその跡は、たぶん本物のニークレーンの仕業だろう。

悪趣味なことに、血の臭いに混じって漂うのはクリームの甘い香りだ。ユーシウスの好物を知るニークレーンが、ふざけて菓子をその口に押し込んだものと思われた。唇の端に、血に染

まったクリームが少し残っている。
……なんて羨ましいことを、などという邪な思いが顔に出たのか、ユーシウスが鎖を鳴らして身じろいだ。
「……どうされました、菓子も鞭ももう十分いただきましたよ。まだ何かご用事ですか」
ひと目では、ユーシウスにも正体を見抜けなかったようだ。しかしさすがに、彼は他の兵士たちとは違う。
「館長閣下、ですよね……？」
「……私です、ユーシウス様」
完全に他の人間の気配がないことを確かめて、ミアリはおもむろに幻術を解いた。
「ミアリ!?　なっ、君はまたそんな格好で……!!」
開口一番説教を始めそうになったユーシウスは、途中で心底安堵したように息を吐いた。
「しかし……無事、だったのだな。よかった……!!」
自らの状況も顧みず、嬉しそうにつぶやくその声に泣きそうになる。だが、今は悠長に再会を喜んでいる場合ではない。
「ちょっと待ってください、今助けて差し上げます!!」
兵士から渡されていた鍵を使い、ミアリはユーシウスが閉じこめられた牢を開いた。
「待て、ミアリ……！」

なぜかユーシウスが制止しようとしているが、救出作業に夢中のミアリは気づかない。じめつく牢獄内に入り込み、今度はユーシウスの鎖を外そうとする。

「あっ、いけない！」

牢の鍵は受け取っていたが、鎖の鍵のことを忘れていた。一応牢の鍵を差し込んでみたが、当然のごとく合わない。

「よせ、ミアリ、いいんだ、私は」

なおも止めようとするユーシウスを無視して、ミアリは彼の手首を拘束する鎖を摑んだ。

じゅっ、という音がする。肉が焼ける嫌な匂いがあたりに広がる。

ミアリ同様、ユーシウスのことも悪魔だと疑っているからだろう。法術が施されていると思しき鎖は、ミアリの手の平を一瞬で真っ赤に焼いた。

「やめろ、手を放せ!!」

血相を変えたユーシウスが、派手に鎖を打ち鳴らしながら暴れる。こんな音がしていたら、いくらニークレーンの命令でもおかしく思われるのは時間の問題だ。

「ユーシウス様こそ、静かにしていてください！　ええい、こ、こんな、ものっ……!!」

体中の力を振り絞るようにして、ミアリは魔力を一点に集中させた。

こんな力の使い方は、ほとんどしたことがない。

夢魔はあまり自分の手を汚さず、魅了した相手に戦わせることが望ましいとされている。と

はいえミアリに使い走りにできるような相手はいないが、同じ術を使うなら眼くらましや幻術に魔力を回し、戦いを避けることを考えてきた。

しかし今、魅了され、使い魔のような状態になっているのはミアリなのだ。だからやるしかない。

「よせ、君には無理だ、君の肌を傷つけたくない……!!」

ユーシウスの叫びは、がきん、という不快な音に中断された。

「できたっ……！」

ばらばらに砕けた鎖の欠片が床に飛び散る様を、ミアリは嬉しそうに、ユーシウスは呆気に取られた様子で見つめた。

「……君に、こんな力が……あっ、こら、だめだ……!!」

続けてミアリは反対側の鎖にも取りすがり、同じようにそれを破壊した。

手の平の痛みは激しく、魔力を使いすぎて視界がぶれ始めている。すえたような地下の臭気に焦げた肉の臭いと血とクリームの匂いが入り交じり、吐き気を覚えたが、やるしかない。

さあ次は足を、と屈もうとしたところを、強い力で引き寄せられる。

「よさないか、馬鹿者ッ!!」

両手の拘束が解かれたユーシウスだった。動いたことで鞭の傷が開いたのか、顔をしかめながらもがっちりとミアリを抱きしめて、焼けただれた手の平に唇を噛む。

「ああ、こんな傷が……！　言っただろう、私は君の傷を治してやれないんだぞ!?」
本気で怒鳴りつけられても、全く怖くなかった。というより、怒鳴り声がほとんど耳に入らなかった。
正面からこんな風に密着したのは初めてで、どうしていいのか分からない。
「……あっ、これは、いや、これは、君が悪い!!」
恥ずかしさと嬉しさで固まるミアリを一瞬放しかけたユーシウスは、すぐに華奢な体を抱え直した。
「ひ、ひ、非常事態なので、このまま話すぞ、他意はないので気にするな!!」
「は、はははは、はい」
「その、まず、約束したまえ。私はここから逃げる気はない、だから鎖は解かなくていい!!　もう余計なことはしないと、そう誓うならすぐに放す!!」
いかにもユーシウスらしい提案を、ミアリは間髪を容れずはね除けた。
「できません!!」
「なッ!?」
声の力強さも、その速度も、共に想定外だったようだ。強張るユーシウスの胸に、ミアリはぐいぐいと自分の胸を押しつけるようにしてもう一度断った。
「できません!!　そもそも放してほしいとも思っていませんけど、鎖は絶対に解きます！　そ

して一緒に逃げ」
「だめだ!!」
はっと我に返ったユーシウスは、たわわな感触に圧倒されたように腰を引きながらも叫んだ。
「言っただろう、私は逃げない!!　だから鎖を解く必要はない!!」
「どうしてですか!?」
自分でもびっくりするほど、ミアリは強情に食い下がった。
「だって、明日ユーシウス様は異端審問にかけられて殺されるんですよ!?　そんなこと、私は絶対見過ごせません!!」
具体的な内容を口にされ、さしものユーシウスも顔を強張らせた。
だがそれも刹那のことに過ぎず、すぐに決然とした表情に戻ってしまう。
「……私だって、別に死にたい訳ではない。だが、騎士は上官の命令に忠実なものだ」
「そんな……!!」
薄々予想していた態度ではあったが、あまりにも硬直した思考に怒りを感じた。そんな自分にまた驚きながら、ぎゅっとユーシウスに抱きついて反論する。
「館長閣下は、ユーシウス様のことが邪魔なだけなんでしょう!?　おまけにあなたの大切な人を殺した、そんな人を」
「――ミアリ」

大きくも荒くもない、ひどく静かな声が慣れない怒りを吸い取ってしまったかのようだ。
たしなめるように見つめられ、ミアリは続く言葉を失ってうなだれるしかなかった。
「正直に言おう。私もそう疑ってはいる。だが……、確たる証拠もなしに人を、まして上官を疑ってはいかん」
しみじみとつぶやいてから、ユーシウスは自嘲するように微笑んだ。
「……報告書の扱いといい、君には私の傲慢さを教えられてばかりだな」
「ご、傲慢、なんて、そんな」
ユーシウスを責めたい訳ではないのだ。どう話を進めていいのか分からなくなり、まごつくミアリを見つめていたユーシウスがふと視線を上げた。
つられて背後を振り向いたミアリが小さく息を呑む。
牢の入口に立っていたのは、カルガだった。

抱き合ったままの二人を眺め、カルガは口の端を曲げて笑う。
「騒がしいと思ったら、お盛んなようで何よりです」
「カ、カルガ、様……!?」
それ以上何も言えず、ミアリはただ強くユーシウスに抱きついた。

「違う、誤解だ！　これは彼女がこれ以上無駄なことをしないよう、捕まえているだけだ!!」
ユーシウスも弁解を始めたが、カルガも軽くからかう以上の意図はなかったのだろう。左様で、といいかげんな相槌を打つなり話題を変えた。
「ファルバート館長閣下がまたお戻りになった、と、お聞きしたので来てみたら、案の定だったようですな。やれやれ、騎士どもの質は落ちる一方だ」
本物のニークレーンと通じているカルガが、ユーシウスをいたぶって去ったはずの上官の再訪を怪しむのは当然である。ついでにミアリの幻術を見抜けない騎士たちの未熟を嘲笑いながら、彼は牢の中に入ってきた。
ミアリも、そしてたぶんユーシウスも、カルガが背後に多数の騎士たちを連れてきているものだと思っていた。しかし見たところカルガはひとりであり、外に誰かを控えさせているようでもない。
単に嫌味でも言いに来たのかと思ったが、そうでもなさそうだ。黒い瞳は無言で抱き合う二人を見つめている。
「――カルガ」
その姿から、ユーシウスは何かを感じ取ったのだろう。戸惑うミアリを強く抱いたまま、部下を呼んだ。
「上官としての、最後の命令だ。ミアリを逃がしてくれ」

「……あなたはもう補佐官の任を解かれている。従って、命令されるいわれはない」

すぐさまカルガはそう言い返してきた。だがユーシウスは、気後れした様子なく言い方を変えた。

「では、ただ単純に、頼む。ミアリだけでいい。逃がしてやってほしい」

ミアリを抱いたままではあったが、ユーシウスはきちんとカルガに向かって頭を下げた。最初にミアリが彼に見つかった時と、同じように。

「ミアリがいい子であることは、お前もそろそろ分かっているはず。……彼女は他の悪魔に脅された挙げ句、媚薬を飲んでしまっただけなんだ。予定どおり、祓魔師のところへ」

「そんな、嫌です！」

伝わる体温にいまだどきどきしながらも、ミアリはユーシウスの頼みをさえぎろうとした。

ところがそれ以上に大きな音が、獄内を一瞬にして沈黙に導いた。

いきなり表情を険しくしたカルガが、鉄製の檻を激しく蹴飛ばしたのだ。

「貴様という人間は、どこまで偽善者なんだ!!」

反射的に「ごめんなさいごめんなさい」と謝り始めたミアリを尻目に、カルガはユーシウスに噛みついた。

「はっ、何が騎士道だ、何が理想の騎士だ!!　明日には全ての誇りを取り上げられて殺されるんだぞ!?　泣いてわめいて、みっともなくあがけばどうだ!?　それとも本当に悪魔だから、死

ないとでも言うつもりか!?」

摑みかからんばかりの勢いのカルガに対し、ユーシウスは冷静すぎるほど冷静に答えた。

「私が泣いてわめけば、ミアリを助けてくれるか？」

「!!」

声もなく、カルガが奥歯を噛み締める。だが怒りが消えた訳ではなく、内にこもっただけなのは表情を見れば明らかだった。

「わ、私は、助けてほしいなんて思っていませんからっ!!」

殴りかかってくるのでは、と不安になったミアリは、ユーシウスの腕の中で向きを変えた。両手を広げて彼を庇う姿勢を取ろうとするが、ユーシウス自身は落ち着いた口調で話し続ける。

「カルガ。お前や館長閣下が思っているとおり、私は見栄っ張りで意固地なだけの青二才だ。……そこを変えることはできないし、変えたいとも思っていない」

前置きにさらに煽られた様子で、カルガのまなじりが吊り上がる。罵声を浴びせるべく息を吸う間合いに合わせ、ユーシウスは言った。

「全ての騎士が理想の騎士ではない。それは、私も分かっている」

「騎士」を否定する言葉がその口から出たことにミアリの胸は痛んだが、ユーシウスの瞳は絶望に曇ってはいなかった。

「だが、ユーシウス・アシュリーは、女性や子供を殺さない。武器を持たぬ者も殺さない。絶

対に!!　父とリューディス閣下が教えてくれた騎士道を、最後まで歩みとおす!!」

凛と響く声で立てられた誓いに、全身が共鳴でもしたかのように震えた。

騎士道など知らない、人間の美徳などよく分からない。半分しか人間ではない自分に、どうしてこんなに彼の言葉が響くのか不思議に思える。

けれど思い返せば、そもそも全ての者は唯一なる神に作られたのだ。悪魔はもともと天使であり、天使と人間は共に神の創造物である。

魂の根は繋がっているのかもしれない。全てではないにせよ、分かり合えるところはあるのかもしれない。

まして同じ人間であり、同じように騎士にあこがれた記憶を持つカルガに、届かない訳がない。

いっさいの表情を失ったカルガの心中が読めた訳ではないが、ミアリはそう思った。

「……カルガ・ナズルも、そうだろう？　素行の悪い騎士を追い払ってくれたと、その、そういう商売の女性が私に礼を言ってきたことがあるぞ」

ユーシウスにも、己の言葉が元部下に届いたという確信があるのだろう。やや語調を和らげてそう問いかけたところ、カルガは横を向いて吐き捨てた。

「あなたには、本当に吐き気がする」

一瞬身を硬くしたミアリだったが、カルガは顔を背けたまま彼女に向かって手を突き出して

きた。
「来い、ミアリ」
「……カルガ様……」
胸を一杯に満たす感動に突き動かされ、その手を取りかけて思いとどまる。
違う。これはミアリの望みとはかけ離れている。
「も、もちろんユーシウス様も一緒に」
「言っただろう、私は残る」
顔だけ振り向いて確認したが、ユーシウスの答えは変わらなかった。
「……そんな……、カルガ様」
救いを求めてカルガを見るが、彼は差し出した手を焦れたように振ってこう促した。
「早くしろ、ミアリ。さすがに時間が経ちすぎている。そろそろ見張りが戻ってくるぞ」
平然と、カルガはミアリだけを呼んだ。ユーシウスを見ようともせず、ユーシウスもそのことについては特に触れない。
カルガも、ミアリだけを逃がすつもりなのだ。そのことに気づいて愕然とする。
「嫌です。私もユーシウス様と一緒にいます!!」
またユーシウスのほうを向いて、ミアリは必死にその胸にすがった。
「ユーシウス様と一緒に異端審問にかかります。ユーシウス様と一緒に死にます!!」

「馬鹿者!!」

自由な両手を使い、ユーシウスはミアリを引き剝がした。

「私は君と死ぬことなど望んでいない!! ……大体君は、いまだ媚薬に惑わされているだけなんだ。一時の感情で、自分を粗末にしてはいけない!!」

肩に食い込む指が痛い。本気の拒絶をこめた声が痛い。

でも、このまま離れ離れになることのほうがもっと痛い。

「嫌です……」

今にもカルガに向けて突き飛ばされそうになりながら、ミアリは傷ついた指先をユーシウスの手首に絡めた。

「そ、それにもう、私、魔力を、全部、使い果たしてしまいましたッ。幻術は使えないし、手も、痛いし、あ、足もなんだか痛いし、嫌です、逃げるなんて嫌です!!」

多少の誇張はあったが、ミアリはここぞとばかりに弱っていると主張した。実際視界のぶれはひどくなって来ているし、ユーシウスの足の鎖を砕くのは難しいだろう。

「このまま出て行くなんて、無理です。カルガ様にも迷惑がかかりますし、だから私も、一緒に……!」

「……使い果たした？　何を言っている」

涙ながらの訴えに、ユーシウスは穏やかに微笑んだ。

「私がいるじゃないか」
咄嗟に意味を摑み損ね、怪訝そうにしているミアリのあごが持ち上げられ、腰を抱えられる。
最初に柔らかい感触を感じたのは、唇のすぐ横だった。
「……！」
声もなく固まっているミアリの後頭部を、長い指先が慎重に抱え直した。難しいな、とつぶやきながら入念に角度を調整し、もう一度唇を近づけてくる。
「……や、だ、だめ……!!」
精気の枯渇がひどくなりすぎて、夢でも見ているのかと思ったが夢ではなかった。
そして夢なら嬉しかったが、これが現実なら受け入れる訳にはいかなかった。
「ずるい、嫌、だめ……!!」
必死に顔を背け、卑怯な誘惑に屈しまいと抵抗する。しかし腕力はもちろん、魅了の力でもユーシウスはミアリを圧倒する。
「私の精気がほしかったのだろう……？　ずっと」
ところどころかすれた低い声が背筋を震わせた。ずるい、ずるいと繰り返してみたが、明らかに語調が弱くなっているのが自分でも分かった。
「ほしいだけ、奪いたまえ……」
ようやく正しい位置を見出した唇が、強引にミアリのそれを捕らえた。

乾いた血とクリームの味が、否応もなく伝わってくる。

「――！　ん、んっ……!!」

予想どおりと言うべきか、ユーシウスはやはり口づけそのものに慣れていないようだった。その拙さに乙女心が切なくうずく一方で、悪魔としての本能的な欲望が激しく燃え上がっていく。

だめなのに、いけないと思うのに、体を流れる夢魔の血が反応してしまう。悔しくて悲しくて、涙がぼろぼろと頬を伝った。

でも、だめだ。弱った上に浅ましいこの身には、あまりにも誘惑が強すぎる……

「……うっ……!?」

小さくユーシウスが身じろいだ。だが、ミアリを抱きしめた手は放さない。

ミアリも嗚咽を漏らしながら、ユーシウスにすがりついていた。やがて彼の手が力を失い、体に沿ってだらりと垂れ下がった後も、まだ泣いていた。

「……きれいだ」

汚い石壁に背を預けて立ったユーシウスは、青ざめた顔に微笑みを浮かべる。

髪はぐしゃぐしゃ、眼は泣き腫らして真っ赤。メイド服はしわだらけで、スカートの裾は泥とかびに汚れている。

だがそれでも、清廉な魂の力を存分に吸ったミアリは、咲き初めの真紅の薔薇のような魅力



を放っていた。

涙を含んだ青い瞳は星の光を宿したように輝き、かすかに上気した肌は上等の絹のようになめらか。長い薄紫の髪は宝石そのもののようにきらめいており、焼けただれていた手の平も、血の跡だけを残して再生している。

それまで沈黙を守っていたカルガでさえ、呑まれたようにミアリを見つめて動けなくなっていた。今の彼女の姿を見れば、大抵の男が同じ反応を示すだろう。

しかしミアリ自身の瞳は、まぶしそうに自分を見つめるユーシウスに固定されていた。

「……ユーシウス、様……」

助けを求めるように呼びかけると、まなじりに溜まっていた涙が一粒こぼれ落ちた。垂れていたユーシウスの手がぴくりと動いたが、眼に見える反応はそこで終わった。

「――いっそ全てを投げ捨てて、君と堕ちたいと、何度か思った」

ほろ苦いような笑みを浮かべ、ユーシウスは瞳を伏せてそう言った。

「夢魔としても、君は立派だったようだ。……可能であれば、どうか人間の淑女になって、幸せに暮らしてほしい」

「……ユーシウス様」

ほとんど無自覚に、ミアリは彼に向かって手を差し出していた。

「私と」

「行ってくれ」
震えるその手を、震える声が静かに制する。
「私を、騎士として死なせてくれ。頼む」
唇を噛みしめるミアリの手を、横合いからカルガが摑んだ。そのまま容赦のない力で、牢の入口に彼女を引きずっていく。
「行くぞ」
「カルガ様……!!」
つんのめりそうになりながら、それでも抵抗しようとするミアリに素っ気ない命令が飛んできた。
「黙って幻術を使え。俺の上官を、これ以上困らせるな」
二人揃ってずるい、と口の中でうめいたミアリの視界から、ユーシウスの姿が遠ざかっていく。新たにあふれた涙によって、その姿はさらにぼやけていく。
「うえ……っ、えっ、えっ……!!」
嗚咽を漏らしながら、ミアリはユーシウスの願いを叶えるために魔力を使った。

牢獄から外に出ると、あたりは真っ暗だった。わずかな月明かりが、城壁に囲まれた帝都レ

ティシアの豊かな町並みを冴え冴えと照らし出している。
ひそひそと顔を合わせて話し合う兵士たちの眼を逃れ、牢獄から少し離れた位置にある兵舎の陰に入ったカルガは、まだ泣いているミアリを冷たく睨んだ。
「……その顔で泣くな。気色が悪いし、変に思われるだろうが」
「だって……！」
牢を脱するためニークレーンに化けていたミアリは、地面にへたり込んで泣き続けていた。
「だって、だって、だって……!!」
他に手はなかった。頭では分かっているが、心がまだ追いつかない。
本当なら今すぐにでも取って返したい。ユーシウスがどれだけ嫌がろうが、無理やりさらって二人で逃げたい。
――けれど、そんなことをすればユーシウスを、あの気高い魂の核である誇りを粉々にしてしまう。それでは彼を救えない。
「とにかく、幻術を解け」
呆れたようにつぶやきながら、カルガがミアリの腕を取って乱暴に立たせた。
「ひっく、で、でも」
ユーシウスの希望どおり、このまま祓魔師とやらのところに行くのなら、ニークレーンの幻を維持しておいたほうが都合がいいのではないか。壮年の男の濡れた瞳でそう訴えると、カル

ガは頬を引きつらせながら説明してくれた。
「補佐官閣下は知らんようだが、残念ながら、例の祓魔師のところにもすでに手が回っている」
万一ミアリたちを取り逃した場合に備え、ニークレーンは周到に罠を用意している様子だ。
「じゃ、じゃあ」
牢を出ても無意味だったのでは、と訴えようとするミアリの機先を制し、カルガはもう一度命じた。
「いいから元に戻れ。これから会いに行く方と、お前が同じ姿ではまずいだろうが」
「え……？」
意外な言葉に首をひねる、その可愛らしいしぐさにカルガは顔を歪める。不愉快そうに空を見上げ、いいからさっさとしろ、と繰り返した。

きっと何か理由があるのだろう。第一今以上に悪いことなど、もう起こらない。

そう思ってミアリは、カルガが明らかに夢魔と分かる状態の自分を連れて帝都に入っても、驚く騎士たちに命令を下して怪しげな箱馬車を用意させても、何も聞かなかった。

しかし夜の帝都を馬車でひた走り、辿り着いた場所を見上げた時にはさすがに聞かずにはいられなかった。

「あの、ここ、ベルール騎士館……？」

「当たり前のことを聞くな」

すげなく言うと、カルガはさっさと騎士館内に入っていく。すでに御者から事情を聞いているらしく、衛兵たちも物珍しそうにはしていたが、ミアリたちを咎めることなく中に入れてくれた。

早足のカルガに引き離されそうになりながら、長々と階段を上り続ける。魔力はまだ十分だが、基本的に体力のないミアリがいいかげん息を切らした頃、二人は目当ての場所に到着した。

「……あの、ちょっと、カルガ様……？」

まさかの思いに思わずカルガを見上げるが、カルガは全く意に介した風がない。制服の襟元を軽く整えると、迷うことなく大扉を守る衛兵たちに声をかけた。

「カルガが来た、と館長閣下にお伝えしてくれ」

ミアリが初めて見るベルール騎士館長室は、外装同様瀟洒な造りだった。

分厚いタペストリーこそユーシウスがいたあの部屋と同じだが、他の調度品は全く違う。飴色に磨き上げられた高価な文机の向こう、翼ある獅子にまたがった大天使ミカエルの絵を背にして、ニークレーンはいかにも不機嫌そうに立っている。

「一体何事だ？　カルガ」

「夜分に大変失礼します、館長閣下」

露骨に迷惑顔のニークレーンに対し、カルガはまず殿懃に一礼した。隣のミアリも、つられて慌てて頭を下げる。

「おい、その例の夢魔の小娘は、拘束も何もしていないのか？　お前の腕は分かっているが、いくらなんでも油断しすぎではないのか」

「ご心配には及びません閣下。こいつはアシュリー補佐官に骨抜きの状態で、私の言うことにもある程度従いますので。それよりも実は今すぐに、この娘のことで閣下にお伝えしなければ

ならないことがございまして」

ニークレーンの懸念を適当に受け流すと、挨拶もそこそこにカルガはいきなり本題に入った。

「実はユーシウス・アシュリーは、この娘を人間にしようとしていたのです」

「……なんだと？」

その報告は受けていなかったらしく、さすがのニークレーンも驚いた顔をした。

「この娘は、夢魔と人間の混血なのです。ですので普通の夢魔よりも弱く、そのために補佐官閣下を魅了できず、逆にその懐の深さに魅了されてしまったようでして」

「魅了……？　いや、しかし、気のせいか？　やけに美しくなったようだが……淫欲公の眷属は、魅力がすなわち悪魔としての能力を表すはずだぞ」

ニークレーンの眼が好色な輝きを帯びる。ぞっとして、思わず半歩下がってしまったミアリの前に、カルガはさり気なく体をずらした。

「そうですか？　閣下がお気に留めるほどのことはありませんよ。……そんなことより」

軽くあごを引き、カルガはおもむろに意外な話を始めた。

「……補佐官閣下は、悪魔をただ倒すだけでなく、救おうとしていました」

「救う？　馬鹿な。寝言は寝て言え」

時刻のせいか、ニークレーンは実際に小さくあくびすらして見せたが、カルガは動じない。

「ええ、確かに寝言です。夢魔に悪夢でも見せられた、としか思えない。しかし、実際にそん

なことができるなら……、これは偉大な功績に成り得ます」

思わせぶりな言い方に、ニークレーンがぴくりと反応した。特に「偉大な功績」あたりで。

「魔界七大公の代替わりとやらのために、またあちこちで騒ぎが起こっているようですが、なにせルマリアは広大です。悪魔退治で名を上げようとする者たちは数多く、単純に戦績を競うのは効率的とは言えません」

ニークレーンの顔色をうかがいながら、カルガはことさらに扇動的な物言いをした。

「特にあなたは、いずれこの帝国の王を目指そうという方だ。悪魔退治に雑魚どもが血道を上げている間に、アシュリーを利用して、地位と権力のある者にしかできぬ奇跡を起こしてみませんか。人はみな美しい夢物語に弱いものですからね……お前も協力してくれるよな？　ミアリ」

いきなり声をかけられたミアリは、あせりながらも話に乗った。

「わ、私、ユーシウス様のなさることなら、どんなことでも耐えてみせます。人間になれるようにがんばります!!」

やる気を示すべく、ミアリは威勢良く拳を握った。

「ですから、ベルール館長閣下、お願いです。ユーシウス様を助けてください、あの方は悪魔なんかじゃありません!!　あのお優しさ、気高さは、むしろ天使と言っても差し支えのないぐらい……!!」

「その天使のような男は、脱獄を企てたようだな。牢を破ろうとし、異常に気づいて駆けつけた兵士たちにもその事実を否定しなかったようだ」

熱弁を振るうミアリの胸元が揺れる様をじろじろ見ながら、ニークレーンは彼女の台詞を邪魔した。

「……！　違います!!」

落ち着き払ったニークレーンの言葉を、カルガが強くさえぎった。

「牢を破ろうとしたのは、愚かにも補佐官閣下を想って暴走したこのミアリです。なあミアリ？」

「は、はい、そうです、でもそれもユーシウス様のことを想うからこそです！　悪魔である私をここまで」

「分かったカルガ。計画を変えよう」

再度ミアリの台詞を阻み、ニークレーンはあくび交じりに言った。

「最早異端審問の必要もあるまい。悪魔使いのアシュリーは明日、火刑に処す」

「!!」

絶句する二人を見下ろす猛禽類のような眼が、愉悦に歪んだ。

「貴族も民衆も、美しい夢物語と同時に残酷な娯楽を求めている。悪名高い悪魔騎士が焼かれる様は、さぞかし彼らを楽しませ、私への評価を上げてくれるだろう」

「……恐れながら!!」

たちどころに言い返そうとしたカルガに、ニークレーンはにやりと笑う。

「安心しろ、カルガ。お前とその、私の姿を真似てくだらんことをしてくれた夢魔の小娘も一緒だ」

こうなることを予測していたかのように、武装した騎士たちがぞろぞろと室内に入ってくる。いかに練度が低かろうが、この人数は脅威だ。

「カ、カルガ様……」

怯えるミアリの手をカルガが握ってくれた。だがその手の平には、じっとりと冷たい汗がにじんでいた。

「貴様が私の身辺をこそこそと嗅ぎ回っていることに、気づいていないとでも思っていたのか？　大方私のことも、告発しようと狙っていたのだろう？」

兄妹のように身を寄せ合う二人を見つめ、ニークレーンは優しい口調で告げた。

「多少は使えるかと思って生かしておけば、バディスの山猿がいい気になったものだな。愛しい元上官と一緒に、仲良く灰にしてやろう」

抜けるような青空から降り注ぐ真昼の日差しが、レティシア中央部にある広場を余すところ

なく照らし出している。

楕円形の広場の中央には石壇がしつらえられており、国からの重大な発表、各種の祭事など、様々な催し物に使われていた。本日も大勢が壇の前に押し寄せているが、異様なほど立ち込める熱気にはどこか暗い翳りがあった。

「もったいないねえ、あんなにきれいな方なのに」

「ばっか、悪魔ってのはきれいなもんなんだよ。ほら、あっちの女のほうだって、めちゃくちゃ美人じゃねえか」

「あいつ、この間娼館で俺を殴った奴！　くそ、悪魔の仲間だったのか!!　……おい、押すな、ここは俺が取ったんだぞ!!」

壇上の柱に縛りつけられた三人の罪人を見上げ、詰めかけた人々は好き放題にしゃべっている。欲望を剝き出しにしたその姿を、壇上からミアリは震えながら見下ろしていた。

庶民にとって、処刑はまたとない見世物だ。一番いい席を取ろうと、殴り合いまであちこちで起こっている。

高台に用意された特別席に座った貴族たちはその点優雅なものだが、扇の蔭でささやき合う彼らの瞳は惨劇への期待にきらめいている。夜毎繰り返されるらんちき騒ぎに飽きた貴族たちにとっても、何かと噂の悪魔騎士二派の処刑は心躍る見世物なのだ。

醜い喧噪を縫って、沈痛な声が耳に届いた。

「ミアリ……、すまない」

肌に食い込む縄の痛みに耐えながら首を回せば、ユーシウスが同じようにしてこちらを見ている。

中央にユーシウス、左右にミアリとカルガを配置するような状態で三人はそれぞれ柱に固く縛られていた。手を伸ばせば届く程度の距離なので、ひどい騒音の中でもかろうじて会話が成り立つ。

「しゃ、しゃべらないでください、ユーシウス様……傷が」

彼の姿を見たくて、けれど今は直視するのがつらくて、ミアリは瞳を伏せてしまった。

脱獄の罪を問われたユーシウスは、「悪魔騎士」との呼び名を強調するためなのだろう。点々と血が飛び散った騎士服を乱雑に着せられているが、はだけた胸元からは鞭の傷にくわえ、青紫の打撲痕がいくつも覗いていた。恐ろしくて聞けないのだが、どうやら腕か足を折られているらしく、少し動くだけでも苦しそうな息を吐く。

だが、痛めつけられているのはミアリとカルガも同じだ。特にカルガは、ニークレーンが呼び寄せていた騎士の中に彼を嫌っている者が大勢いたようで、皮肉を口にする余力もないほどぐったりとしている。

ミアリを庇った分まで、彼が殴られたことには気づいていた。可能ならせめてカルガだけでも逃がしてあげたいが、全員術の行使を防ぐための手枷をはめられている。どうにもできない。

「……今さらだろう。それより、君は太陽の光を浴びて平気なのか？」
平静を装って問い返してきたユーシウスに、ミアリは下を向いたまま首を振る。
「ユーシウス様にもらった精気が、まだ残っていますから……朝一番の光でなければ、なんとか……私は、半分人間ですし」
「……そうだな」
今さらの問いであることは二人とも分かっていたが、二人とも口に出さなかった。やや間を置いて、ユーシウスは別の質問をした。
「……そこから、私の精気を吸うのは、無理か」
「……ごめんなさい、無理です……やっぱり、接触しないと」
接触、というひと言に、昨夜彼から精気をもらった際のことを思い出した。
こんな時だというのに、頬が勝手に熱を持つ。唇に蘇る甘い感触に、恐怖が薄らいでいくのが分かった。
初めての口づけ自体より、ユーシウスが自分を逃がそうとしてくれたことが嬉しい。
「お気になさらないで、ユーシウス様。もともと私は、いつ消えてもおかしくない程度の夢魔でしたから……消滅は、ちっとも怖くないです……」
半分は嘘だった。いつだって消滅が怖くて、ひたすら精気を使わないように、アドルニの機嫌を損ねないよう気を配っていた。

だが今は怖くない。ユーシウスと一緒に焼かれるなら、それでいい気がした。
「でも……、私は半分人間でも、死んでも天界には行けないだろうから……、もう、ユーシウス様に会えないのが、つらいです……」
「……ミアリ」
名前を呼んで、それきり声が途絶える。分かっていた。聖騎士である彼が、それ以上の言葉をくれないことは。
だから悪魔らしく、身勝手に続けた。
「――好きです」
一度堰を切った想いは、あふれ出して止まらない。
媚薬の効果でも魅了のせいでも、それ以外の何かのせいでも、もうどうでもいい。
「好きです。好き。好き。ユーシウス様、大好き……」
「……すまない」
頬でも張られたような顔になったユーシウスが、もう一度繰り返す。様々な意味が込められた「すまない」に、ミアリは黙って首を振った。
と、新たなざわめきがあたりに広がった。顔を上げると、広場一杯を満たした民衆を押し退けるようにしながら、先触れが大声で貴人の登場を知らせている。
「静粛に！　ディオール・フォン・ファルバート大司教閣下、ならびにニークレーン・フォ

ン・ファルバート閣下のおなりである!!」

従者に引かせた馬に乗って姿を現したのは、赤毛をなびかせて不敵に笑うニークレーンだった。

半馬身前の馬に乗ったくすんだ金髪の男は非常に落ち着いた印象で、あまり似ていないが名前からしてニークレーンの兄弟なのだろう。大司教という位階に相応しい、強力な法術を帯びた白い法衣と金糸で縫い取られたストールがミアリの眼に痛い。

熱狂がひとまず落ち着いたところを見計らい、ファルバート兄弟が罪人たちに近づいてきた。ディオールと呼ばれた大司教はどうやら足が少し不自由らしく、従者とニークレーンに助けられながら壇上に降り立つ。

「我が教区にてこのような不祥事が起こったことを、誠に遺憾に思う」

穏やかな雰囲気に相応しい、優しい声でディオールが口上を述べ始めた。そこへ、ユーシウスがためらいながら口を挟む。

「大司教閣下……」

直接の上官ではないのだろうが、位は明らかにディオールのほうが上だ。そんな相手を妨害するのはユーシウスの本意ではないだろうが、口上が終われば、火刑が始まってしまう。

「どうか、ミアリとカルガにお情けを。あなたの力で、彼女を人間に……、ぐっ!!」

みなまで言わせず、ニークレーンがその頬を殴り飛ばす。

「兄上に世迷いごとを吹き込むな、穢らわしい!!」

これみよがしな演出に、静まり返っていた民衆がどっと沸く。得意満面のニークレーンを、ミアリは震えながら睨みつけた。

「や、やめて、私のユーシウス様をいじめないで……!!」

「はっ、よく仕込まれたものだな、夢魔のくせに!!」

嘲るように笑ったニークレーンが、今度はミアリに手を伸ばしたのを見てディオールがそっと咎めた。

「やめよ、ニール。この者たちの罰はもう確定している。無用に苦しみを長引かせるのは、我が神の意向に反する。第一いくら悪魔とはいえ、少女の姿をしている者に騎士が無闇に手を上げるな」

「……は」

ち、と見えないように舌を打ち鳴らすニークレーンの眼が、まずミアリを、続いてディオールを刺すように睨んだ。しかし兄であり大司教でもあるディオールの言うことには逆らえないらしく、せいぜい肩を怒らせて場を譲る。

小さなため息を漏らしたディオールは、口上を再開した。

「――畏れ多くもルマリア帝王閣下より騎士の身分を与えられながら、悪魔に魅了された罪人、ユーシウス・アシュリー。その従僕カルガ・ナズル、そして悪魔の娘。浄火がそなたらの罪を

焼き尽くさんことを、心から願う」

淡々と話し終えたディオールの唇が、清めの炎を喚ぶための聖句を唱え始めた。

「聖なるかなケルビエル、猛き神の……」

もうだめだ、とミアリが眼を閉じた瞬間、ディオールが詠唱をやめて眼を見開いた。

魔力を含んだ甘い風が、突然その場に吹き始めたのだ。

最初に反応したのは女たちだった。日頃の鬱憤を晴らすように景気よく拳を突き上げていた女将が、興奮して泣き喚く赤子をあやしていた母親が、作法と好奇心の狭間で態度を決めかねていた伯爵令嬢が、戸惑ったように瞳を揺らす。

「あ、な、なに……？」

「私……、どうしたの……？」

戸惑いの声を上げた彼女たちが、次々にその場にへたり込んだ。そうなれば当然、男たちも慌て始める。

「おい、お前、どうしたんだ!?」

「なんだ、この匂い、毒か!?」

眼前に迫った火刑のことを忘れ、慌てふためく人々の中には異変の原因に気づいた者たちが

いた。聖騎士たちを含めた聖職者たちである。
「静まれ、悪魔だ！」
「この風を吸い込むな、女は魅了されてしまうぞ!!」
そしてミアリだけは、これが誰の仕業であるのか気づいた。
「アドルニ様……、!!」
思わず叫んだミアリの眼の前いっぱいに、アドルニの顔が広がる。かすかな硫黄の臭いが鼻を突いた。
そして次の瞬間、柔らかい感触越しに、新鮮な精気の奔流が流れ込んできた。
「アドルニ……!?」
直接顔を合わせたことはなくても、ユーシウスはミアリの幻術を見ている。ミアリにとって一番近しい男がその唇を奪う様を見つめ、ユーシウスは言葉を失った。
「悪魔だ!!」
血相を変えた騎士たちが騒ぎ出した時には、アドルニはすでにミアリから離れていた。
「ア、アドルニ……、様……？」
唐突な出現に、そして彼との初めての口づけに驚くミアリは、アドルニが己を戒めていた縄を引きちぎってくれたことにもすぐには気づけなかった。だが術を封じる手枷が呆気なく砕かれた音に、はっと我に返る。

「ど、どうして……？　それに、その、力……？」

散々世話になったミアリが言えた義理ではないが、アドルニはけちな低位の夢魔に過ぎない。それがこれだけ大勢の人間を一度に魅了した上に、今、自分に渡された精気の量はどういうことだ。

混乱するミアリの問いに答えず、アドルニは落ち着いた様子でニークレーンのほうを向いた。

「あいつから、強欲公の匂いがする」

命令を求める部下たちを叱咤していたニークレーンの動きが、ぴたりと止まる。騒ぎの中で足元がふらついたのか、従者に支えられているディオールもはっとしたように弟を見た。

「――なにを、馬鹿な」

のっぺりとした無表情になり、そう問いかけてくるニークレーンの顔はどんな怒りの形相よりも恐ろしかった。ミアリなどは思わず謝りたくなってしまったが、アドルニは鋭く切り返す。

「こそこそと人間の中になど隠れていないで出て来たらいかがです、偉大なる強欲公、大悪魔マンモン閣下!!」

その名を呼ばれた瞬間、ぶわり、とどす黒い何かが大柄な体から噴き出した。

正体を言い当てられた悪魔は、本性を隠す力を奪われるのだ。

「違う」
黒い霧状の魔力の紗幕の向こうで、ニークレーンがうめいている。
「違う、私は、私は」
ぐりん、と眼球が上向いた。ほとんど白目を剝いた状態になりながら、うわごとのような言葉を漏らす。
「ワタシ、ワ……」
膝が崩れた。大柄な体が真下に崩れ落ち、黒い霧は逆に彼を離れて上空に凝る。
『しょせんこの程度の器か』
声ならぬ声が、びりびりとミアリの脳内に響いた。頭蓋に突き刺さるような、強力な魔力を帯びた声に、アドルニの魅了に影響されなかった男たちもたまらずしゃがみ込み始める。
『もう少しもつかと思ったが、想像以上にくだらない男だ。分不相応な夢を見た報いを受けるがいい』
侮蔑の言葉を最後に、黒い霧は忽然と消えた。一瞬、場を乾いた静寂が支配する。
「うお、お……」
これで終わりかと思われた瞬間、一時はおとなしくなっていたニークレーンがまたうめき始めた。
「ニール……？」

弟の愛称を呼んだディオールの法衣に、赤い線が走る。
みりみりと音を立てて伸びた長い爪の先で、ニークレーンが兄の胸を斜めになぎ払ったのだ。
小さな悲鳴を上げたディオールが、不自由なほうの足からその場に崩れ落ちる。
「ウオ、オ……」
声もなく見つめるミアリたちの眼の前で、ニークレーンの姿はさらに変わっていく。もともとたくましかった体がみるみるふくらんでいき、着衣を突き破った。その下から覗いた肌には、黒い剛毛がみっしりと生えている。
「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」
見る間に後足で立つ黒い獅子の姿に変じたニークレーンが、高々と咆吼する。血のように赤いたてがみが、激しい叫びにより生じた風に踊っていた。

まるで、ベルールの旗印である獅子のような怪物に変じたニークレーン。
一瞬の間を置いて、広場中で大混乱が始まった。
「悪魔だ！　ベルールの館長は悪魔憑きだったんだ!!」
「逃げろ、殺されるぞ!!」
まだぼんやりしている女たちの腕を摑み、詰めかけた群衆はわっと駆け出した。ニークレー

ンの部下たちも完全に浮き足立っており、あせって馬に乗ろうとして蹴飛ばされた者さえいる。
「た、大変、ユーシウス様っ……、きゃっ!?」
呆然としながらも、ユーシウスに駆け寄ろうとしたミアリの手首をアドルニが摑んだ。この大騒ぎの中だというのに、今まで見たことがないほどその表情は冷静だ。
「魔界七大公交代のどさくさにまぎれ、強欲公はルマリア全土を手中に収めることを狙っていたんだ」
ディオールに襲いかかろうとして、兄の従者たちと戦い始めたニークレーンの変わり果てた姿を眺めて説明してくれる声も、非常に落ち着いている。
「え、でも強欲公は」
「そうだ、今は代替わりの時期じゃない。だからこそ、今計画を進めていたんだろう。他の六公が他のことに気を取られている間なら、ばれる可能性も低いしな」
ちらちらとユーシウスを気にしながらのミアリの質問にも、実に的確に答えてくれる。
「そのために、あえて帝王位からほど遠い、しかし野心だけは強いあの男に狙いを定めたんだ。二人の兄のせいで騎士程度にしかなれない、と不満たらたらだったあの男にな」
「そ、そうなんですか……あの、ごめんなさい、ひとまず放して、先にユーシウス様を助けないと……!!」
今はまだ、ニークレーンだった黒獅子は他の騎士たちとの戦いに夢中だ。だがこのままでは、

いつ巻き込まれるか分からない。

まさかまた、アドルニはユーシウスを見捨てろと言い出すつもりなのか。分け与えられたばかりの精気を使ってどうにか、とさえ考えたところで、ぱっと手が解放された。

突然のことにあたふたするミアリに軽く鼻を鳴らすなり、アドルニがつかつかとユーシウスに近づく。ユーシウスも顔を強張らせたが、逃げ出せる状況ではない。

「!!　やめて……!!」

必死に駆け寄るミアリを尻目に、強い魔力を帯びた手がユーシウスに伸びる。

だがミアリがアドルニの羽に触れるか触れないかのところで、ユーシウスを戒めていた全てが内側から弾けるように消滅した。

「きゃっ!?」

勢い余って転びそうになったミアリを、これまた落ち着いたしぐさでアドルニが支え、すぐに放り出す。

もう一度転びそうになったミアリに、腕を伸ばしてくれたのはユーシウスだった。

「……いささか乱暴だが、礼を言う」

慎重にミアリを立たせながら、ユーシウスが礼を述べる。超高熱で一瞬にして焼き尽くされた縄と手枷が、その肌に薄い火傷を残していた。

「……」

しかしアドルニは何も答えず、ユーシウスにしたのと同じようにカルガの拘束を解いた。
普段ならたっぷり皮肉を効かせたと思われるカルガだったが、ほとんど意識がないようだ。支えを失った長身が、火刑のために用意されていた薪の山を崩しながら壇上に横たわった。
「アドルニ様……？　あ、あの、ありがとうございます……」
理由は不明だが、アドルニが自分たちを助けてくれようとしているのは間違いない。そう思ったミアリが頭を下げても、アドルニは何も答えず、代わりになぜかユーシウスを睨んだ。
「……ひとまずカルガは、私が」
やはり足を折られているらしく、ディオールのように覚束ない足取りでカルガに近づいたユーシウスが元部下を助け起こす。
残った力を振り絞り、法術による介抱をしているユーシウスをちらと一瞥してからアドルニは続けた。
「ルマリアが強欲公のものになる、なんてことになれば、魔界への影響も計り知れない。そのことに気づいた淫欲公は、俺に力を貸してくれた。お前らがおかしな動きをしたおかげで、強欲公の干渉が分かったから、だとさ」
先日ミアリと別れた後、アドルニは魔界に戻ったのだろう。そこで淫欲公の命を受け、魔力を与えられて戻って来てくれたのだ。
「だが、それもここまでだ。強欲公の企みは露見し、俺の役目も終わった」

艶やかな黒髪をかき上げ、アドルニがすっと一歩下がる。
「お前がどじを踏んだおかげで、俺も淫欲公に認めてもらえたよ。だからお前はお前でこっちで勝手にやれ。二度と面を見せるな」
右手で髪の先をいじりながら、突き放すように言うアドルニに胸が一杯になる。自慢話をする時によくする癖が、無性に懐かしかった。
「アドルニ様……、ありがとう、ございます」
「……ふん、言っておくがこれ以上は手を貸さないからな。お前の男がどれだけの奴かは知らないが、ここでやられて終わりじゃ締まらないぜ」
いつもの憎まれ口を叩いたアドルニは、ユーシウスがわずかに表情を和らげたカルガを壇の隅まで引きずっていくのを見た。それからもう一度、ミアリを見た。
「――じゃあな、ミアリ。さよならだ」
きれいに笑ったアドルニの姿は、青空に溶けるように消えた。

アドルニからもたらされた大量の精気のおかげで、ミアリの体調は良くなった。痛めつけられた体も戻り、縛られた跡が少し残っているだけだ。
しかしもちろん、これで終わりではない。

ディオールを守っていた騎士たちをあらかた片付けた黒い獅子は、耳障りな声で叫び続けている。

「貴様ゴトキガナゼ大司教ナノダ!!」

強風を伴う絶叫を浴び、ディオールは優しい面差しの顔を苦しげに歪めている。

「しーがー兄上ナラトモカク、次男デアルダケデ、ナゼ!!　コノ私ガ騎士館長止マリデアルノニ、ナゼ!!」

もうひとりの兄の名を叫びながら、ニークレーンは溜まりに溜まった鬱憤をぶちまけていた。盛り上がった筋肉に包まれた腕が、繰り返し繰り返し兄たちに向かって叩きつけられる。

「ニール、眼を覚ませ……!!　分からないのか、お前は利用されているだけだ……!!」

大司教の座を与えられるだけあって、ディオールは分厚い光の盾を生み出して弟だったものの攻撃に耐えている。だが最初の胸への一撃が効いているのか、明らかに旗色は悪く、このまま押し負けるのは時間の問題だ。

加勢が必要だ。それも、早急に。

「……ユーシウス様……」

震えながら振り返ったミアリに、ユーシウスが近づいてくる。

骨折も法術で治したらしく、足取りに不自然な部分はなくてほっとしたが、つまりは体力を術に変換しただけだ。その顔色は、魔界の月のように青白かった。

「カルガを見てやっていてくれ」
壇上に転がっていたどこかの騎士の剣を拾い上げ、ユーシウスはミアリを見ずに言った。闘志を秘めた若草色の瞳は、まっすぐに怪物と化したニークレーンを見据えている。
「……逃げましょう。だってもう、あなたは」
「……分かっているだろう。私は、ここで逃げ出せるほど賢い男ではないのだ」
補佐官の地位は剝奪されているだろうとか、たぶん騎士でもなくなっているだろうとか。そういう言葉をどれだけ並べたところで、ユーシウスの決意は変えられない。
すでに分かっていたことだったので、ミアリは黙ってユーシウスの手を握った。
「――ミアリ。心配してくれるのはありがたいが、私は……、！」
苦悩の表情で振り返ったユーシウスの唇に、下から吸いつくようにして自分のそれを重ねた。
夢魔としての力を、ミアリはある程度使えるようになっている。
だから、相手から奪うだけでなく、アドルニのように与えることもできる。
「た、ただの、ええと、治癒の一種ですから……気にしないでください。決して、下心がある訳ではないので」
ある程度の精気を分け与えた後、茫然自失状態のユーシウスからぱっと離れてミアリはそう言い訳をした。
「……そう、だな。君はいつも、あのアドルニから口づけで精気を分けてもらっていたのだも

のな。これぐらい、慣れて、いるか」

真っ青だったユーシウスの頬には血の気が差し始めているが、声からはむしろ力が失われている。

「あ、いえ、いつもは手から……いえそのッ、唇からのほうが効率がいいんです！　本当ですよ!?」

下心を見抜かれたのかと動揺したミアリは、慌てて言い訳を追加した。それを聞いたユーシウスは一瞬口元を綻ばせたが、大きく首を振ってニークレーンだったものに向き直る。

「すまないミアリ、礼は後だ！　大司教閣下、助太刀いたします!!」

ミアリから得た精気により、駆け出したその足取りには力が戻っていた。折しも最後の護衛を屠り、ディオールを組み敷こうとしていた黒い獅子がぎろりと眼を剝く。

巨大なあぎとから、人間には聞こえない高さの音が放たれた。石壇の表面が削り取られるような力を持った咆吼にミアリは必死に防御したが、ユーシウスは法術の薄膜で自分を守りつつ、ひと息に距離を詰める。

銀の刃が一閃し、獣の絶叫があたりに鳴り響いた。

黒い獅子の右の前足が斬り飛ばされ、鈍い地響きを立てて転がり落ちる。

「さすがユーシウス様!!」

書類の整理に追われては、嫌味を言われるためだけに呼び出される毎日を送っていたとはと

ても思えない。すばらしい剣の冴えに、ミアリはうっとりしてしまう。

「くッ」

だが、ユーシウスの表情は険しい。

それもそのはず、獅子の右前足は斬られた部分がぼこぼことふくれ上がったかと思うと、あっという間に再生してしまったのだ。

それでもユーシウスの一撃が、獅子に確かな傷を与えたことは間違いなかった。この隙にディオールは黒い獅子の下から抜け出し、ようやく駆けつけてきた騎士と祓魔師の混合部隊に救い出された。

そして救出隊は、もう役目は果たしたとばかりにさっさとこの場を逃げ出してしまった。無論ディオールの身の安全は最優先事項ではあろうが、それを理由に逃げたとしか思えない素早さだった。

「な、なんて人たち……、まだユーシウス様もカルガ様もここにいるのに！　悪魔!!」

本当に騎士たちの質は低いのだ。悪魔より悪魔らしい行動に怒るミアリを尻目に、歯噛みした獅子の、赤く充血した眼がユーシウスを捕らえる。

強欲公に見放されて怪物に変じた挙げ句、眼の上のこぶだった兄をも殺し損ねた憎しみが、黄色く濁った瞳の奥で燃え盛っていた。

「貴様モアノ時、りゅーでぃすト一緒ニ殺シテオクベキダッタ」

怨嗟のこもったつぶやきに、ユーシウスがはっと眼を見開く。ミアリも思わずぎゅっと拳を握り締めた。

「――やはり、貴様が……、悪魔と結託して、スティード様を」

誰もが思っていたことだった。ニークレーンが強欲公に憑かれていた、と分かった時点で決定的になったことではあった。

しかし本人の口から改めて語られた衝撃は強く、ユーシウスは全身をわなわなと震わせている。

「アンナ低級ナ男ガ騎士館長デ、ナゼ私ガタダノ騎士ダッタノダ!!　ヤガテハコノるまりあノ、帝王トナル私ヲ差シ置イテ」

鮫のように二重に牙が並んだ獅子の口から、泡立つ唾液とともに醜い嫉妬と野望が飛び出した。

「キットアノ男モ、悪魔ニ魂ヲ売ッタノダ!!　私ハ間違イヲ正シタダケダ!!　私ハ間違ッテイナイ!　私ハ間違ッテイナイ!!」

「黙れ、黙れ、黙れ黙れ黙れッ!!」

スティードまでも貶めようとする台詞に、ユーシウスはかっと眼を剝いた。その口を閉じさせようと、怒りに任せて再び襲いかかる。

だが黒い獅子は呵々と哄笑し、再生したばかりの腕を振り上げた。

黒い丸太のような豪腕をユーシウスはかろうじて避けたが、彼が立っていた場所の石壇は粉々に破壊された。飛び散った破片を防ごうとしたところを、すかさずもう片方の腕が襲う。

金色の髪が宙を舞った。先程までカルガが縛りつけられていた柱に叩きつけられ、ユーシウスの手から借り物の剣が落ちる。

「ユーシウス様!!」

「……っ、来るな、ミアリ……!!」

顔色を変えるミアリを制し、ユーシウスは折れた柱の残骸に摑まって立ち上がる。吹き飛ばされる瞬間、自ら体を折り曲げて受け身を取ったようだが、唇には血がにじんでいた。

使い慣れた武器がなく、ミアリから補充を受けたとはいえ体も本調子ではない。圧倒的に不利な状況は分かっているだろうに、ユーシウスに手を引く気はなさそうだった。

なんとかしてもう少し精気を、とミアリも先ほどから間合いを計っているのだが、下手に動けば自分が標的になりかねない。逡巡しつつ、じりじりと前進していたのがいけなかったのだろうか。

「ソウ死ニ急グナ。ソノ女モ、スグニ殺シテヤル」

残忍な瞳がミアリをねめつけた。赤黒い分厚い舌がべろり、と下品な舌なめずりをする。

「無論ソノ前ニ、存分ニ楽シマセテモラッテカラダ。夢魔ヲ自分ノ女ニスルトハ、騎士ガドウダ、トアレダケワメイテオイテ、貴様モショセンハタダノ男トイウ訳ダナ」

悪魔に眼をつけられるほどのニークレーンの強欲は、帝王の座だけに留まらないようだ。あけすけな欲望を帯びた視線に、ミアリはぞっと全身総毛立った。

「黙れ……!!」

薄汚い言葉を断ち割るように叫ぶユーシウスの全身が、清浄な光に包まれた。

「きゃっ……!?」

キア茶を沸かす時などとは比べものにならない、強力な法術の気配がミアリまで竦ませる。ユーシウスも顔を歪ませ、掲げた右手を左手で押えつけるようにしながら聖句を唱えた。

「聖なるかな、聖なるかなサンダルフォン、大いなる神の雷よ……!!」

天使サンダルフォンが言葉を発するたびに放たれるという稲妻が、雨あられと黒い獅子に降り注ぐ。

広場中に轟き渡る轟音と光の奔流。間断なく襲い来る雷の乱舞は、術者のユーシウスそのものだ。

近づく者全てを打ち砕く、厳しく冷たい美しさ。それゆえに、ミアリは眼が離せない。

「ミアリ、他の者も、私の声が聞こえている者は今のうちに逃げろ!!」

激しい雷の音を縫って、ユーシウスの声が響いた。その声にはっと我に返ったミアリだが、

「で、でも、これだけやれば」

降り注ぐ光の雨が紗幕の役目を果たし、黒い獅子の姿は全く見えない。これで終わりではな

いか、とミアリは思ったのだが、ユーシウスの表情は依然として厳しい。
「だめだ、この程度では足止めにしかならない。せめて君だけでも逃げるんだ!!」
叫ぶユーシウスの声に、獅子の咆吼が重なった。
途端に激しい雷は霧散し、しゅうしゅうと白煙を吹く獣の姿が再び現れる。
見た目は派手な雷光だったが、術者であるユーシウスの消耗が激しいせいだろう。獅子の強靱な皮膚を裂くには至っておらず、あちこち火傷はしているが、さほどの深手ではなさそうだ。
数多くの夢魔たちを返り討ちにしてきたユーシウスであるが、そもそも夢魔は魔界第二層という浅い場所に住んでおり、悪魔の中でも位が低い。魔界第四層に住まう強欲公が憑いていたニークレーンの相手を、単独でこなすのはやはり荷が重い様子だ。
「弱イ、弱イナあしゅりー!! ショセン人間ノ騎士ノ力ナドコンナモノカ!!」
先が焦げたたてがみを風になびかせ、黒い獅子が勝ち誇る。
対照的に、悔しげに唇を噛んだユーシウスはついにその場に膝を突いた。
「ユーシウス様……!」
「逃げろと、言っているだろうが……!!」
思わず駆け寄ろうとしたミアリの腕を、容赦のない力が摑んだ。
ユーシウスに制されたのかと思ったがそうではなかった。その巨体からは信じられないような速度で移動してきた、黒い獅子だ。

「きゃあっ……!?」
「ミアリ!?」
色を失ったユーシウスは、その勢いで立ち上がった。だがニークレーンの腕の先、両手首を摑まれ軽々とぶら下げられたミアリを見た瞬間、ためらいが彼の反応を鈍らせた。
――このまま攻撃すれば、ミアリまで巻き込みかねない。
「ハハハ、ソンナニコノ半魔ガ心配カ!!」
ニークレーンはその隙を見逃さない。太い足を振り上げ、上から押し潰すようにしてユーシウスを踏みつける。
「あぐっ……!!」
「ユーシウス様!!」
一度折られたほうの足を、ニークレーンだった獣はぐりぐりと踏みつけ続けた。
骨折自体は法術で治療済みといえども、やはりある程度の時間をかけなければ完全に回復はしない。骨が軋む生々しい音が聞こえ、ミアリは半狂乱になって暴れた。
「は、放して、このッ……!!」
ユーシウスの鎖を切った時と同じ要領で、手の平に魔力を集める。せめて一撃を食らわせようともがくミアリの体が、いきなり解放された。
「きゃあッ!?」

驚きにせっかく集めた魔力が霧散する。石壇の上に落下する寸前、ぐいっと襟首を摑まれ、再び空中に吊り上げられた。

「ううっ……!!」

全体重を首で支える体勢になり、息が詰まる。つくづくと半端な肉体が恨めしい。アドルニから与えられた精気を使い、わずかな浮力を生み出して対抗するものの、長くはもたないのは明白。

「やめろ、ミアリは悪魔だ、貴様の仲間だろう、彼女に手を出すな……!!」

激痛に耐えながら叫ぶユーシウスとミアリを交互に眺め、ニークレーンは嘲笑した。

「苦シイカ、悔シイカ、あしゅりー。ダガ貴様ニハ何モデキナイ。ショセン人間ノ騎士ノ力ナドコンナモノダ!!」

騎士。ユーシウスを支える誇り。

首元を押さえてどうにか息を継ぎながら、ミアリはその言葉にぴくりと反応した。

「規律ヲ振リカザス高慢ナ青二才、貴様ニ誰ガ救エタ？　娼婦ノ血ヲ引ク母親ハ早々ニクタバリ、父親ハイマダ田舎ニ引キコモッテ酒ビタリ!!　敬愛スル上官ハバラバラニ引キ裂カレ、ロクニ墓モ作レナカッタラシイデハナイカ!!」

対して、ユーシウスは無反応だった。今もなおニークレーンに執拗に踏みつけられているのに、その場に縫いつけられたように無反応。

いや、違う。青ざめた唇が動いている。やめろ。そう言っている。

おそらくニークレーンも気づいている。だからこそ、彼はますます愉快そうに笑って畳みかけた。

「惚レタ女モ、部下モ、貴様ノセイデ死ヌノダ。貴様ニ関ワッタバカリニ、ミナミジメニ死ンデイク!!」

ユーシウスに代わり、ミアリが「やめて」と言ってあげたかった。だが興奮した獅子の太い指は、今や直接彼女の喉元を絞め上げ始めている。

「やめろ！　私の命ならくれてやる、ミアリとカルガだけは……、ぐっ!!」

かすれ声で叫んだユーシウスの喉を、獅子のもう片方の腕が摑み上げた。高々と持ち上げられた二人が必死に互いに手を伸ばす様を、喜悦に淀んだ黄色い瞳が見つめている。

「人間ノ貴様ニモウ用ハナイ。悔シイナラ、悪魔ノ力ヲ見セレバドウダ!?」

いたぶるためでしかない挑発に、ユーシウスが苦しげに瞳を見開く。彼に覆い被さるようにして、獅子が咆吼した。

「今ノ貴様ニハ何モデキナイ、ソレハモウ十分ニ分カッタダロウ！　役ニモ立タナイ自尊心ダケハ立派ナ能ナシメ!!」

びくん、とユーシウスが震えた。

「――何もできない、能なし？」

乾いた声での復唱に、ニークレーンはいよいよ調子に乗って、
「ソウダ、貴様ハ努力シテイルツモリニナッテイルダケノ、タダノ能ナシダ!!　己ヒトリサエ救エヌ騎士ニ、何ノ価値ガアル!?　無力ヲ悟リ、悪魔ニ魂ヲ売ッタ祖先ヲ見習エバドウダ!?」
「私、は」
けぶる若草色の眼は、何を見ているのだろう。首を絞められ続けたことで錯乱しているのか、ここではないどこかを見ているような眼をしながら、ユーシウスがまた獅子の言葉を復唱する。
「何の、価値も、ない、騎士？　……こんなに、がんばってきた、のに？」
「結果ニ結ビツカナイ努力ニ何ノ意味ガアルカ!!　コノ役立タズノ能ナシガ!!」
震える問いかけを叩き潰す愉悦も露に、獅子は大口を開けて下品な笑い声を立てた。
それに応じるユーシウスの口調はひどく幼く、瞳はニークレーンではない誰かに向けられている。
「役に、立ちません、でした、か。がんばったのに、もう、いらないのです、か」
「そ、そんな訳っ……！」
黙っていられず、叫ぼうとするミアリの声も、暴風のようなニークレーンの断定にはかなくかき消されてしまう。
「アア、イラナイ！　誰モ貴様ナド必要トシテイナイ!!」
絶対的な否定を浴びて、ユーシウスがまたびくん、と体を震わせる。

「人間ノ騎士ニハ何モデキナイ!!　悪魔ノ力ヲ借リネバ、貴様ニハ誰ヒトリ救エナイ!!」
若草色の瞳が、ゆっくりと閉じられた。

「きゃあっ……!?」
いきなりニークレーンが手を放したので、ミアリはユーシウスと一緒にその場に落下した。
絞め上げられ続けた首の痛みと打撲の衝撃に、満足に声も出ない。体を丸め、必死に苦痛をやり過ごそうとしているミアリの横で、同じように落下したはずのユーシウスが立ち上がった。
「ごほっ、ユーシウス様……？」
骨も砕けよとばかりに踏まれていたはずの足は、何事もなかったように彼を支えている。
ニークレーンだった悪魔に負わされた傷などなかったかのような、不自然なほどに自然な立ち姿。傷を無視したような姿、と表現するのがより正しいかもしれない。
と、その身を包んだぼろぼろの制服から、突然薄い煙が上がった。
「えっ？」
まるでミアリが欲望に負けて、ユーシウスに抱きついた時のようだ。聖別された騎士服が、主を拒むように煙を上げている。
だがユーシウスがうるさそうに軽く頭を振った瞬間、青白い火花が煙を焼き払った。

ばちっ、と乾いた音は、初対面の際に探査（サーチ）の術を祓（はら）った時と同じ。
――悪魔除けの法術が彼を拒み、その術を彼が祓った？　……なぜ？
「ユーシウス様……、ですよ、ね……？」
震える声でユーシウスの名を呼びながら、ミアリは我知らずぼろぼろになったメイド服の前をかき合わせるようにしてしまう。
寒いのだ。
まだ陽（ひ）は高い。黒い獅子が吠（ほ）えるたびに起こす暴風も今はやんでいるのに、聖句など唱えた様子もないのに。ユーシウスを中心にして、冷気が環状に広がっていく。
「あの……、ユーシウス、さ、ま……？」
呼びかけても、ユーシウスの答えはない。
おまけにその姿はどんどん遠ざかっていく。
「あれ……？」
彼が動いた様子は全くないのに、どうしてだろう。不思議に思った瞬間、原因が分かった。
ユーシウスじゃない。
ミアリ自身が後ずさっているのだ。
ユーシウスから離れたいなんて、これまで思ったことがなかったのに。
「キ、サ、マ……イヤ、アナタ、ハ……」

怯えを隠すように、大きく口を開けた黒い獅子も同じだった。いかに虚勢を張ろうとも、耳が垂れ、尻尾を下げたその姿はまるで大きな子猫である。

そんな彼に向かって、ユーシウスが静かに一歩踏み出した。

次の瞬間、黒い獅子の頭部がぼん、と妙に可愛い音を立てて蒸発した。

何が起こったのか、すぐにはミアリも分からなかった。

首から大量の血をまき散らしながら、広場に倒れた獅子の体が乾いた砂になって崩れ落ちていく。悪魔に翻弄された人間の哀れな末路は衝撃的なもののはずなのに、全てが非現実的すぎて心に響かない。

気づけばあたりには人の気配がない。あれだけ広場に満ちていた民衆と貴族は姿を消し、ディオールを助けに来た騎士たちもいずこかへ消えた現在、残っているのは気絶している者か死体だけだ。

正気の者は、今この場には残れないのだろう。いつしか底冷えするような冷気に支配された広場には、死に等しい静寂が充満している。

「夢……？　それとも、悪夢……？」

私ったら夢魔のくせに、と無理やり思い込もうとしてみたが無駄だった。ユーシウスから放

たれる凍りつくような魔力は、夢の産物ではない。

――夢。

ユーシウスの夢に侵入した時のことを、ミアリは唐突に思い出した。

全てが凍てついた世界。氷に半身を囚われたユーシウス。

あの光景はいつかアドルニに聞いた、魔界最下層の……

「そ、そんなはず、ないわ……アドルニ様の言うことには、結構間違いがあるって……」

「時は満ちたようだな」

ユーシウスの声がして、ミアリははっと眼を上げた。いつの間にか、すぐ側にユーシウスが立っている。

「……誰……？」

肉体はユーシウスのものに間違いない。

けれど、ミアリを魅了した青年は、こんな乾ききった眼をしていない。

「ユーシウス・アシュリーではないことは分かっても、私が誰かは分からないのか」

アドルニやカルガが同じことを言えば、さぞかし馬鹿にされたように聞こえただろう。ミアリも慌てて謝っただろうが、眼の前の青年の声音に責める響きはなく、単に事実を形にしたという風だった。

だからこそ怖い。

そんな素振りなど全く見せなくても、彼の気まぐれひとつであのニークレーンの成れの果てのように、簡単に消滅させられる。理屈抜きでそう分かってしまう。

「あなたは……、ユ、ユーシウス様の、祖先と、交わった、悪魔……？」

ひどくなる一方の寒さに震えながら問うと、ユーシウスの姿をした悪魔が一瞬かすかに笑んだ。何か大切なものを諦めたような、奇妙に穏やかな笑み。

「この男の祖先と、私は交わってなどいない。そもそも私と交わり、子を成せるような人間がいるとは思えない」

感情のない声で彼は答える。一見冷静そうに見えて、実はかなり熱くなりやすいユーシウスと比べるとひどく違和感があった。

「ただ、取引をしただけだ。何十代か先、お前の子孫の中には悪魔の力を借りたとの悪評に耐え抜き、魂を磨き上げる者が出るだろう」

賢者のように、予言者のように、あるいは神のように、遠い未来を見透かすような眼をして悪魔は語る。きっとその昔、ユーシウスの祖先にもこのように語りかけたのだろう。

「そしてその心が黒く染まった時――お前の子孫は、私の肉の器となるだろう」

淡々とした説明を聞き終えたミアリは、明かされた事実にただただ愕然としていた。

祓魔師が何も分からなかったのも当然だ。

ユーシウスの不幸は、悪魔の血を引いたことではなかったのだ。

祖先に売られたことだ。
目先の勲功を得るために、彼らは子孫を犠牲にしたのだ。
――だが、この悪魔は、ユーシウスの肉体を得て何をしたいのだろう。
そもそもなぜ、肉体を必要とするのだろう。
「で、でも、あなたほどの悪魔なら、幽星体（アストラル）で、十分、じゃ……」
中途半端な肉体が、あらゆる足枷（あしかせ）になっているミアリからすれば当然の疑問だった。そんな契約は必要ないのでは、との問いに、ユーシウスの肉体に宿った悪魔は語る。
「私の幽星体（アストラル）は、魔界の底に神自らの手によって封じられているのだ。だから神の子である人間の器を借りなければ、魔界の外に出られない。そして私を受け入れるほどの器は、誰よりも美しく、誰よりも清らかで、誰よりも優れ、それゆえの傲（おご）りを身の内で育てていなければならない」
若草色の瞳が天を向いた。
「遠い昔、私がそうだったように」
魔界の底。
神自らが封印。
誰よりも美しく、誰よりも清らかで、誰よりも優れ、それゆえの傲りを身の内で育てていた。
かくんとミアリの膝が折れた。信じられない、だけど。

あの時夢で見たユーシウスの背には、確かに十二枚の翼があったのだ。下位の天使なら二枚しかない霊位を示す翼を、それだけの数持てたのは。

「傲慢公……、……魔王、閣下……？」

かつて天界で誰よりも輝ける存在だったとされる、「明けの明星」とも「暁の子」とも呼ばれた大天使。その際立った才覚に傲り、自分に同調した天使たちを引き連れて神に弓引き、魔界に追放された最初の堕天使。

すなわち最初の悪魔である、魔界の王。七大公の中でただ一人、代替わりをしたことがない……必要もなければ代わりもきかない、唯一絶対なる「悲しみの王土の大帝」。

ユーシウスの姿をした悪魔は、「そうだ」とも「違う」とも答えなかった。その代わり、視線を遠くに投げた。

反射的にミアリが見つめた方向にあったのは、壮麗な宮殿。

ルマリア帝国の要、帝王がいます彼の居城だ。

「何をする」

自分でも、なんでそんなことをしたのか分からない。しかし気づいた時には、ミアリはユーシウスの姿をした悪魔の腕を摑んでいた。

「だめ、です」

「何がだ」

「だめ……、ユーシウス様の、体を使って、悪いことを、し、しないで、ください」
魔力の放出を察知した訳ではなかった。事実、さっきニークレーンだった悪魔の頭部が吹き飛ばされた時のことは、いまだに何がどうなったのかさっぱり不明である。
だが、日数こそ少ないけれど、ミアリはこれまでひたむきにユーシウスを見つめて過ごしてきた。これだけ近くで見ていれば、微妙な差異は感知できるのだ。
「人に害を及ぼすな、と言いたいのか？　お前も、半分とはいえ悪魔だろう」
淡々とした言葉に、ミアリは首を振る。
「ひ、人のことなんか、知りません。悪魔ですから。どうでもいいです」
ユーシウスはもちろん、たぶん今ならカルガなどでも、誰かに傷つけられるのは嫌だと思うかもしれない。
けれど今、ミアリがこの悪魔を止めたいのはそういう理由ではない。
「だって、もしも王城なんかを壊したら、ユーシウス様の責任になってしまいますもの!!」
実にわがままな発言にも、ユーシウスの姿をした悪魔は冷静に応じる。
「ユーシウスはもういない。私に肉体を乗っ取られ、消滅した」
「嘘です」
語尾に被せるような勢いで、ミアリは反論した。
「だってまだ、あなたを見てどきどきします。これはユーシウス様の魅了（チャーム）です。絶対にそうで

す。間違いありません」

「……単に姿が同じだけだからではないのか、それは」

さすがに呆れた様子で悪魔は言い返してきた。その言い方が本物のユーシウスを思い出させ、一気に恋心が募る。我慢できない。

欲望のまま、手を伸ばした。正面からユーシウスの肉体に抱きつき、さっきもしたように吸いつくようにして唇に唇を押しつける。

だが、今度は与えるためではない。

奪うためだ。

この悪魔の精気を根こそぎ吸い取ってしまえば、本体のところに戻らざるを得なくなり……ユーシウスを、取り返せるかもしれない。

「こんなことをしても無駄だ。私はずっと、この時を待っていたのだ」

悪魔は、ミアリの口づけを避けようともしなかった。一心に精気を吸う彼女にされるに任せ、じっと立っている。

「退け。私は今度こそ神を滅ぼす。だからもうよすのだ。神をも脅かす身からこれ以上精気を吸うと、お前がもたないぞ」

ユーシウスの声で恬淡と告げられた言葉は事実だった。暗く冷たい水底を思わせる冷え冷えとした魔力は、貪っても貪っても底が見えない。

存在を保つためには最低限の精気が必要だが、同時に一度に得られる精気の量にも限界がある。これ以上摂取を続ければ、ミアリという器が破裂してしまうことは感じ取れた。

けれど諦める訳にはいかないのだ。

なぜなら、ミアリには分かるのだ。ユーシウスは、ミアリが恋した美味なる不器用な魂は、まだこの肉体の奥に留まっている。

――そうだ、ユーシウスの魂はいわば眠っている状態なのだ。

――感謝します、お母さん。私に悪魔の力を与えてくれて。

――感謝します、お父さん。私に人の心を与えてくれて。

「……娘……？」

ユーシウスの声での不審そうな呼びかけに応じず、さらに精気を吸い取っていく。

その身の内を駆け巡る精気が、ついには一対の蝙蝠の羽として背に顕現した時――ユーシウスの腕の中に肉体を残し、ミアリの幽星体は彼の夢の中にいた。

そこは、小さな屋敷の中だった。最低限度の調度品は置かれているものの、昼間から緞帳に閉ざされた室内は薄暗く寒々しい。

切り揃えた金色の髪と利発そうな若草色の瞳を持った幼い少年が、母親らしき女性のドレス

にすがり、声を殺して泣いている。聞くまでもなく、これは子供時代のユーシウスだ。
「分かったでしょう？　もう二度と、外へ遊びに行ってはいけませんよ」
どこか寂しげな美貌の母親のたしなめに、ユーシウス少年は一瞬身を震わせた。だが彼は、気丈に顔を上げて泣きながら訴える。
「な、なんでみんな、僕を仲間外れにするんですか？　僕は何も悪いことなんかしてない、ただ挨拶をしただけで……！」
「……挨拶をしたのが悪かったのですよ。アシュリー家の者だと、分かってしまったから」
「どうして!?　どうしてアシュリー家の子だと、いじめられるんですか!?」
理不尽を訴える息子を見る、母の瞳が悲しく曇った。言葉を選ぶ間を置いた後、彼女は結局、こう言った。
「……あなたが、人を傷つける定めを背負って生まれてきたからですよ。さあ、泣かないで、おやつにしましょうね。母の手作りのお菓子は好きでしょう？」

「聖職者が誰も来られないとは、どういうことですか!?」
場所は同じ家の中。十二、三歳というところか、まだ声変わりもしていないユーシウスが、法術により壁に映し出された男に対して叫んでいる。
「確かに我が家は貧しく、寄進も最低限度しかできない!!　……教会にもほとんど行けていな

いが、その理由はあなた方もご存じのはずだ!!　とにかく、聖職者が誰もいなくては、母上を天の国へ送って差し上げられない!!　お願いします、寄付金はどうにかしますから……!!」

黒い喪服に身を包んだ少年の、必死の懇願。それを白い法衣に身を包んだ、どこかの教会の人間と思しき男が一笑に付す。

「金の問題ではないことは分かっているはずだ。お生憎ですが、悪魔憑きは火刑に処するのが世の倣い。それならば、いくらでも手をお貸ししましょう」

したり顔の映像がぶつりと消える。

映像が消えた壁に、ユーシウスが声もなく拳を叩きつけた。

「いいかげん、御酒はおやめになればどうですか、父上」

渋面でしゃべるその声は、ミアリのよく知るユーシウスと同じだった。まだ十五歳ほどに見えたが、発する声も口調の厳しさも今のユーシウスそのものだ。

場所は少し移り、同じ家の中の居間だと思われた。暗い室内を赤々と照らし出す暖炉の前で、壮年の男が蒸留酒の瓶を抱いて寝椅子に寝そべっている。

「母親の命日ぐらい控えろ、とでも言いたいのか？」

ユーシウスを振り返りもせず、気怠げに言い返すのは白髪交じりの金髪の男。顔立ちは息子によく似ているが、酒に濁ったその瞳は淀み、気高さは微塵も感じられない。

「……それが分かっていながら……!!」

かっとなりかけたユーシウスは、唇を引き結んで黙り込んだ。その父は瓶から一口、直接蒸留酒をあおると、

「お前の母親だって、悪魔憑きのアシュリー家に嫁いだ時点で、まともな葬儀などしてもらえないのは分かっていたはずだ。もっとも貧乏貴族の、おまけに娼婦に産ませた娘が、まともな結婚などできるはずもないがな……」

みなまで言わせず、ユーシウスは父の前に回り込むと、いきなり深々と頭を下げた。

「――昔話はもう結構。父上、長い間お世話になりました。私は明日の朝、この家を出て行きます」

「出て行ってどうするんだ。まさか聖職者になって、母の葬儀でも執り行うつもりか？」

さほど驚いた風もなく、聞き返してきた父にユーシウスも淡々と答えた。

「聖職者には違いありませんね。私は聖騎士になります。……祖先がそうしたように、かつて父上が教えてくださった剣で身を立て、我が家の恥を雪いでご覧にいれます!!」

「……ふん、剣など教えたか……？　記憶にないな。きっとその時は、今よりさらに酔っていたんだろう」

ユーシウスの父はそれだけ言って、もう一口酒をあおった。

先日見た覚えのある、大天使ミカエルの絵と瀟洒な赤煉瓦造りの壁が特徴的な、ベルール騎士館長室。文机にゆったりと腰掛けた短い黒髪の男を、現在とほぼ同年代になったユーシウスが睨んでいる。

「失礼ながら、リューディス閣下がなぜ私を指名されたのか、まずはそれを説明していただきたく存じます」

「お前が俺より低い家の出の騎士だからだよ、アシュリー」

あっけらかんと言ってのけ、太い笑みを見せる男。立ち上がったスティード・リューディスが、呆気に取られた様子のユーシウスの頭を軽く叩く。

「そう突っ張るなって。名家揃いのベルール騎士館内では浮いている者同士、仲良くやろうぜ、補佐官閣下」

同じ室内。同じ絵、同じ壁。

違っているのは文机に腰掛けているのが、スティードではなくニークレーンだということ。

「アシュリー、いいかげんリューディスのことは忘れろ。貴様が仕えるべき上官はこの私だ。騎士は上官に従うものなのだろう？」

直立不動のユーシウスを座ったまま見上げ、ニークレーンがにやにやと笑った。

「心配せずとも、補佐官の任は解かずにおいてやる。あの間抜けの死と、貴様の例の噂は無関

係のようだからな。気の毒に、貴様が悪魔の扱いを教えておいてやれば、あいつもあんな死に方をせずにすんだだろうに」

げっそりと頬をこけさせたユーシウスは、ひと言も言い返さずただ姿勢よく立っている。

瞳の奥、今にもはち切れそうな憎しみの火を抑えつけて、必死にじっと立っている。

「やめて」

いつしか頬から涙を伝わせていたミアリは、たまらなくなってつぶやいた。

「もうやめて。もうこれ以上、ユーシウス様をいじめないで……！」

しかし願いも虚しく、一層くるくるとめまぐるしく、思い出の場面は切り替わっていく。

「私の体を焼いた奴らが、あなたがなりたがっている騎士どもの正体ですよ」

はだけた上着の隙間から、紫色に変色した火傷の跡をさらしてカルガが笑う。

「騎士様、いつも背筋を伸ばして生きるのは苦しいでしょう？　私があなたに、本当の幸せを教えて差し上げますわ」

赤紫の髪をなびかせ、毒々しくも微笑む高位の夢魔。白い太股にぽつりと浮かんだ黒子が、星のように妖しく光って見える。

「ユーシウス、お前はすごいな。お前ならきっと、俺より立派な騎士館長になれるだろう」

しみじみと語るスティード。
「ユーシウス、そうだ、うまいぞ。……我が家は先祖伝来騎士の家系だ。その誇りを、叶うならお前にも忘れないでほしい」
細身の剣を片手に、切なげにつぶやくユーシウスの父。
「ユーシウス、ごめんなさいね。母は弱くて、あなたを守ってあげられないの。ごめんなさいね、ごめんなさいね……」
息子目掛けて投げつけられた石を受け、切れた頬に一筋の血をにじませて繰り返すユーシウスの母。

「もうやめて……！」
叫んだ瞬間、弾け飛ぶように全ての場面が消える。
気がつくと真っ黒な空間の中に、ミアリは現在のユーシウスと向かい合って立っていた。

天も地もない。風も光もない。無の空間のただ中に、ユーシウスと二人きり。
いつしかミアリは初めて彼と会った時と同じ、灰色の外套を身に着けていた。
「ユーシウス、様……」

ぽろぽろと泣いているミアリに、白い騎士服もまぶしいユーシウスが微笑みかけてくる。まるで天使のような、曇りのないきれいな笑顔だった。

その笑顔のまま、彼はすっと手を差し出してくる。

「私と堕ちよう、ミアリ」

思わぬ言葉に固まるミアリにも、ユーシウスは笑みを絶やさない。

「もう、肩肘を張って生きるのは疲れたんだ。君も見てきただろう？　私はがんばったんだ。ずっと、ずっとがんばったんだ」

ずっと、ずっと。報われることなく、ずっと。

「だからもう、がんばりたくないんだ。もう疲れたんだ。君を抱きしめて、口づけをする以外のことをしたくないんだ。もう疲れたんだ。本当はずっと前から、疲れきっていたんだ」

知っていた。初めて出会ったその日から、常にぴんと背筋を伸ばしているユーシウスの姿はいかにも生きづらそうだった。

そういう人間こそ堕落しやすいのだから、たまには甘い物でも食べて適当に堕落したほうがいい。アドルニの受け売りで、そんな風に勧めたことも覚えている。

ユーシウスの望みどおりに人間になったところで、ショウカンとやらにやられるかもしれないのだ。

自ら堕落を願うこの手さえ取ってしまえば、二人魔界の隅で、小石でも数えながら永遠に一

緒にいられる。それは正しく、悪魔的な誘惑だった。

「だめです」

しかし、ミアリはぐいっと涙を拭ってユーシウスの誘いを蹴った。

「わ、私は、悪魔でも天使でもない、全然融通が利かなくて怒りっぽくて、お菓子が大好きなくせに一生懸命お菓子を我慢しているユーシウス様が、大好きです！」

大きく声を張り上げた途端、背中でばさりと力強い音がする。魔王の精気を受けて育った羽が、ミアリを鼓舞するように虚無の空間を空打ちした。

「中途半端は、つらいです。私にもそれはよく分かります」

人間にも悪魔にもなれず、アドルニが来るのを待ちながらひとり膝を抱える毎日。抜け出したいとずっと思っていた。

けれど抜け出してしまったら、ユーシウスとの出会いはなかった。

「ですけど、だからといって楽なほうに流れるなんて、あなたらしくない……！　それならいっそ、悪魔王になって、神に反逆するぐらいのことを言ってください！　そうでなければ、私の好きなユーシウス様じゃない……!!」

アメジストのように輝く髪を振り乱し、人間の男の誘惑を拒否する悪魔の少女。

まるで原罪を逆転させたような構図は、ユーシウスが天使の笑みをかなぐり捨てて、こう叫んだことにより粉々に砕け散った。

「――馬鹿者ッ、私は聖騎士だぞ!?　いくらなんでも、そんなことができるか!!」
すっかり聞き慣れた怒鳴り声と、清廉な魂の持つ力が虚無の空間を叩き割る。
世界に天地が、風が、光が戻ってくる。

気づくとミアリは無人の広場の真ん中で、ユーシウスの胸にもたれるようにして立っていた。
「ユーシウス、様……？」
「……ミアリ……」
けぶるような穏やかな微笑みに、涙がにじみそうになる。ああ、この人は確かにミアリの知るユーシウスだ。
「全く、末恐ろしい夢魔だな、君は……私の誘惑を拒むのみならず、いっそ神に反逆せよとは、並の悪魔に言えることではないぞ……」
優しい微笑みも束の間、早速説教を始めるあたりも、全くユーシウスだ。あまりにも彼らしい態度に、ミアリは気が抜けてふらりと体勢を崩した。
蝙蝠の翼はまだ背にあるが、肉体が疲労の限界なのだ。さっきから寒くて震えが止まらない。
「だ、大丈夫、か」

「な、なんとか。ユーシウス様は……？」
「情けないことだが、君を支えるので精一杯だ……とにかく、被害状況の確認、いや、着る物、を」
血のにじむ制服の袖をさするユーシウスの表情がかき消える。
同時に彼の雰囲気が変わった。
「ユーシウス、様……、あっ……!?」
軽いまばたきをした若草色の瞳の中央に、ぽつりと赤が落ちた。血のような、あるいは炎のようなその色はあっと言う間に周囲の若草色を食い尽くし、ユーシウスの瞳を真紅に染める。
同時にその背を覆いつくさんばかりに生えた、闇のように黒い十二枚の羽。同じ色に濡れ光る髪が、冷気を帯びた風にさらりとなびく。
「なかなかやるものだが、後一歩だったな、娘」
つぶやく声はユーシウスのものであって、ユーシウスのものではない。
黒髪に真紅の瞳に変じた青年を、ミアリはあ然として見上げていた。
そうだ、まだ寒いのだ。
悪魔の王は、消えていない。いまだこの場に残っている。

でも夢の中でほとんどの力を使い切ったミアリには、最早抵抗の術はない。

「ひっ……!?」

どうしようもなく、震えるミアリを黙って見下ろす悪魔の手が上がる。

反射的に眼を閉じてしまったミアリだが、次の瞬間感じたのは死に向かう痛みではなかった。

冷たい、しかし奇妙に優しい指先が、さらりと薄紫の髪を撫でている。

「リリスの子孫がアダムの子孫に魅了された挙げ句、その誘惑を蹴るとはな。なかなか面白い見世物だった」

リリスとは、初代淫欲公だった偉大なる女性悪魔。全ての夢魔の祖であり、夢魔自体をリリスと呼ぶこともある。

人の始祖である男の妻として生まれながらも、彼の元を去り……一説によれば、魔王である傲慢公の妻になったともされている。だが代替わりをしていない傲慢公と違い、すでに消滅しているはずだ。

「……傲慢公閣下……？」

自分もすぐに消滅させられるものとばかり思っていたミアリは、不審を覚えてそろそろと眼を開く。

途端に真紅の瞳に射抜かれて、慌てて顔を伏せてしまうが……黒髪の悪魔もまた、視線をついとミアリの肩あたりに落とした。

「……未練がましい男だ。まだ、リリスに心を残しているのか」
自嘲を含んだつぶやきに反応して、ミアリはぱっと顔を上げた。
「えっ、ユーシウス様!?」
リリスとは夢魔であるミアリのことだろう。つまりは魔王の中にいるユーシウスが、自分のところに戻ってこようと抵抗しているのだと、ミアリは都合よく解釈した。
「ユ、ユーシウス様がんばって！　お願いです、帰ってきて……!!　いつもの、髪もまつげも金色できらきらしているあなたに会いたいんです……!!」
ユーシウスの肉体に抱きついて、懸命に呼びかける。涙交じりの懇願を受け、形良い唇にほろ苦い笑みが浮かんだ。
「私も、かつては髪もまつげも金色できらきらだったのだぞ？」
天使だった昔を思わせる台詞をつぶやいた魔王が、ふと何かに気づいたような眼をする。
「……そうだな。お前の言うとおり、アシュリーもお前に会いたがっているようだ」
その言い方は穏やかで、まるで必死に立ち向かってくる息子に「参った」と降参してみせる父のようだった。
魔王にはそぐわぬ口調を怪訝に思った瞬間、あたりを支配していた冷気が緩やかに引いていくのが感じられた。
「――いいだろう、私には時間だけはある。いずれ必ず、この男の魂は完全に闇に堕ちる。そ

れまで待てばいいだけのこと――」

間近く見つめた瞳の色が、また変わっていく。変化は色彩だけでなく、諦念は秘めた情熱に、空虚は理想を目指す強い意志に取って代わる。

「いつかまた会おう。魔王に神への反逆をそそのかした、傲慢なるリリスの娘よ」

十二枚の黒い羽が、はらはらと舞い落ちては地面に触れる寸前で溶けるように消えていく。幻想的な風景の中、「明けの明星」はかすかに笑ったようだった。

「……あっ」

最後の一瞬、かすめるようにミアリの唇を奪った彼の気配は、やがて完全に消え去った。あ然としながら立ち尽くしていたミアリだったが、怒濤の展開と強力な精気を取り込み続けた反動が一気にきた。ぐらりと傾いだその背から、蝙蝠の羽が消滅する。

支えを求めて伸ばした腕の中に、ユーシウスの体がゆっくりと倒れ込んできた。

疲労にぼやけた視界に映るその髪は、金。閉じたまぶたを縁取るまつげも、金。

「やっぱり、このほうが、すてき……」

魔王が残した最後の羽の後を追うように、ミアリは元の姿に戻ったユーシウスと絡み合うようにして倒れ、そのまま意識を失った。



終章　ささやかな幸せ

ベルール騎士館最上階の端の部屋では、今日も賑やかな会話が繰り広げられている。
「だから、ちゃんとしたドレスを着たまえ、と言っているだろう!?」
叫ぶのは、ユーシウス・アシュリー。ベルール騎士館長補佐官の地位だけでなく、正規の補佐官室まで取り返した青年だ。
「ちゃ、ちゃんとしたドレスですよ、これは！　ただちょっと、ここがめくれやすいように」
小花を散らした桃色のシフォンドレスの裾に指先を伸ばし、説明しているのはミアリ。ユーシウスの監視下に置かれている夢魔の少女である。
「ミアリ、よせ。補佐官閣下には自分で裾をめくってみせるより、事故に見せかけて自然にめくり、かつ恥じらって見せるほうが効果的だ」
薄笑いを浮かべて入れ知恵をするのは、ユーシウスの従者であるカルガだ。体のあちこちに巻かれた包帯が痛々しいが、人にそれを指摘されるたび「こっちのほうがひどい」と半身を覆う火傷を見せつけることを日課としている。
――ニークレーンの一件から半月。当初は、本当に大騒ぎだった。

ベルールを代表する名家であるファルバート家から悪魔憑きが出た上に、その理由がルマリアの帝位さえも欲する深い強欲のせいだったのだ。ファルバート家の当主、シーガー・フォン・ファルバートは顔色ひとつ変えずに、末弟を歴史から抹消するとルマリア帝王に誓って許しを請うたとか。

意外にも帝王は寛大に、ベルール王家の直轄領とシーガーが所持する領地の一部をルマリア本国に差し出すことで不問に処した。その旨もシーガーは顔色ひとつ変えずに聞いていたらしいが、胸中では嵐が吹き荒れていたことだろう。

当然ユーシウスたちも無事ではすまず、ミアリが目覚めた時には逃げ出したはずの牢獄に逆戻りしていた。

話はベルールだけに留まらず、帝国内の他国を巻き込んで議論は紛糾。再度火刑に処す、いや異端審問に、いっそ帝国裁判にかけるべきと加熱する一方だったが、最終的に事態を総括したのは、胸元に獅子の爪痕を残したディオールのこんな提案だった。

『ですが、下手にアシュリーを刺激すると、あの強力無比な悪魔がまた出てくるのですよ？それならいっそ監視下に置いて、きちんと調査すべきでは？』

下手にしゃべってはいけないような気がして、ミアリは傲慢公云々という件はユーシウス自身にもまだ話していなかった。しかし少し離れた場所から法術を用いて様子を窺っていたディオールなどによる証言から、ユーシウスの肉体を使って恐ろしく高位の悪魔が顕現したことだ

けははっきりしていた。

だからこそ殺すべき、との意見も多かったのだが、返り討ちに遭う可能性も高い。結局はディオールがベルール騎士館長に名乗りを上げ、ユーシウスを監視する役目を担うと宣言したことで話は決まった。

ひとつには、ルマリア帝国内がいまだ不安定なことも関係しているのだ。ベルール以外の各国は今回の件に対する帝王の寛大な処置に不満を抱いており、権勢を誇るベルールが火種を抱え込んだことを内心喜んでいるとか。

人間界に疎いミアリには、政治的駆け引きについてはよく分からない。アドルニ様なら知っているのかしら、と、魔界に戻ったはずの彼のことを懐かしく思い出しながら、ミアリはにっこり笑った。

「でも、本当によかったです、ユーシウス様が戻ってきてくださって……」

ユーシウスの叱責とカルガの助言に従い、裾を持ち上げるのをやめた両手を彼女は豊かな胸の前で組んだ。

「あの……あ、悪魔が、ユーシウス様はもう消滅したって言った時……嘘だと思いましたけど、本当に、本当に、怖かった……」

「……あの時は、その、ば、馬鹿なことを言って、すまなかったな」

改めて安堵の息を吐くミアリに対し、ユーシウスはいまだ後悔し続けている「誘惑」の一部

始終を思い出して苦い顔をしている。
「つ、疲れていたのは、確かだ。しかし、君にその、だ、堕落を願うなど、恥知らずな真似をして悪かった！　私は君を救わねばならぬ身だというのに、いくら疲労していたとはいえ、あのようなことを口走るとは……!!」
「お気になさらないで、ユーシウス様。もちろんあれが本心だったとは思っていませんわ」
笑顔で気遣ったミアリの頬が、ぽっと染まる。
「でも……あの、ま、いえ、悪魔に乗っ取られながらも、私に会いに戻って来てくれたのは、とっても嬉しかったです……」
「ち、違う！　いや、違わない、君を助けに戻ろうとしたのは事実だが、だが違う!!　その……君だけではなく、私はただ夢中で、とにかくみなのところに戻ろうとしただけで……!!」
むきになったように弁解するユーシウスに、カルガが皮肉を飛ばした。
「その思考回路が、堕落の元だという話なのでは？　あなたのような堅物は、たまにはそこの夢魔とでもいちゃついて心の均衡を保つべきなのですよ。……もっとも、私が口出しするまでもなく、結構いちゃいちゃされていたようですが」
傲慢公が去る少し前に、カルガは意識を取り戻していたらしい。冷気を帯びた強力な魔力に抑えつけられ、起き上がることすらままならなかったそうだが、ミアリとユーシウスの姿をした悪魔がずっと接吻を交わしていたのは見ていたのだそうだ。

「だから、誤解だと言っているだろうカルガ!!　ミアリはただ、その、私に憑いた悪魔を追い払おうとしてくれただけだ!!」

「は、はい、そうです、もちろん！　決してやましい気持ちなんかなかったです!!」

声を合わせて否定する二人に、カルガは気のない相槌を打った。

「まあいいでしょう。言っておきますが、大司教閣下だけでなく、私もいつでもお側で見張っていることを忘れずに」

カルガは引き続き、私の従者に留め置きます。

ディオールにそう言い放ったユーシウスに対し、カルガは肩を竦めて傲岸に笑った。――いいでしょう。あなたがいつまで綺麗事を言えるのか、楽しみにさせてもらいますよ。

「……分かっている。だがカルガ、貴様自身がミアリを煽ってけしかけてくるのは少々卑怯なのでは」

「では、私は祓魔師のところに打ち合せに行ってきますよ」

ユーシウスの言葉が終わるのを待たず、カルガはさっさと身を翻す。

ミアリを人間にするというユーシウスの強い要望は、依然として残っていた。形だけ補佐官に戻ったものの、実際はニークレーンの嫌がらせを受けていた状態と変わらない身では他に用事もないので、現在はミアリを人間にする方法を探すことに腐心する毎日だ。

「……ミアリ。距離が近い」

カルガがいなくなったのを見計らったように、そろそろと近づいてきたミアリをユーシウスが注意する。

「あ、も、申し訳ありません。ただやっぱり、ユーシウス様の魅了（チャーム）の力は、すごくて……」

逆らえないんです、と上目遣いに訴えるミアリから、ユーシウスは慌てたように飛び退（すさ）った。

「わ、分かっているな!?　私が堕落すれば、また例の悪魔が現れるのだ!!　そうなればルマリア全土に被害が及ぶ、君だってただではすまない!!」

「は、はい、もちろん分かっていますっ!!」

ユーシウスのように姿勢を正し、一度はいい返事をしたミアリだったが、

「あの、でしたらいっそ、私だけどこかよそに移してもらったほうが……ユーシウス様と二人きりで、お側にも行けないなんて……ご、拷問に、近いのですけど……」

もじもじしながらそう提案すると、ユーシウスはわざとらしいほど渋い顔をしてみせる。

「……我々が監視下に置かれていることを忘れるな。個別の監視となると、それだけ大司教閣下の負担が増えるし……それに、君に何かあった時に、すぐに分からないじゃないか」

ユーシウスを監視下に置くのは仕方がない。だがミアリは夢魔なのだ、殺してしまえ、との声は高かったという。

しかしユーシウスは、「私を救おうと必死になってくれた彼女に何かあれば、私の中の悪魔が出て来てしまう」と譲らなかった。夢魔に魅了されているからそんなことを言うのだ、との

反論もあったが、魅了されているのならなおさら、下手な手出しをすれば彼の脅しは現実になるに違いない。

とはいえ、やはり悪魔と分かっている者を騎士館内に野放しにしていることへの反発は強い。おまけにミアリは一連の件によって夢魔としての力の使い方を覚え、見る者を否応なく惹きつける魅力を発揮し始めている。

ひとたびユーシウスやカルガから離れれば、危険な目に遭う可能性は高いのだ。

「まあ……ごめんなさい。私のことを、心配してくださっているのですね……」

もっともらしく何度も繰り返された説明を思い出し、嬉しくなったミアリにユーシウスは急いでつけ足した。

「わ、私は騎士だからな！　か弱い女性を守るのは当然のことだ!!　と、とにかく、君は早く人間になって淑女を目指せ!!　そうすれば私の気苦労もひとつは減る!!」

「はい!!」

実のところミアリの中で、まだ人間になることを望む気持ちは薄い。人間になった後、自分をどうするつもりなのかも怖くて聞けていない。

けれど、ユーシウスがそうしろと言うのなら。恐るべき魅了の力で自分を意のままにする彼が望むなら、そうしてあげたい。

「だから、すぐそうやって寄ってくるなと!!」



「きゃっ！　ごごごめんなさいごめんなさいッ!!」

また無意識に近づいてきたミアリに、ユーシウスがすかさず小言を食らわせる。

「ごめんなさいごめんなさい、だってユーシウス様ってやっぱりおいしそうで本当にごめんなさい」

「……全く、自分だけが拷問を受けている、と思っているような図々しさでは、淑女への道は遠いな……」

いつもの謝り癖を発揮しているミアリに聞こえないように、ユーシウスは小さくぼやくのだった。

〈終わり〉

あとがき

初めましての方は初めまして、お馴染みの方はいつもありがとうございます！　小野上明夜と申します。このたびは一迅社アイリス文庫でのデビュー作となる、『悪魔が来たりて恋を知る』を手に取っていただきましてありがとうございました！

別シリーズをご存じの方は、だいぶ毛色が違うので驚かれるかもしれないですが、根っこはいつもの小野上です。本当ですよ！　詳しくは読んで確かめてね!!

今作のヒロイン・ミアリは、あこがれの巨乳美少女です。そこからか、と思われるかもしれませんが、大事なことなので先に書く！　設定上、基本的に服を着ていないのは仕方がないのですが、担当さんには散々「服を着てください」と言われました。ままならない世の中です。しかし、少女小説の打ち合わせで、あんなに「服を着てください」と言われるとは思いませんでした。

そんな訳で、メインヒーロー・ユーシウスの口癖は「服を着たまえ」になってしま

いました。私の堅物騎士に対するときめきを詰め込んで作ったキャラのはずなのですが、蓋を開けると風紀委員長みたいになってしまった……おかしい。

サブキャラのカルガとアドルニは、「扱いにくい年上の部下」と「美形三下」という謎の属性を楽しんで書きました。それぞれに残念な人たちですが、いいところもあるはずなので、彼らのことも愛していただけると嬉しいです。

最後になりましたが、イラストレーターの石川沙絵様、きらきらしくも耽美でキュートなキャラクターたちをありがとうございました！　女体と騎士服への愛にあふれたイラストの数々を、読者のみなさまもぜひご堪能くださいね。

それではまた、願わくは次のご縁があらんことを。

ラストの某さんは「黒シウス様」で通っています　小野上明夜

一迅社文庫アイリス

悪魔が来たりて恋を知る

2011年10月1日　初版発行

著　者■小野上明夜

発行者■杉野庸介

発行所■株式会社一迅社
〒160-0022
東京都新宿区新宿2-5-10
成信ビル8F
電話03-5312-7432（編集）
電話03-5312-6150（営業）

印刷所・製本■大日本印刷株式会社

ＤＴＰ■株式会社三協美術

装　幀■小菅ひとみ（CoCo.Design）

落丁・乱丁本は株式会社一迅社販売課までお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。定価はカバーに表示してあります。
本書のコピー、スキャン、デジタル化などの無断複製は、著作権法上の例外を除き禁じられています。本書を代行業者などの第三者に依頼してスキャンやデジタル化をすることは、個人や家庭内の利用に限るものであっても著作権法上認められておりません。

ISBN978-4-7580-4262-8
©小野上明夜／一迅社2011　Printed in JAPAN

●この作品はフィクションです。実際の人物・団体・事件などには関係ありません。

この本を読んでのご意見
ご感想などをお寄せください。

おたよりの宛て先

〒160-0022
東京都新宿区新宿2-5-10
成信ビル8F
株式会社一迅社　ノベル編集部
小野上明夜 先生・石川沙絵 先生

第4回 一迅社文庫大賞

アイリス部門作品募集のお知らせ

**一迅社文庫アイリスでは、10代中心の少女に向けた
エンターテインメント作品を募集しています。
ファンタジー、時代風小説、ミステリー、SF、百合など、
皆様からの新しい感性と意欲に溢れた作品をお待ちしています！**

応募要項

大賞賞金 50万円

■応募規定
年齢・性別・プロアマ不問。作品は、未発表のものに限ります。

■応募規定
・A4用紙タテ組の42字×34行の書式で、70枚以上115枚以内
（400字詰原稿用紙換算で、250枚以上400枚以内）。
・応募の際には原稿用紙のほか、必ず①作品タイトル②作品ジャンル（ファンタジー、百合など）③作品テーマ④郵便番号・住所⑤氏名⑥ペンネーム⑦電話番号⑧年齢⑨職業（学年）⑩作歴（投稿歴・受賞歴）⑪あらすじ（800文字程度）を明記した別紙を同封してください。

■権利他
優秀作品は一迅社より刊行します。
その作品の出版権・上映権・上演権・映像権などの諸権利はすべて一迅社に帰属し、出版に際しては当社規定の印税、または原稿使用料をお支払いします。

■締め切り
一迅社文庫大賞第4回締め切り
2012年9月30日（当日消印有効）

■原稿送付宛先
〒160-0022　東京都新宿区新宿2-5-10　成信ビル8F
株式会社 一迅社　ノベル編集部『一迅社文庫大賞　アイリス部門』係

※応募原稿は返却いたしません。必要な方は、コピーを取ってからご応募ください。
※他社との二重応募は不可とします。
※選考に関するお問い合わせ・質問には一切応じかねます。
※受賞作品については、小社発行物・媒体にて発表いたします。
※応募の際にいただいた名前や住所などの個人情報は、この募集に関する用途以外では使用いたしません。

本大賞について、詳細などは随時小社サイトや文庫新刊にて告知していきます。

9784758042628

ISBN978-4-7580-4262-8
C0193 ¥590E

1920193005905

定価：本体590円 十税
発行　一迅社
一迅社文庫アイリス



高潔な魂を持つ聖騎士・ユーシウスを堕落させるため、人間界に送られた夢魔のミアリ。媚薬の力でユーシウスを夢中にさせようとするが、逆に薬を飲まされて彼に恋をしてしまう！　媚薬で積極的になったミアリの誘惑をはねのけて、彼女が半魔だと聞き出したユーシウスは『君を人間の淑女にする』と宣言して――!?　臆病で引っ込み思案な恋する夢魔と、生真面目で不器用な堅物騎士が繰り広げるキュートなラブファンタジー♥

悪魔が来たりて恋を知る